527
68

始

社會哲學 新學說大系 (2)

新潮社出版

ラッツェンホーファー著

社會學的認識論

宮崎市八譯述

帝國圖書館藏

大正 13.12.24 内交

527-68

序說

ラッツエンホーファー（Gustav Ratzenhofer）といへば、直ちに『征服國家說』や『種族爭鬪論』で有名な、墺太利の社會學者グンプロヰッツを聯想する。それほどこの二人の學說には近似點があり、同時に特異な立場を社會學界に領有するものである。兩者は共に政治學の畑に育つた人で、探求の主題も主として國家生活の起原、意義、歸結等に採られてゐる。しかし從來の所謂政治學に對しては、明らかに彼等は異端の徒である。トライチュケ一派の絕對主權論や、ルソー末流のデモクラティックな政治論を、一言の下に『形而上的』と嘲笑し、匹夫匹婦の離合集散や豺狼の交歡反噬を觀察する冷徹な眼光を、そのまま神聖なるべき政治生活の上に適用したのであるから、僞善的なるべき政治學の世界に容れられる筈はない。然らば純粹な社會理論として、彼等の學說が如何なる位置を占めてゐるかといふに、折角の警拔な論法も、社會心理學の域を脫し切らぬ英米社會學の傳統とは、容易に融和が出來兼ねるものがある。政治學に容れられず、社會學に融和せざるところに、獨特の立場を持してゐるのが彼等である。かくして彼等は所謂『社會學的國家學』を創始し、

その一派は政治學と社會學との二つの世界に横流して、中間に介在する抗議的な遊軍を形成するに至つたのである。

然しながら、ラッツエンホーファーとグンプロヰッツの間にも混同すべからざる者がある。同じ國家學說にしたところで、幾つかの重要な相違點が發見される。殊に方法論に於ては、前者が遙かに後者を凌いでゐるといはなければならぬ。グンプロヰッツの『社會學の基礎』や『種族爭鬪論』の中では、人種學の記述的方法が無反省な態度で使用されてゐる。彼の組立てた國家征服說は、グロテスクの偉大さを示してゐる。しかしこれを一個の法則科學たる社會學として見れば、仲々に杜撰の譏りを免れ得ない。社會現象の考察には獨特の方法と、獨特の對象がなければならない。それは物理學の方法とも違ふし、同時に人種學や人類學の方法とも違ふ。これを換言すれば、心理學と共に一個の法則科學說明科學ともならなければならぬし、同時に人種學や人類學に倣つて、宇宙進化の一部分として自己を意識しなければならないのである。かかる包括科學としての社會學を成立せしめるには獨立科學たることを權利づける對象、即ち社會現象を他の現象から區別すべき本質があるか、あるとすればそれは何であるか、を究明しなければならない。然るにグンプロヰッツの社會學には、かうした方法論的反省が著しく缺けてゐるのである。

グンプロヰッツの國家論は謂はば實體論である。恰もカントがライプニッツのモナドロギーに對して認識論を追加したやうに、ラッツエンホーファーはグンプロヰッツによつて殘された素材を前にして、これを社會學的に認識し得るかどうかを考へたのである。彼の名著『社會學的認識論』Die soziologische Erkenntnis は、かくして一八九六年（ライプチッヒ版）に世に現はれたのである。とはいふものの、この著述は單なる認識論的努力だけで終つてゐるのではない。カントの認識論は法則の可能如何を問題にしたが、法則そのものに觸れなかつた。然るに彼は『社會學的認識論』の前半で確立された方法をその後半で人種學的素材の上に適用して社會過程の法則を探求し、更にこの法則の一つの現れとしての國家學說を確立するに努めたのである。

その意味に於て彼は社會學的國家學の集成者である。彼の『社會學的認識論』はこの學派の典據であるともいへる。現在の獨逸學界で持て囃されてゐるオッペンハイマーも、同じこの派の流れを汲む者であるが、彼の立場は寧ろグンプロヰッツに近い。ラッツエンホーファーの包括的な社會理論を飛び越へて、單純なグンプロヰッツの征服國家說に追随し

てゐる傾きがある。國家は經濟的搾取のために起り、經濟的搾取と共に滅落すると說く彼の國家論は、從つて提論淺薄にして眼界狹小である。獨逸の社會學界で、ラッツェンホーファーに歸れの聲を聞かぬのは、寧ろ不思議とするところである。

ラッツェンホーファーの立論は獨創的であるだけに、また甚だ難解である。殊にこの『社會學的認識論』は、元々アカデミックな必要の下に書かれたのであるから、提言と提言との間に詳細な說明がなく、從つて卒然にこれを讀めば脈絡を缺いでゐるやうに思はれる。最も困るのは彼が無遠慮に奇拔な術語を造ることである。彼の如き獨創的な學者には、それも已むを得ないところではあらうが、日本語に譯して理解しなければならぬ我々には困りものである。かくの如き種々の難關がある上に、限られた紙數で彼の全體的な立場を明らかにし、細敍的な立論を跡づけることは、全然不可能だといはなければならない。故に一般的な解說を目的とする本書に於ては、彼の根本的な主張を卒直に紹介するため、全卷に盛られたところの、立論の嚴肅、觀察の深酷、人種學的素材のエキゾーティックな取扱ひ方等、原著者獨特の持ち味を寫すことは斷念しなければならなかつた。

尙ほ編章の配置に就て一言すれば、第一編は先づ原著の輪廓を彷彿させる以外に大して

意味はない。これに抄錄されてゐる片鱗によつて、原著者の眞骨頭を理解するは不可能でもあり、また大して望ましいことでもない。殊に彼の認識論上の主張を、結論の一部だけしか紹介し得ないのを遺憾とするが、この結論さへ最近までは社會科學の世界に受け入れられなかつたこと、それを納得させるため、如何に彼が該博な自然科學的及び心理學的智識を驅使し、以て堂々の陣を張つたかといふことを傳へ得れば結構である。その第四章『社會過程の理論』はラッツェンホーファーの原著書をそのまま飜譯したもので、彼自身の實體論的實說を概觀するには、最も恰好な一文である。

第二編は解說者がラッツェンホーファーになり代つて、より自由に意見を述べたものである。前部は認識論に關し、中部は實體論的提說に關し、後部は國家論に關して解說を加へたものである。第三編は國家論を更に敷衍して、政治學の本質と目的を說いたものである。國家といふ一つの歷史的形態を觀察するに當り、彼は常に社會進化の一般的原理に立つて眺めてゐるから、假りにこの編を應用篇と名づけた。第二編の國家論の解說に際しても參照したところであるが、この編は同じく、彼の著述にかかる『政治學の本質及び目的』Wessen und Zweck der Politik(一八九三年)の譯出と紹介をなしたものである。特にこの

書を選んだ理由は、應用篇の目的に添はしめるため、記述的色彩の勝つた、而してより端的な材料を提供せんとしたからである。應用篇とはいふものの、勿論その根本的な立場は『社會學的認識論』の理解を助け、彼の提示せる『社會過程の理論』を明瞭ならしめんとする意圖に外ならない。

一九二四年十一月

宮崎市八

目次

第一編 拔抄

第一章 合法則性の主張……………………四

科學以前の社會的探求——個人主義と統計學派——單純なる特殊社會科學——三重の世界——特殊社會科學との交渉——相互的促進——聰明なる思辨——科學の合目的性

第二章 統一的進化と關心の位置……………………一四

社會關係の生物學的發生——心的生活の生理的根據——意識的有機體の完成——生活と關心——關心の分化——人間的關心の性質——掣肘する兩傾向——新概念としての關心

第三章 社會過程の理論……………………三五

國民の起源——文化圏の擴大——實證主義の勝利——生活原力の生活條件——平和と好戰の岐路——絕對的敵意——個人化と社會化——變異と社會的必然——國家性

質の轉化——社會發達の諸要素——人口密度・支配の種々相——社會進化の復歸性

第二編　解　說

第一章　社會學的認識論の出發點…………四三
指導概念としての社會及び結社——社會過程の諸要素——欲求への還元
第二章　關心の性質及びその社會的機能…………五〇
關心の示唆——生理的關心その他——結社の究極目的——關心の排他性——關心の支柱としての個人——關心の調和及反撥——社會過程の極限——絶對的敵意の方向
第三章　社會過程の原始的狀態…………六五
結社過程の始原——群居生活の原始性——相對的原始社會としての部族——原始的結社生活の諸要素
第四章　社會過程の諸段階…………七四
モルガンの段階說——段階の二系列——分類の標準——群居生活から歷史的國家論
第五章　社會過程の歷史的形態…………八五
豐富なる資料——包括的な國家概念——社會的律動の兩極——國家的體制の錯綜と關心の鬪爭——征服國家と支配階級の保守的傾向——國家生活の必然的要求——社會制度の神聖化——保守的傾向と急進的傾向——社會的妥協の發達——國家の意義
第六章　鬪爭の發生…………一〇七
國家の個性——國家の統一と關心の共通——政治的關心の分類——普遍的關心——血族的關心——國民的關心——信仰的關心——營利的關心——職業的關心の鬪爭
第七章　鬪爭の發達…………一二九
戰鬪意志の强度——鬪爭の分野——戰鬪能力の大小——資本の收奪作用——小資本の拘束性——資本と國家權力——大資本の成長——擬似階級——地位の關心——階級の構成——制度及び風習の起原——黨派の關心——國家觀の根本命題

第三編　應　用（政治の本質及び目的）

第一章　新しき政治學…………一五四
擬似政治學——道德と政治——政治の實用性——二種の倫理學——人生觀上の一元

論
第二章　政治の本質（一）……一五五
親野の擴大――政黨の構成――黨派的親和力――戰鬪能力の問題――政黨の核心―
―急進派と過激派――政爭の基礎――政黨の異同――公開的結社及び祕密結社――
關心の支點としての政黨――國家の本質――國家の擬態――國家對政府――專制國
家――立憲的國家と猜疑の精神――專制政治對立憲政治
第三章　政治の本質（二）……一九〇
政黨の種類――經濟階級の政黨化――政黨の動的關係――政界の三區分――妥協の
根據――政治的因素としての時代精神――指導の現象及び指導的觀念――政治的技
巧としてのテロリズム――政治的戰術の數々
第四章　政治の目的……二二六
鬪爭の社會化――自由の價値――絕對的敵意の自己修正――平等の理想

――目次了――

帝國圖書館藏

社會學的認識論

ラッツェンホーファー
宮崎市八譯述

第一編　抜抄

第一章　合法則性の主張

ラッツェンホーファーの『社會學的認識論』の見地は、七つの部分に別けられてゐる。第一編『社會學的知識の性質』、第二編『社會學の心理學的基礎』、第三編『社會學の物理學的基礎』、第四編『人類の社會的過程』、第五編『社會學の基礎學說』、第六編『社會力』、第七編『社會發達と社會學的智識』のそれである。

この中で最も根本的な見地を表明してゐるのは、第一編の『社會學的知識の性質』に關する探求である。物理的諸科學、心理的諸科學が夫々に獨自な對象を持ち、對象の性質に應じて夫々の探求方法を有てるに對し、諸種の社會科學はそれ自身の獨立した對象と研究方法を有ち得るか、有ち得るとすれば、如何なる種類性質のものがそれであるかといふ疑問の解決が、この書の全體的な目標であり、同時にそれはこの編に於て大體の輪廓が與へられてゐるからである。從つて、ラッツェンホーファーが社會學的智識の探求者として、如何なる態度を採つてゐるかは、第一編によつて端的に判明される。この重要な一編は更に三個の項、卽ち第一『社會學の任務』、第二『社會學的探求の方法』、第三『智識及び科學一般に就ての實證主義』に細分されてゐる。

『社會學の任務』の項に於て、彼は人對人の相互關係に就ての考察方法の變遷を說き、新しき社會學の進むべき道を暗示してゐるのは注目すべきである。（以下原書第二頁より）

社會的探求『或傾向と他の傾向との關聯に就ては、少しもハッキリした意識を有たないでゐて、人は諸種の社會關係に向つて多大の注意を拂つて來た。只だ自己の生活關心が甚だしくこの社會關係によつて左右されてるといふ理由で、かくし來たつたのである。國家と法律と產業とは、如何なる場合にも研究の對象とされてゐた。然し最後まで、この種の智識部門には科學的基底が與へられなかつた。心は未だに物質的對象と獨立した或種のものとして殘されてゐる。人類の運命は神または機會の作つた作爲物といはれる。かうした物の考へ方に取つては人間の相互關係に科學的機構の存在を認めることは、全然不可能だと云はねばならぬ。元々心理的科學は物理的諸科學の發達から遙か後に取殘されてゐたが、その揚句十九世紀末に至つて、一切の存在は法則に支配されるものであるといふ認識を、無理矢理に押しつけられたわけである。專ら人間の相互關係にのみ關つてゐた諸研究は、上

は、プラトンの勞作から近代のそれに至るまで、記述的色彩が勝つてゐて、因果的說明は僅かに附隨的に行はるるに過ぎなかつた。ガリレオまたはベーコンの世界觀に終始する限り、歷史的事象の原因を見出さうとする努力に、進步は幾何も齎らされる筈はなかつた。マキアベリーまたはモンテスキューと共に、所謂歷史學派が政治科學の上に勢力を有ち始めたのである。………

個人主義と統計學派　『人間關係を眞に科學的に取扱つたのは、マルサス及びスミスを以て嚆矢とする。然し人間の經濟的關係に關するこれらの學說は、今や彌が上にも缺陷を暴露しつつある。それといふのは、偏へにその基底に人間の相互關係に關する的確な學說を缺いてゐるからである。即ち彼等がその經濟學說を發見した當時は、未だ社會科學の合法則性といふものが、充分に理解されてゐなかつたからである。のみならず、新しく社會學を創設しようとする當時の試みは、未だ達成の域に至つてゐなかつた。その中でハーヴァート・スペンサーの努力は典型的なものであつたが、合法則性の認知に對する狐疑を一掃できない內存的な理由を有つてゐた。それは彼の社會的探求の出發點となつてゐたものが、一に個人の性質如何といふ假說だけであつたからである。社會學上の眞の問題は、社會そのものに本具せる傾向乃至活動は如何といふことである。從つて佛米の兩國を始め各國の統計學者が、社會をその『水準』に於て理解しようとした時、彼等の努力は結局失敗するしかなかつた。社會は平均人の現象ではない、それは個人の活動が遍ねく相互關係の法則によつて滲透された結果、そこに生み出される特殊の現象である。かくて社會科學は、自己が必然に一個の法則科學として發達すべきものであるといふ信仰を有つことが出來ず、從つてあらゆる探求に必要な激勵的拍車を缺いてゐた譯である。………

混沌たる特殊科學『社會學的智識が綜合哲學（一般科學）の一部として成立し得るといふ考へは、從來の學者が一齊に反對するところであつた。彼等の信ずるところによれば、その反對に、社會學の主題は既に人種學又は人口學といつた特殊的記述科學によつて、既に涉獵し盡されてゐるといふ。かうした考への必然の結果として、一群の特殊科學は分立し相剋し、少しも自己の目的を意識することなくして、人間の相互關係に當面してゐる次第である。歷史的基礎の上に立たぬ法學は、社會的必要に應ずることが出來ず、實證的基礎を缺いた政治科學は漸次に權威を失墜するのみである。人種學、人文史等の特殊科學は、科學の幹に小枝を張るに忙がしく、統計學は見當違ひの數的材料から社會現象の法則を發

見し得ると輕信して、社會生活の本質は不可見的心理的だといふ事實を忘れてゐる。歴史學人間の相互關係に關する狂態に捕へられ、法醫學、犯罪人類學、精神科學といつた當然の實驗的方途を進むべき筈の諸科學は、人の徳性に關する自棄的解釋の本據たるを以て甘んじてゐる（ロンブロゾー、ベネディクト等々）。この一派の自棄的道徳觀に對して、倫理學が從來の哲學を提げて太刀打ちしようとしてゐるのは笑止の業である。かく人間の相互關係を取扱ふ特殊科學は、今のところ混沌の裡に行き惱んでゐる。自然科學があらゆる方面から既成の思辨哲學の破壞に取掛つたにも拘らず、その一面に社會的關係の考察は、何よりも先づ哲學的論究を必要とするといふ事情であつて見れば、かうした混沌もまた餘儀ないことと云はねばならぬ。然しながら、シエフレ、グンプロヰッツ等の學者が經驗してゐるこの種の困難も、社會進化といふ世界的過程に適確な科學的表現を與へようとする我々の努力を塞ぎ留めることは出來ない。』

最近まで社會學に獨立の分野――心理學と鴈行する獨立の分野を與へようと主張した人達が、心理學者から猛烈な反對を蒙つたことは人の知る事實である。ラッツエンホーファーはこの種の心理學者に抗辯していふ。（原書第五頁より）

三重の世界『從來の哲學者は科學の對象として、二つの領野をしか認めなかつた。心理生活と物質界の現象とがそれである。然しここに第三の領野が見逃されてゐる。即ち物質界の現象と共に心理生活を伴つてゐる社會生活が、從來の哲學者から全然閑却されたのである。我々は新しくこの無視された領野に眼を注がなければならぬ。それは一般現象に對する人間性の區別を指摘して、その由來する原因を人性の深奥に潜む本能の裡に認めよと教へる。それは我々の眼前に、これまで我々の眼光が曇つてゐたため、一部分は個人意識の學に屈し、他の部分は物質界の科學に屈するものと考へられてゐた廣大な世界を展開する。それは自らの基礎原理を探して貰ふために、哲學の一部分であり且つ心理學と協同することを忘れぬ一學問、即ち社會學を要請するのである。かくてこの社會生活の領野を開拓する爲めに、社會學が歴史及び人類學の上に立つて人間の外部的相互關係を明らかにすると共に、同時に心理學が生理學を基礎として人間の内部的性質を探求することが必要とされる。而も兩者とも自然科學と歩調を合はせて、人間の物理的性質を理解することに努めなければならぬ。何となれば、この提携によつて、始めて自然科學上の智識が社會學の上に攝取されるからである。

特殊社會科學との交渉『社會學なき哲學は生理學なき心理學と一對である。單なる思辨として兎角主觀的錯誤に陷り易い。宇宙學、心理學、實體學等の如き形而上學にも社會學は伴隨する。それは世界、我、永遠等の觀念も、これに人間の相互作用の觀念が對比されぬ限り、明白に限定され得ないからである。加ふるに社會學上の問題が考慮に入れなかつた故を以て、哲學者の道德的理想（人道、德、幸福等）は單なる幻想に終つてゐる。我々がかうした道德的理想の眞意義を了解し得るのは、社會意志に關する社會學的智識を充分に味解した時だけである。その他社會學は、政治學といふ人間の綜合關係とその最も根本的な諸表現を取扱ふ科學に向つても、哲學的基底を提供するものである。物理學乃至化學が諸種の自然科學に對する關係は、その儘社會學が人間關係の諸科學に對する關係に當用される。例へば機械學との關係は、社會力の法則と政治學說との關係に異るところがない。故に社會學の目的は、單一な社會現象に向つて說明を加へることではない。かかることは社會學に屬從する諸種の特殊科學の任務で、社會學そのものの仕事は社會生活一般に妥當する法則を解明することである。

相互的促進『社會學は實際に於て、永い間ある一方面の社會關係を討究して今日に及んだ諸種の特殊科學の綜合の結果として生れ出でたものである。それは自然科學が、不斷に蓄積されて來た經驗及び觀察の結果として生れたのと揆を一にする。』かかる性質の社會學が、一個の智識體系として常に完全を期し得ないことは當然で、それは畢竟社會關係の探求を整頓する一個の基準たるに過ぎぬものである。然しながらその反面に、副次科學の發達は基礎科學の發達を俟つて始めて可能である。前者の體系は一般的研究が、ある程度の效果を收め得た後でなければ確立しない。かくて社會的智識によつて擴充された哲學の出現を俟つて、始めて倫理學と美學は健全なる發達を遂げ、法の哲學、政治學、經濟學は眞の意味の科學として成長することが出來るのである。』

第二項卽ち『社會學的探求の方法』は、題名に示すところを論述してゐる。ラッツエンホーファーに依れば、社會學の獨立性を拒否する場合に、社會學が最初からそして未だに、完全な探求方法を有ち合せないことを以て證明しようとしても、充分な理由とはならぬといふ。天文學などといふ正確科學中の正確科學ですらも、探求方法の不整備に苦しむだ經驗を有つてゐる。社會學の進むべき道はいふまでもなく、從來の社會的探求の中からその思辨的構成に伴ふ諸種の誤謬を除去することによつて、一歩づつ眞理に近づくのでなけれ

ばならぬ。續いて彼はいふ、自然科學が如何に實驗的歸納の方法が唯一至上の方法だと大聲疾呼しても、社會學の對象には自ら異つた性質があり、從つてまたその方法は自然科學通りには行かぬ。社會學は少くとも現在の狀態では、ある程度まで思辨的智識の杖がなければ獨り立ちが出來ぬものである。彼自身の言葉を以て續けよう。（同上一〇頁）

聰明なる思辨『自然科學に於ける探求方法は全然目的の意識を缺いてゐるから、社會現象に於ては少くとも思辨的智識を以て、排列された智識を檢覈する試金石としなければならぬ。心理的科學の成功は歸納と演繹とが相補ひ、聰明なる思辨の必ずしも排斥されない場合にのみ期待されるといふ、昔からよく經驗された事實は茲でもまた確められる。多くの科學または特殊部門が、かうした二つの方法を使ひ分けないために、退引ならぬ困難に逢着してゐる例は、現に至るところでこれを見受けられる。あるものは歸納偏重のために無意味な領域を彷徨し、あるものは演繹を重視する餘り煩瑣な詮索癖に陷つてゐる。殊に自然科學には、最早やこれ以上の分析を加へ得ないといふ殘滓の伴ふのが普通であつて、この部分は思辨によつて處分するより外に途はない。しかし如何に巧妙なる思辨も、現實的背景を見失ふに至つては、一顧の價値をも有しないものである。

第三の項『智識及び科學一般の實證主義』は、最も熱心なるコムトの實證主義の協贊者として、自らの立場を說明してゐる。それと共に、同等の猛烈さを以て總ての自然科學に共通した『無目的』または『無關心』の態度を排擊してゐる。實證主義の立場と目的または價値の意識とが、よく折合ふかどうかといふことは、尙ほ一應の疑點の存するところであるが、總ての純理的な科學的探求にも、その背後に現實的關心の存在を主張するのが、ラッツェンホーファーとして一個の立場である。（同上一七頁）

科學の合目的性『科學は最早や單なる事物の分析、現在及び過去の探求だけで滿足してゐない。寧ろ分析と反省とを以て豫見の手段たらしめようとしてゐる。ハックスレーの言を藉りれば、現在の狀態の中から過去及び將來の狀態を析出する心掛けが必要で、かうした心掛けと智識とを俟ち、始めて夫々の科學は人間の生活の中で自らの地位を失はずに濟むのである。……………科學があらゆる現象に當て箝るといふ要求を有つてゐるのは、單なる智識欲の滿足のためばかりではない。かうした智的欲望とは比較的關係の薄い諸の實際的欲望を追求する上に於いて、かうした一般的法則が必要とされるからである。即ち過去の眞理は、必ず將來の上に再現するに相違ないといふ考へが、社會科學の基底に存してゐ

るのである。』

これをネゲリの言葉に譯すと、『因果的智識の妥當性は、それが天文學と同程度の確實さと精密さとを以て、將來の出來事を豫斷し得るか否かによつて決する。』といふことである。社會學方法論の根本的命題として、人間關係の合法則性が主張されるのも、畢竟はかうした實際的必要に促されてゐるからに他ならない。

第二章　統一的進化と關心の位置

『社會學的認識論』の第二編は、社會學の心理學的基底を取扱つたものである。これは第一『宇宙に於ける人間の位置』、第二『意識の生物學的起原』、第三『意識の先天的內容』、第四『意識と外部世界の對立』の四つの部分に分たれてゐる。進んで第三編も亦四つの部分に分ち、第一『自然法と社會學的智識の關係』、第二『宇宙進化の諸學說』、第三『物質の分化とその結果』、第四『生物現象の諸學說』となしてゐる。第二編及び第三編は、ラッツエンホーファーの自然科學上の該博な智識と、鋭敏な抽象力とを遺憾なきまでに提示したものである。殊に前編で唱導した社會學と心理學及び物理學の協同を、實際探求の上に手際よく應用してゐるのは賴母しい一點である。例へば第三編で、ワイズマンの遺傳說が、社會學構成の上に有效に使用されてゐるが如きは注意すべき一事でなければならない。

兎に角、この兩編に展開されてゐる主要問題は『生物學的進化と社會學的進化の融合』といふことである。この思想は彼の『社會學的認識論』の全編中で、可なり重要な提說と認むべきもので、第一編、第二編、及び第三編前半の議論は、たゞこの結論を導くために用意された伏線だともいへる。以下第三編後半部の結論を引用し、これら諸編の理路を髣髴せしめ、以て彼の進化論的見解を紹介することにする、(原書第一一七頁より)

社會關係の生物學的發生『生物學的法則と社會學的法則との一致が、永い間認められずに來たのは、社會的單位の活動が有機體の細胞の活動より、遙かに不規則に見えることが根本的な原因となつてゐた。細胞の有機體に對する附屬關係は一見永久的のやうに思はれる。それは個體と共に現はれ、個體と共に消え失せる。社會の單位とは違つて、自己の結合關係を變更することも出來なければ、時を同じうして數箇の機構に附屬することも出來ない。然し原始力によつて化成された當初の有機體は、同時に有機的機構にも社會的機構

にも、その一分子として附屬してゐたのである。もし有機體が胚種から發達を遂げる場合に、自己の獨立した欲望に從つて自由な活動を營むものであれば、彼は進化の當初から隔離されて孤立するの外はない。さうした孤立的生活條件の中にあつては、彼は自己の種族的運命を展開することも出來なければ、自己の生存を保持することも出來ない。例へば原始生活力は、先づ生殖といふ現象を生む。これは謂はば個體が自己の肉體的限界を越えて擴大して行くのであるから、先天的關心は當初から個體を驅つて、肉體的感性を超えたある關係に入り込ましめ、この關係の內部に於て、他の個體との間に紐帶をなはしめるものと認めねばならぬ。して見ると、ある生物をして肉體的に、次いで精神的に進化を遂げしむると同一の關心が、その生物をして社會的關係の要求を起さしめたのである。即ちこの社會的關係なくしては、生物は自己のより狹隘な生活目的をさへ完全に充たすことは出來なかつたのである。かくて社會的關係、從つてまた社會的構造は、我々の生物學的進化の結果であり、その中に作用する原始力の所產、分化的遊離作用のそれである。自己保存の欲望、生理的關心、自己の個人的及び社會的關心を貫徹しようとする努力、それらのものが我々を社會的關係の中に趣かしたのである。

心的生活の生理的根據『かくして我々は社會進化の楷梯の中に、生物現象に現はれた諸種の法則を發見する。――恰も化學、物理學、宇宙學等の法則が、進化より一段前の進化の楷梯を觀察することにより、始めて明瞭にされると同樣である。從つて世界に於ける諸法則の統一は極めて自然に立證される。この統一的法則を觀取する上に於ての困難は、原始力の化分に對する先天的關心の重要な位置を理解することにより容易に消失する。社會進化の過程は、初めは生理的關心の直接的な結合に始まり、次第に複雜な心理的內容を備へるやうになつて行く。これに似た現象は個體の心識的發達の中にも發見される。即ちそこでは、意識的發達に伴へる思想聯合の範圍が擴大され、これを通して追求される個體の關心も一層複雜になつて行くのである。ただ玆で忘れてならないのは、複雜な心理的內容と雖も常に生理的關心の中に自己の根を下してゐることである。低級な有機體ほど、その社會的構造は種族の物質的必然に依存することは深く、從つて同時に單純である。植物界の社會的構造は種の增殖の一次的所產に過ぎぬ。動物界の社會的構造は一面が同じ增殖の結果であると共に、自然淘汰の所產であり、他種族に對する掠奪また防禦のために結合した成果である。人間の場合に於ても、根本的にいへばこれと相違がない。ただ文明が發達す

るにつれて、間接的な欲望の滿足が社會結合の動機となるので、結合の動機と種族の物質的欲望の關聯は、中々捕捉し難くなつてくるのである。然しながら、社會的世界が心理的相互關係の世界に向上した後とても、それが爲にその世界で生物學的法則が無效となるやうなことはない。そこで我々の第一に心掛くべきことは、生物學的條件を、社會學上に巧妙に處分することである。蓋し如何なる心理的現象も現實の實在及び現象の中に根據を有たないといふ譯がないからである。例へば社會結合の動機が生理的關心に近ければ近い程、社會の單位が自己の結合關係から脫出するのが困難となる。この場合社會單位が、自己の結社と生死を共にする事情は、恰も有機體に於ける細胞の運命と變るところがない。血族を基礎とした結合がそれである。これに反して、もしもある結合關係が一時的のものであつて、この關係を持續することは個人に相應の利益を與へるが、さればといつて個人の生物學的必要に大した影響を與へる程度のものでない時は、個人は自由に自己の結合關係を變更することが出來る。この社會的融通性の强弱は、意識的有機體の大小によつて左右せられる反面に、その先天的關心によつて制限せられてゐる。卽ち結合關係の破壞によつて、先天的關心の物質的方面のある一部分が無視されることになれば、彼自身が死滅しなければならぬからである。有機的複合體の一部として發達した細胞が缺ければ、これと聯帶してゐた他の細胞も死滅するものである。

意識的有機體の完成『人間の意識狀態が發達すると、社會そのものが自己の個人的關心を擁護する上の便宜たることを意識するやうになる。この意識の過程に應じて彼の內的關心の社會的反面は益々助長されて行く。故に個人化的分化の傾向は進化のある道程に於て、必然にその反社會的效果を失ふやうになる。社會進化の傾向が、これに代つて活潑となり、同時に意識有機體の完成を促進することになるのである。從つて人間の社會的性質を深く觀察すれば、あらゆる現象がその法則に於て脈絡してゐることが判明される。自然科學の正確な智識を不斷に參照することにより、我々は社會的生活現象と他の一切の生活現象とが、發生的に一致してゐることを確認するを得るのである。』

この生理現象と社會現象の關係に對するラッツェンホーファーの思想を、より具體的ならしめるために、第五編の一文を引用して見たい。この一條の文章は二つの現象の關係を明確にしてゐるばかりでなく、彼の主張の特色とすべき『關心』の理論を示す上に於ても、好個の材料を提供するものである。（原書二七一頁）

生活と闘心『有機體は形態學上からいつても、胚種に內在するある先天的傾向に從つて發達を遂げたものである。同樣にその心理生活もこの發達の過程內で、豫め胚種內の神經系の組織を原型として模造されたのであるから、人は社會的世界に立つ場合にも、その先天的闘心に應じて活動を營むの他はない。換言すれば、彼はその社會生活に於て胚種能力相當に、自己の先天的闘心及び一定の生活條件を通して體得された諸種の闘心に從つて行動を營むのである。ありとあらゆる生活行爲は、最初窺ひ知ることの出來ぬ原始力から生み出されたもので、次いで生活條件に對する適應の過程を通して種々に分化する。假りに分化的原因が存在しなかつたとすれば、全宇宙は依然として原始物素の無限の擴大として止まり、有機現象は到底同質的細胞の反覆的活動に過ぎなかつたらうと思はれる。生活條件の分化變異があつたればこそ、生理的闘心は生活に目覺め來たり、個人的闘心は意識にまで覺め來たつたのである。生活といひ意識といふのは、種の闘心の分化的遊離の現象に過ぎないのである。

闘心の分化『生理的闘心は種々異つた生活條件に適應して、種々異つた有機的進化を捲き起す。即ち個人をして適應の生活を營ましめ、その結果彼を同胞に對する拮抗の位置に立たしめるのである。適應の動作は或は自然淘汰の過程となつて現れ、或は適者の生存となり、また或は不適者の移動となつて現はれる。約言すれば、生存競爭を通して個人的敵對の闘心が姿を現すのである。種族の闘心だけが作用してゐる限りは、社會的闘心は萬人に取つて平等不變である。然し個人的闘心が額を出すと共に、社會的闘心もまた自らを分化し始める。これ各個人が彼が有機界の一種族に屬すると一社會に屬するとを問はず、常に特殊の社會闘心を備へ、それを意識し始めるからである。有機世界が別々の種に分化して行く過程を嚴密に考へれば、生物全體を通して行はれる社會的分化の現象と見做すべきである。人類もしくは他の動物種族の社會的過程にあつては、この分化の過程は最初形態學的發達の段階上に行はれ、次いで知的發達の段階上に行はれる。總ての發達が最後に生活の知的表現といふ標的に向つて行く過程の中に、我々は有機的世界と社會學的世界の關聯を見出だすのである。かくてこの二つの世界の過程的段階は、單なる假設として主張せられるばかりでなく、その實證は頗る明白に我々の內部及び我々の環境の隨所に示されてゐる。

人間的闘心の性質『總ての動物の中で、人間の分化的過程か最も複雜であるのは、彼が

有機的進化の最高所に位するからである。生理的構造の上で、どんなに近い傾向があらうとも、動物を人間に比較するのは無謀である。それは人間は意識生活の上で非常に永い分化の過程を通過して來てゐるから人間の最下級のものと動物の最上級のものの間には、尙ほ越すべからざる溝渠が横へられてゐるからである。卽ち特殊の性能を有する人間が、動物の世界から更に一段の進化を遂げたのである。故に人間の社會的分化に就ていへば、大部分が生理的闘心とは極めて緣の遠い闘心の範圍に於いて行はれる。これに反して、動物の闘心が行はれるところは、ただ直接的な作用を營む生理學的衝動である。人間社會の分化が單純な生理學的衝動でないのは、かかる事情に基くのである。個人的闘心にはその前から觀念聯合の作用が附隨してゐる。人はこの作用によつて、自己の對人行動の上に意識的な、少くとも本能的な反省を加へることが出來る。しかしかうした反省が單なる個人的闘心から派生される限り、この反省は人をして生理學的闘心の追求にまで復歸せしめる。例へば、條件を置き自分だけの立場を有つてある社會團體に所屬してゐる多くの人は、勢ひエゴイストになり易い。同じ反省でも、種の闘心また社會的闘心から派生するものになれば、人をして道德的自己否定の方向に走らしめ、自らの個人的幸福を社會の幸福に組み入れまたは從屬せしめる衝動を起さしめる。この自己否定の傾向は一個の進化的現象として、創造的現象一般の基礎原理を暗示する。卽ち生命原力が種の本能を通して、分化及び變異に伴ふ墮落を阻止しようと努力するのである。

掣肘する兩傾向『相互關係が融合的な關係を生み出すのは、社會の自然的な進化に取つて不可缺の現象で、個人的原始化の傾向に對抗して現はれる。生物界でこれに類した現象は、變異を通して惹起される生物學的變質が、不斷に胚種原形質の再現によつて常型に引き戻されるのである。個人化を通して惹起される變質は、一面にあつて、社會結合に於ける自然的または强制的な個人の壓服といふ現象を招來する。生活によつて個人的闘心の喚起されることが甚だしければ、社會的拘束によつて個人の退化的分化を制限する必要も大である。萬人の萬人に對する戰ひといふが如きは、種族とその社會的構造とによつて、危險この上もないからである。個人及び社會の發達の途上には、常に過度の分化、または不自由な社會化の結果として過剩物が堆積する。自然はその生活條件を通して、この堆積物を一掃し、營養及び繁殖の必要に基いた社會的必要の大道を淸淨ならしめねばならぬのである。

新概念としての關心『我々が自らの生存に就て抱き得る最も適確な概念は關心といふことである。この觀念は生物學的過程に於ける主導原理たるに止まらず社會學的過程に於ても同じく主導的な役目を働らくのである。先天的な關心は生活條件の變化を通して變改されて行く。この關心の變改に應じて社會的構造もまた分化を遂げる。我々の最初に心得て置かねばならぬことは、關心の變化が社會過程の展開に先立つことで、それは恰も生活條件の自然的變化が、この關心の分化に先んじて行はれる如きものである。關心分化の原因は、人間の必要と、宇宙の一部としての生活條件の變化との中に、これを見出すべきである。生殖及び食物探求の關心は、總ての人間的必要の源泉である。それは變化極りなき形を取つて、人類の生物學的、心理學的、及び社會學的過程の中に現れ、そこに於ける總ての運動の主導的動機となる。この故に實證哲學にあつては、關心は目的といふ矛盾概念に取つて代るべきである。何となれば、誤れる假說、及び心對自然の關係に就ての、曖昧なる見解を惹き起す最大の機緣となるものは、後者即ち目的の概念に他ならぬからである。かくして、我々はこの概念を一掃することによつて、前途多幸なるべき形而上學建設の途に上らなければならない。』

第三章　社會過程の理論

第四編は『人類の社會過程』と題して、次の問題を論じてゐる。第一『原始の社會構造』と第二『社會構造の進化と高級社會』との二章は、好戰種族と產業種族の混和により、國家及び人民（das Volk）の誕生を見たと說くのが主題である。第三『國家內に於ける社會的分化』は、それの結果として國民（die Nation）が生れたことを說き、第四『文化の世界と社會的分化』、第五『社會過程の擴大全人類の包括（商業、植民、移民）』を以て、彼の見解の發展を明らかにしてゐる。この第四編全體を通じて力說されてゐる觀念は、『國民』の觀念と『文化圈』の觀念の二つである。

國民の起原『征服及び被征服兩種族の集合として見たる人民（フォルク）が、更に分化を續けるに從つて、種族的反對因素の混淆が漸く著しくなり、指導的、作業的、行政的の社會的機構もまた發達する。かかる勢ひの究極するところ、內部に抗爭を含むにも拘らず、尙ほ一個の社會的統一體たる實を失はぬ國民（ナチオン）の出現となる。即ち國民は、征服國家の基礎の上に行は

れた社會過程の、究極に於ける成果といふを得る。

文化圏の擴大『協動的社會進化は文化圏の中に行はれると共に、無數の關心もまた作用して來る。而してこの關心は、國家の内部には分化が行はれ、國家の範圍を越えて類似の文明の中に、自らの支持及び滿足を求めようとする。それ故に多くの社會的構造の構成分子は、國家の制限を越えて分散し、その結果國家を無視した文化圏の社會的分化が行はれるやうになる。文化圏の社會的分化は、權力の組織としての國家に取つては常に危險を意味してゐる。それは國家の排他性の内部的必然性を解體し、社會的關係の擴大を通して、政治的境界及び權力の作用範圍を擴大するのである。領土の擴張と大帝國の創設に對する可見的の動機は、素より征服本能であるけれども、その内部的原因をなす者は、實に文化の同質及び國境と社會關係の交錯といふ現實的存在である。國家が政治的優越を通してある文化圏の内部に指導的地位を確立するといふ現象――ギリシヤ系文化圏の中に於けるアテネまたはスパルタの地位――、又は國家が幾つかの文化圏の上に主權を擴大して行くといふ現象――ローマ帝國、フランク帝國、カリフ帝國の場合――は、いづれもこの間の事情を語るものである。文明の類似した國民によつて蠶食される脅威を免れるためには、國家は自己の政治的個性を守護する前に、先づ社會的個性を維持すべきである。少くとも、外國との社會的關係が稠密する結果、自己の社會的條件が弛緩するのを防止すべきである。何となれば、この擴大した社會關係は、直ちに政治的混和にまで發達し易い性質のものであるからに外ならない。』

續いて第五編の『社會學の基礎學說』は、左の如き問題を取扱つてゐる。第一『個人化と社會化』では、權力と合議、秩序と自由の相互關係が究明され、第二『社會分化と社會過程の主導原理』、第三『社會的個性』では社會形態論が說明されてゐる。第四『社會過程完成の條件としての諸傾向』、第五『社會過程の基礎現象』は、社會を一個の過程なりと觀ずるラッツエンホーファーの論旨を明示したもので注意すべきである。

第六編の『社會力』は第一『社會的衝動』、第二『個人意志』、第三『個人意志の發達』第四『社會意志』の四章に分類される。終編たる『社會發達と社會學的認識』と題する第七編は、第一『個人意志本來の活動』で意志自由の問題に觸れ、第二『社會意志本來の活動と個人意志との交渉』と第三『意志進化の方式』は、夫々の題名の示す如き問題を論じ、最後の第四『意志の表白としての人間進化の主要現象』は、文化、政治、文明の發達を概

觀し、次の結句を以て全卷が終つてゐる。
實證主義の勝利『智的進化の神學的方面は、社會の社會化を實現する必要から、個人の絕對從屬を强要した。形而上學的方面は個人を高揚して、彼自身に取つて必要な社會化を犧牲にした。然るに智識はその反面に於て、實際的基礎の上に立つことを忘れなかつたのである。その結果、社會化の萬全なる意義が恢復され、個人は物理的、知力的、道德的に自己を完成するの機會を得た。神學的智識は神の獨斷に出發して、不安または懷疑の中に終始した。形而上學的智識は理性の信賴に出發して、悲觀主義または唯物主義に墮落した。これに反して實證主義の出發點は、一個の自然的事實として實證せられ得る人間の倫理的進化である。そしてそれは、我々人間が萬物の相互依存といふ宇宙的體制の中に、自己を完成し得べしといふ確信を以て終るのである。』

これがラッツエンホーファーの最後的結論であるが、この結論を裏付ける最も重要な論理は第五編第五章である。『社會的過程の基礎現象』と題したこの一章で、ラッツエンホーファーは、その基礎現象を個條書にして示してゐる。即ち『社會は一個の過程なり』といふ基礎命題に基づき、彼自身の方法論を適用して、謂はば實體論上の學說を展開したものである。

以上大體の骨組を紹介したから、全篇に收められた彼の全學說を抽象し、その要領を摘錄して考査して見ることにしよう。

合法性の具現『人間の社會的過程は、第一、その隅々にまで一定の力が作用してゐる。第二、一定の秩序を以て行はれる。第三、內部的必然に支配される。この三つは何れも社會學の領域に一定の法則が支配する證據である。

生活原力と生活條件『人間の營養と繁殖とは、あらゆる社會的接觸の機緣である。この二つの活動が刺擊となつて平和な結合關係が生れ、又は抗爭的な分離關係が生れる。營養及び繁殖が社會的反作用の中に現はれると、一方では自己保存の本能(食の競爭)となり、他方では性の本能(血緣のもと)となる。社會的接觸の原動力は何れを取つて見ても、この自然的衝動の變形物、即ちその進化的形態である。これは個人の活動を支配する諸種の關心が、何れも先天的關心の變態または進化的事實であるところから來る。如何なる生物にあつても、自己保存の本能及び性的衝動は生活條件と對立する。種族と個人とはこの生活條件に適應し、自己の先天的能力に從つてそれを利用しようと努める。かくて人間とその

社會とは、生命力と生活條件との間に生み出された化成體である。生活原力は、夫々の進化的階梯に應じて人間の稟性の中に作用し、生活條件は地球の發達と共に種々の變化を見せるものである。

平和と好戰の岐路『總ての生物は支障を避けて、自己の本原的衝動を充たさうとする根本の傾向を持つてゐる。働らくことなく、また鬪爭を避けて食慾を充たさうといふのが彼等の願ひである。生殖の上に制限を受けたくないといふのが彼等の念願である。この衝動は人間をして地球の全表面に擴がらしめる。成るべく安易に食を求め、雨露を凌がんがために他ならない。從つてこの衝動は間接に、人間と而して人間の社會的構造に變化を齎らす機緣となる。この衝動に從ふときは、自己の生活を取り換へまたは變形することを餘儀なからしめるためである。人口增加の結果、生活條件を取り換へる上に制限を受けるやうになると、個人及び社會的構造の上に生存競爭の影響が加へられる。さうなると、人は結局勞働によつて食を獲、增大する人員が社會を組織して、從來の居住に順應しなければならぬ。——文化といふものはかうして起つた。さもなければ同じ目的を果たすために、他の人間を破壞または鎭壓しなければならぬ。——この手段を取る時は、暴力の鬪爭と强制の組織とが生れる。生活條件の變換に對して壓力が加はる結果、人はこの方法の何れかを擇ばなければならぬ。…………ある社會が前の方法を取るか、後の方法を取るかは、直ちにこの社會の發達した生活條件の如何によつて決定される。寬裕な生活條件の中に育つたものでなければ、最初から文化に適した方向を取ることは出來ない。生活條件の酷薄な種族のみが戰爭の途に上るのである。

絕對的敵意『人間は元來同類と仲よくしながら、食を求め子を產まうと希ふものである。これは人間だけの特性ではなく、總ての生物に共通した傾向である。しかし人數の增加と生活資料の缺亡とは、彼の個人的關心を化して、他の一切同胞に對する敵意たらしめる。血緣、勞働、または戰爭に於ける協同を通して、關心の聯帶に入りこんでゐる間だけは、この敵意も眠つてゐるが、少しでもこの聯帶關係が破れたとなれば、卒然として覺め、出生の共同も從前一切の關係をも無視して仕舞ふのである。絕對的な敵意は、關心の聯帶の有無を監視する心理的衛兵である。

血緣社會及び文化社會『如何なる社會的相互關係も、その由來する最初の根原は血緣である。原始社會の協同が總て血統に據つてゐるのはそれ故である。頭數の增加と食物の探

求を通して、原始の社會的構造は空間的分化を餘儀なくされる。この過程が種々の生活條件に促されて、更に進轉すると人種的分化の現象を惹き起す。分化した人々の間の接觸は、ある時は逃走に導き、或ときは戰鬪に導くのである。後者は對手の資源と居住とを自己の手に收めんために敵の破壞を目指して行はれることがあり、他の場合には敵を奴僕として使役するために行はれることもある。敵の奴僕化を目的とする最後の場合は、文化と破壞との中間に位する社會的妥協の現象である。この現象によつて、より高い階梯の社會的過程が導かれる。そこで最早や社會組織は血の關係を主とすることなく、文化と支配のシステムとして構成される。血統の近似に基づく社會的組織は何れも單純である。支配者の鎭壓は社會的分節の始まりであり、國家の始原である。營養及び繁殖の無限の擴大と、それを通して一國民の他國民による征服を惹き起すに至つて、また文化が人間の欲望の形式を無限に豐富ならしめるに至つて、生活條件が彌增に複雜なる結果社會的構造の果てしなき分化が、分節の第一歩を踏み出すのである。文化は商業と共に發達する。玆に商業の發達は、血緣社會や文化の共通に基づく社會、または支配の共通に基づく社會(國家)の如き、統一的社會に分解的影響を及ぼすのである。かかる事情によつて商業は、總ての社會的構造の上に分化を擴充する作用を有つてゐる。社會的構造の分化及び混和は、社會過程の具體的內容である。それは生存競爭の社會的結果たると同時に、絕對的敵意を緩和する社會的原因である。この分化及び混和の過程は、卽ち原力の統制的活動の社會的領野における現れである。

個人化と社會化『社會過程は既存の構造から、常に新しく他の構造を生む。個人化――有機體の繁殖といふ生物學的現象の社會的領野に於ける再現――の無限の律動であり、また既存の諸構造の社會化――個體の身體的成育といふ生理學的現象の社會的領野に於ける再現――の無限の律動でもある。社會の分化は有機體の增加と共に際限がない。社會化と個人化とは、何れも個人の先天的關心の中に根據を有つてる。さもない場合は、夫々の社會的構造の具體的關心の中に根差してゐるのである。分化は關心の變異によつて刺戟される。而もこの關心の變異たるや、異れる生活條件の下に於ける人口の增加、及び食物の探求の結果である。社會過程の個人化的側面には變異が作用する。社會的側面にあつては社會的構造の進化が主とされる。

『分化(または個人化の衝動)は個人の數を以て限界とする。換言すれば、分化の極限は社

會の原子化である。これは各個人が自分一個の關心を以て、社會的構造の內容に擬することが出來るからである。社會化（または結社を成さんとする衝動）は人類を以て限界とする。換言すれば、人類が一個の社會的構造たることが出來るからである。それには人類全體を通じて、ある結束的關心が包持せられることを必要とする。しかし實際には、生存競爭の內部で生活條件に應じて必要とせられる社會的關心の數こそ、分化の限界であり、これらの關心に取つて提携可能と考へられる範圍が、社會化の實際的限界である。

『分化は人間を社會的拘束の退屈さから解放し、先天的なる乃至は新社會生活の影響によつて獲得されたる關心を追求せしめる。故に分化は、社會的必要の線に沿つて、個人意志の諸變異の間に波動する。社會化はその反對に、人間に向つて種々なる拘束を加へ、人の自然的又は假想的關心を充たす上に、無くてならぬところの支持と協同を確保しようとする。社會化はまた社會的必要の線に沿つて、自らの社會的關心を滿たすための自發的服從と、他人の關心による强制的壓服の間を震動するのである。

變異と社會的必然『分化または社會化に取つての社會的必要とは、時には人間の內存的性能の中に包含される關心であることもあり、時にはまた生活條件によつて規制され、社會的境遇によつて決定された關心であることがある。主觀的動機または外部的强制によつて、一時はこの社會的必要を拒否することも出來よう。しかし一般的進化の結果について見る時は、この必要は無制限に自己を實現するものである。

『人口增加の結果、人間の居をトする範圍（生活條件）が擴がれば、卽ち社會的變異の機緣が多くなれば、社會過程に於ける個人的選擇（社會的必要からの背馳）が種々に異り易く、從つて社會的必要の活動を正規ならしめるために、社會化的拘束（壓服）を强くする必要が生じる。一々の鎭壓は必ず支配的關係を伴ふものである。この相互關係の社會的形態は國家である。』然しながら、個人が變質するにつれて社會化的拘束も變化し、社會的必要に背馳した支配の體制、換言すれば、社會秩序を確保する任務を忘れた國家を生み出す。かくする時は、公共的往來と國家により抑壓された關心によつて支持される分化的傾向が、國家に干涉し、國家を改造し、解體し破壞して、以て社會的必要の諸要求を充たさうとするに至るのである。

國家的性質の轉化『國家に於ける支配の性質は、社會過程の進化段階を共に變化する。征服者の統治する國家は、社會的構造が單純から複雜に向ひ、外部的に孤立せる社會的構造

が遭遇すれば、必ず破壞するといふ狀態より、それが互ひに混和し適應する狀態に遷移する過渡期を示すものである。最初征服によつて確保された社會の共通性を基礎にして平和的要求が優勢になつて來れば、そこに文化國家が現はれる。この種の國家は、被征服者に對する支配といふ一個の必然的傾向を、文化的自由の創造性と調和させようと努めるものである。

社會發達の諸要素『一般の社會的擾亂中にあつて、鬪爭と戰爭とは社會的構造を强固にする働らきを營むものである。從つてそれは、政治的力の根原である。文化と商業とは社會的紐帶を薄弱ならしめる。從つてそれは、社會的分化と政治的解體の根原である。然しながら、それと同時に社會關係の擴大を齎す點は兩者とも同じである。『變異は有機體の相對的完成と複雜化とを招致する。それと同じく社會的分化は、支配、協働、從屬の關係に於て、比較的高級にして複雜なる社會的構造を產み出す。これらの社會的構造は、互ひに自己の關心と生活條件とを通じて、相互依存の上に立ち、而してこの相互依存の關係は、社會的構造の間に親和的接觸が失はれない限り擴大されて行く。社會的構造は始め夫々獨自の環境を有ち、その內部に於て一種孤立せる位置を占めてゐたのであるが、その後彼等相互間の接觸が頻繁となるにつれて、人は終に社會關係の網によつて取り圍まれるやうになる。この社會關係の網の錯綜は、往々にして全人類を一個の社會的構造であるかのやうに見せる。かくの如き社會の發達に取つて、繁殖、營養、利用はその原因となり、戰爭、文化、商業はその手段となり、諸關心の調和ある滿足はその歸結となるのである。

人口密度と支配の種々相『社會關係の網が稠密となるにつれ、社會的條件の激動は稀になつてくる。社會的構造が相互依存を基礎として、複雜なる體制を示せる場合には、少しの動機も直ちに各方面に影響を及ぼし、關心を阻害するものとして感じられるからである。人口稀薄なる場合にあつて、政治的獨立體の內部に於ける社會的出來事は、主に權力によつて强制的に處理される。これに反して人口稠密なる場合は、相反せる諸關心の妥協によつて社會的出來事が整理されるのである。文化國家の出現は人口稠密の結果であるが、そこでは强力的鎭壓と並んで資本に依る產業利用が盛んに行はれる。この政治的支配と產業的支配の中和的體制に次いで、如何なる支配體制が生れるかは、未だ社會過程が明示してゐない所である。

社會進化の復歸性『絶對的敵意は個人性に取つて附き物であるが、最初は社會的接觸が缺如してゐたから(血緣の上に作用する社會的接觸は例外だが)、表面には表はれてゐなかつた。そののち社會過程が全人類の間に擴大して行く時期となり、我々の社會生活の上に主導的た役目を働らくに至つたのであるが、今や再び普遍的社會化の傾向によつて抑壓されやうとしてゐる。人間の原始的條件に於ける社會的接觸の缺乏と、文化が普遍化された曉に於ける社會的動搖の困難とは、かくして見れば同一の結果を齎すものといはねばならない。しかし乍ら、類似の關心を抱いた相異れる社會的構造が、生存競爭の野に於て相逢ふ時に、もしも一段と優勢な力がこれを制御するとか、或は關心の相互依存が兩者を調停するといふやうなことがなかつたら、絶對的敵意は再び頭を擡げてくるのである。

『文化國家が征服國家に取つて代る程度によつて、關心充足の上の個人間の分化は、また次第に均整されてゆく。政治上、社會上、產業上の不平等は、一變して再び原始的社會條件の中に見られた平等に到達する。人間の普遍的社會化が、社會的構造を錯綜せしめることは確實である。然しながら、それは同時に社會組織の完成の過程を通して關心の一致を齎すものである。とはいふものの生活條件の變異が完全に姿を消さない以上、如何なる社會化の完成も、社會的鬪爭の機會を根絶することは出來ない。社會秩序は卽ち生存競爭の組織化で、それは營養を維持し健全なる子孫を繁殖させるといふ目的のために行はれるのである。從つて社會的發達の歸結として、次のごとき一狀態を想定することは、決して理由のないことではない。卽ち社會的發達の究極に於ては、雜多な職業に適應した雜多の個性が存在するに拘らず、知的、道德的に最も完成した個人の指導のもとに、人間の文化的、政治的、及び社會的不平等が實現されるであらう。倫理的、知力的の權化による支配が、一個の體制の下に行はれる結果、何れの關心も退步又は死滅することなくして、社會的發達が進行するであらう。然しながらこの種の關心も未だ遙遠の時期に亙つて不平等と生活條件の變化とによつて、不斷の變改を蒙らなければならないであらうと思はれる。』

第二編　解　說

第一章　社會學的認識論の出發點

指導概念としての社會及び結社　ラッツェンホーファーの方法論上の功績は、先づ『社會』といふ言葉を非科學的な概念として排斥したことから始まる。彼はその『社會的認識論』の中で、この言葉の代りに『結社』といふ動詞的名詞を使用することを提議したのである。

元來、この社會といふ言葉は初めから社會學者の頭痛の種となつてゐた。それは一定の構造を有し、時間的に持續するところの具體的な集團を暗示する。謂はば極く靜的な概念であつて、我々がこの言葉を使ひ慣れると、ある固定的なもの、つまりある一定の大きさと構造を持つた特別な人間の集りが考へられる。然し實際に當つて、我々が『社會』の現象なり法則なりを探求することになると、後から後からと數限りのない社會の多くに打つかる。而もそれが一々違つた大きさと構造と性質とを持つてゐる。我々は家族も一つの社會だといふ。人類全體も見やうによつては一つの社會である。從つて極く有り觸れた私的の集合だつて、それが社會でないといふ筈はない。そこで、社會學的智識を纏め上げ組織立てやうといふ我々の努力にとつて、唯一の手掛りであり祕鍵であるこの『社會』といふ概念は、狐火の如く搖颺して捕捉に苦しましめるのである。それがため、社會學的問題が果たして解決出來るかどうかといふことが怪しくなるだけでなく、社會的問題といふことが果してあるのかどうかさへ疑はしくなつてくる。即ち『社會』といふものは恰も狐火の如く、我々の幻覺の產むところのものではあるまいか、果して社會なるものの實在を確證し得るかどうかと考へられて來るのである。

社會學の究極の目的なるものは、社會に關する從來の種々雜多な見解を、一つの首尾貫結した體系に纏め上げることである。この目的のために探究の根本の對象となつたのは、いふまでもなく『社會』そのものである。處がこの『社會』といふ概念が、色々に引きずり廻された揚句、社會現象の無法則性と不統一性が結論された。かくして社會學といふ包括的な法則科學が成立しないといはれるやうになつた。あるものは只だ個々の社會現象の記述だけであるといふのである。かくて歷史學、政治學、經濟學、倫理學等の特殊社會學の主張のみが、萬能的に學界を支配することになつた。かくの如き結果を導いたといふこ

とも、畢竟するところは『社會』といふ如き非科學的な概念に由來するところ一半である。その意味に於て、社會學的探究の第一歩は、この概念を如何に處理するか、もしくは根本の對象を何に求むべきかといふところから新にやり直さねばならない。

こゝに於て先づ考へられるのは『人間の經驗』といふ概念である。我々が說明しようと努力してゐるのは、要するにこの『人間の經驗』なるものでないかと思はれる。もしさうだとすれば、社會學的探究の前途には一道の光明が投ぜられる。卽ち『人間の經驗とは、一個の物、または一種類の物ではなく、それは人間と人間との間の諸關係であり、この關係によつて占められる世界である。相互に因となり果となつて結び合へる諸過程の聯還である』ことを知ることにより、端緒が認められることになる。我々の探究の中心が人間であり、他の一切の宇宙現象はそれが人間の活動の條件となる限りに於て、またその程度に從つて、我々の學的興味を喚起するものであるならば、社會學の對象は取りも直さず『人間の結合』と、大小餘すところなきそれの現れでなければならぬ。

一切の物理現象を、力の相互作用にまで分解する力學が發達するに伴ひ、物の神祕が一掃されたやうに、『人間の結合』といふ動的概念に從ふことによつて、『社會』といふ言葉に附着した一切のァプリオリ的要素から解放されることが出來る。『社會』といふ言葉はどうしても特殊な擴りや屬性を聯想せしめ易い。それがため夫々の學者は、この擴りまたは屬性に關して自分勝手の考へを加へるので、無用の辯證論に囚はれることになる。例へば、人間的關係の範圍とか、人間の融和の種類程度とかいふ問題がそれであつた。然るに『人間の結合』といふ新概念は、人間的經驗の各方面を探求してゐる人々の間の、人爲的なそして煩瑣な障壁を撤去してしまふ。總ての社會現象はそれが社會現象たる限りに於て、人と人との結合のプロセスであり、そしてまた成果である。この點で何の社會現象を取上げて見ても、他の總ての同じ現象と交涉あり關係のないものはない。勿論一々の現象は夫夫の特徵を有つてゐるが、これも要するに渾一な生活體を前にして、異つた見地から異つたシムボリゼーションを行つたといふに過ぎない。融通無礙が本體で、障壁は第二次皮相現象であることに氣が附かなければならぬ筈である。やれ經濟現象が原因である、やれ權力の爭奪が基礎的だといつた風な、盡くるところを知らぬ水掛論も、かうした社會現象の第二次性を忘れ、夫々の現象に實體的獨立性を認めようとすることから起る誤謬である。がとはいふものの、この概念を嚮導とすれば絕對に誤謬が避けられるといふのではない。

しかし、少くとも從來の類推的研究方法の誘惑を避けられることだけは事實であつて、それだけ科學的正確さも期し得られる譯である。例へば、『社會は一の有機體なり』といふスペンサーの命題は、決して具體的、實證的な性質のものではなく、一場の比喩であり、說明の便宜であるに過ぎない。我々は適當の保留を附してこの言葉を使用すべきであつた。然るに『結社過程』以前、つまり我々が『社會』の定義に沒頭してゐた間は、この命題を萬能なりとして戴いてゐなければならなかつたのである。今や我々はかうした子供誑しのシムボリックな命題を越えて、『二人または二人以上の人間が結びつく場合に起る本當の過程は何物であり、如何樣に來たるか』といふ分析的な質問を掲げなければならぬ。『社會』を棄てて『結社』を採るのは、かうした探究の途に上る前に、先づ甲板を掃除するにも等しいことであるといへる。

結社過程の諸要素　人間はその生活條件が異るにつれて、種々なる行動を營んでゐる。人間の經驗を說明するといふ社會學の目的は、畢竟するにかうした人間の行動の種々相を究明せんとするに他ならぬ。人間には種々の欲求があることを知つてゐる。彼等はこの欲求を充たさんがために行動を營むのである。人間の欲求は時と場合に應じて、限りなく形を變ずるが、これを大別するとある數の欲望群に纏め上げることが出來る。夫々の欲望に於ける決定的の要素が、何であるかは容易に發見することが出來よう。普通の人間はその欲望の種類に於ても、また欲望を滿たすために與へられた能力その他の便宜に於ても、大體に於てさう大して異るところがないものである。また人間の環境は時と場合によつて、種々の事情が伏在するとしても、根本的には常に一定の姿を持續するものである。かうした假定を立てた上で、我々が先づ探求しなければならぬものは、第一に結社の各方面に作用してゐる根本動因が如何なるものであるかといふことと、第二に人の欲望に向つてこれを拘束すると同時に刺戟的作用を及ぼす生活條件は、自然現象のうちで如何なる種類に屬するかといふことである。これを他の方面からいへば、人間の經驗は因果の交錯した一種の網の如きものである。人はこの網の中で根本的性質にはいつも變りなく、而もその性格の表現に於ては無限の變化を見せながら、各自の性能を發揮し、その目的を追求するために、お互が結社の過程に入り込むのである。この結社の過程にあつては、他人の態度及び物理的環境の上に不斷の變化が現はれる。のみならず、一切の結社的經驗そのものが、個人の內部に於ける諸要素の發達と組合せの上に、常に反作用を齎らしつつあるのである。

かくして無限の分化を續けて行く人間の結社とその諸現象とは、同一の基礎的要素が、特殊の變化と特殊の組合せを表して行く進化的過程の內部に於ける、特殊な一地點に他ならぬのである。然らばこの結社過程の諸要素といふのは何かといふに、それは大體次の如きものである。卽ち物理的な方法によつて支配される宇宙、人間の欲求、この諸欲求の個人內に於ける一定の結合、欲望追求の途中に於ける各個人の相互接觸、結合關係に入れる個人がその目的からする背馳または調和、相手の欲望に對する個人の順應。從つて各個人の行動が順應し合ひ新しい結合關係を生み出すこと、かくして新しく生み出された結合關係と物理的條件の變化とが、一つの外部的環境となつて新しい欲望を發生せしめ、この欲望の間にまた前述の同じ順應的過程が繰り返へされること、以上である。

その證據には、エヂプト王國の支配下にあつたヘブライ人と、獨立宣言書を起草したアメリカ人の始祖を比較すればいい。上下二千年の時間の相違と、茫々數千里の場所の距りがあつたに拘らず、彼等兩者の求めてゐたものは、同じく『生命、自由、幸福の追求』であつた。ヘブライ人の唯一の願望は、誅求飽くことなきエヂプト徵稅吏から解放されることであつた。この願望が達成せられた時、彼等曠野の彷徨者達は、最早やエヂプトの奴隷とは全然別趣な生活を營むことになつた。かかる環境の相違によつて、彼等の經濟的、社會的、政治的、宗敎的の欲求も從つて變化した。彼等の各方面に於ける活動は、玆に新しい現象を呈し始めたのである。次いで、彼等が放牧の生活を離脫し、永遠の居住を選定した時を限つて、再び同樣の循環的發達が繰り返へされることとなつた。それ以後夫々の時代は、この反覆的發達の鎖を構成する一つ一つの輪となり、社會的因果の流れの一道標となつた。エヂプトのヘブライ人によつて體現された社會過程のある要素は、十數世紀に亙つて歐洲から米大陸へと漲溢したキリスト敎文明に入り込んで、細末の點ではこの謀叛氣の多いセム人種の文明とは、全く趣きを異にした文明を造り上げる要素となつた。メーフラワー號上で語られた希望は、かうした生活要素の一つの現はれであり、尙ほ今日のアメリカをして『生命、自由、幸福』の追求裡に於て、獨特の政治的體制を創造せしめ、選擧法の改正、勞資關係の改造に沒頭せしむるに至つた原動力となつてゐる。

欲求への還元　かうした事實の展開そのものはまた、社會思索家に向つて何等かの影響を與へずには置かない。彼等社會思索家は、今や事實の說明の上に、一時代前の人達が感じることの出來なかつたある新しい要求を感じ、昔の人が見ることの出來なかつた或もの

を洞見しようと努めるのである。從つて今日の社會學的問題は、これを表現する上に全然新しい言葉を選擇しなければならぬ。我々の必要とするところは、人間の結晶的既成物や機械的組織や制度上の選擇やの説明ではない。人間の生活の儘の過程を、この過程に包含さるる諸種の要素の相互作用として、説明しなければならないのである。その中でも殊に現代の社會的探求を特色づけるものは、社會の活動的な樣相を諸種の欲求の反撥、包含、調和として説明することである。ラッツェンホーファーはこの『欲求』といふ言葉の代りに力學、生理學、心理學の諸見地を包括した立場から『關心』といふ概念を與へてゐる。彼にあつては『結社過程』、つまり物理的環境、個人的性能、社會的環境、個々の目的、等等の諸要素間の相互關係を究明するに當り、これを『關心』の概念に照して見るといふのが、根本的な探求方法なのである。從つてラッツェンホーファーの主張を如實に理解せんとすれば、『關心』の性質と、それの結社的要素としての位置を知らなければならぬ。

第二章　關心の性質及びその結社機能

關心の示唆『關心』といふ言葉の意味は、普通に欲求といふのと大して變りはない。ただ欲求よりも更に主觀的、排他的な内容が含まれてゐる。その點は後段に讓るとして、茲では只だこの言葉の背後に、個人の内部にあつて關心を起させるある生理學的な力と、個人の外部にあつて關心の充たされる或物理的な條件が示唆されてゐることを注意したい。即ちラッツェンホーファーにあつては、宇宙の現象は總てある原力の分化として成れるもので、生物の欲望もその一分枝であり、物理的環境も同じく宇宙原力の一分枝に他ならぬ。然し乍ら、かく分化した諸種の現象は、決して支離滅裂の狀態にあるものではなく、相依關係に立つことによつて統一されてゐる。この場合では、關心が環境の利用によつて滿たされることから、物理力と生物力とが交渉を有ち、その統一が確保されるわけである。然しながら、この二つの力の分化はその儘にして止まるものではない。一方物理力の現はれとしての關心そのものが、環境との交渉を通して、更に無限の分化を續けて行くのであつて、人間の結社生活とは畢竟この分化の一體樣に外ならぬ。これは彼の形而上學的見解であるが、關心といふ概念にはかうした思想が何處となく示唆されてゐる。これだけを明らかにして、具體的な方面から關心の性質を見ることとしよう。

生理的關心その他　人間の根本的な關心は、固より動物のそれと異るところがない。單に生命を失ふまいとするのがそれである。ところで生命維持の關心は先づ食の關心となつて現はれる。人は生きるために喰はねばならない。この極めて粗野な命題は、原始的た野蠻人に就ていはれるのみでなく、如何なる高踏的な詩人に取つても眞である。木の根や生きた魚を手捕みにして喰ふ人間に於て眞なるのみならず、北京や倫敦の最高價な献立表を眺めてゐる人に就ても眞である。急迫した食慾にせき立てられて他種族の土地を奪ふ前に、先づ敵の肉を啖ふ人達に就ても、ミランの町で麵麭の一揆を起す人間にも、紐育でストライキに參加する勞働者にも、乃至このストライキを鎭壓するために、シカゴで酒を飲みながら相談してゐる資本家にも、普遍一律に適用されるのである。故に關心はその根本的な性質に於ても、從つてまた社會的効果に於ても、總ての場合總ての個人に同一である。ただその細末の現れ、社會的効果の程度に於ては、無限の變化を示し、そして外部的事情の相異によつて絕えず影響を蒙つてゐる。此食の關心は直接肉體に關聯した、即ち人間の動物的部分に附屬した一群の關心の代表的なものである。この部類に屬する關心は、何れも肉體の活動または肉體的享樂の中に、自己の滿足を見出すのである。ラッツエンホーファーが生理的關心と呼んでゐるのは、これである。

性的關心は同じくこの部類に屬し、食の關心と對等した相補の位置を占めてゐる。これらに續く重要な關心は、これぞといふべきものが見當らぬ。よつて殘りの生理的關心を一括して、假りに『勞働の關心』といふ名を與へれば、食の關心、性の關心と並んで、直接人間の生理的必要に基づき活動を刺戟するものはこの『勞働の關心』である。この關心はそれ自體が、肉體的活動を追求する衝動である。子供の惡戯から秩序整然たる運動會の競技に至るまで、總て物理的な勇敢さと熟練さとを表示しようとする衝動は何れもこれに屬する。この他に人間のあらゆる活動の根柢となる關心は、五つの群に分類することが出來る。即ち自然の資源を發掘しようとする關心、仲間に向つて自己の個性を主張する關心、物事を熟知しようとする關心、美を味ふ關心、正しいと思はれることを實現しようとする關心、この五つが即ちそれである。

人間の活動の動機は何れを取つて見ても、以上の關心もしくはその各種の結合によつて說明されないものはない。第一の組の生理的關心が、更に細かく分けられるやうに、自餘の關心も夫々幾つかに分けられる。ラッツエンホーファーは以上を關心なる言葉で要約して、

人は最低の蒙昧人から最高の文明人に至るまで、先づ物理的乃至社會的の環境に於ける事情の變化によつて行動を制限され、反面にはこの六つの根本的關心――即ち生理的關心、富の關心、社交的關心、智識の關心、美の關心、正義の關心によつて行動を動機づけられるのである。

結社の究極目的　社會過程の忠實なる説明を心掛ける者に取つて、その解釋の鍵は人間の行動を喚び起す一般的乃至特殊的の諸種の關心中に發見されるのである。人間の社會的構造は總てこの關心を充たすための、またはこの關心を妨げるための便宜として解釋されねばならぬ。總ての社會的機關は、かうした關心の充足または抑制をなすことによつて存在の意義を完うし、人間の社會的經驗の中に起伏する總ての出來事は、この關心に還元されねばならぬ。今かりにスモールの言葉を藉りていはう。『我々があらゆる社會經驗に對して、これを取扱ふ態度は次の如くである。多く相集まれる個人は、第一にある特定の關心の特定の結合を實現するものと理解されよう。次に彼等はこの特定の關心を充足せんとする根本的目的のもとに、特定の社會構造を手段または障碍とし、特定の社會的機構に依據しまたは反抗して活動するものと認める。而して彼等は同じ目的のために、諸種の中介的目的を設定してこれに努力を向け、その結果諸種の事件を生み出し、無意識又は有意識の諸種の擧措をなすものと知られる。全社會過程を對象とする科學が成立し得ると否とは、偏へにこれらの抽象的名辭に具體的内容を與へ得るか否かによる。』寔にスモールのいふ通りである。彼の提言を具體的に引證するため、議會黨と王黨とが對立抗爭してゐた十七世紀の英國の社會生活を擧げる。それには先づ當時の英國人の性格の種類と、その由つて來たれる所以を究明しなければならぬ。次に夫々同じやうな人々が如何なる過程を經て一つの團結を構成するに至つたか、そして各種の團結がどの程度に於て當時の社會狀態を支配したかを知らねばならぬ。家族的、經濟的、法律的、宗教的、社會的の諸制度が、どんな風に組み立てられてゐたかも知らねばならぬ。何となればこれは英國人の生活の自己表白の手段でもあり、同時にその制限でもあつたからである。有力な人達の各種の團結が、當時の社會制度を如何に觀てゐたかといへば、ある者はこれを自己の意志貫徹手段と考へてゐたし、或ものは希望の抑壓者と考へてゐたのである。然る後、如何にしてかかる見解の相違が生じて來たか、その見解相違の如何なるものであつたかを、よく了解することから調べる必要がある。その上、これらの人々が行つた特殊の社會努力と、その間に行はれ

た衝突と妥協の模樣も知らなければならぬし、更にこの時代の初めと終りとでは社會的諸要素が如何なる相違を示してゐるかを知らなければならない。即ち英國人の性格、その制度の構造及び機能、彼等の特定の念願、一般的の目的、及びそれらのものに如何なる變化が行はれたかといふことを、精確にする必要があるのである。

歷史上の一定の時期に就て、以上の如き諸問題を解決することが出來るならば、當然その時代に於ける社會的過程の展開を充分理解することが出來る。もし世界の各國の國民と、その總ての歷史的時代に就てかうした問題を判明し得るなら、正に人類の社會的運動を理解し得たといつて差支へない。しかし社會學的努力は、單にこれを判明し得たといふことだけで足りるのではない。過去に關する智識と見解とを、現在の社會生活の上にまで適用し、將來の社會的歸趨を判定するに於て、始めて全部を盡くしたといひ得る。

關心の排他性　以上は單に關心の靜的な內容說明である。依つて順序として、かうした關心から、如何にして動的な社會過程が導かれるかには觸れてゐない。一つの關心が他の關心に如何なる作用を及ぼすか、また物理的社會的環境から如何なる變化を蒙むるかを說明し、かかる關心の相互作用としての社會過程が、彌增に擴大し分化して行く事情を解明しよう。

ある一つの對象に對する關心は、必然に他の一切の對象に對する無關心を豫想する。つまり一つの欲求を充たす上に抵抗がある場合、他の總ての欲求を無視しても尙ほこれを充たさうとするのが、關心の執着的な心理狀態である。從つて關心には性急と不寬容と排他性を伴ふのが普通である。この現象は同一の人間の幾つかの異つた關心に就て見れば明らかに知られる。總ての人は食の關心と休息の關心を持つてゐる。然るに休息の關心に身をまかせてゐる野蠻人は、兎もすれば食物に對する機會を失ひがちである。彼等は强度に空腹を感じるまでは怠けてゐるが、一度食欲に支配されると、休息の關心は完全にこれを放棄してしまふ。我々にしても、談話を樂しみ、音樂を聽き、または競技を行ふといふ關心を有つてゐる。しかし一定の時間が來て睡眠の關心に捕へられると、話すことも、聽くことも、遊ぶことも嫌になつてしまふ。即ちかくの如く總ての關心は、絕對者たらんとする傾向を有つてゐるのである。ただ一々の關心は、ある程度に至つて飽滿することと、諸關心の公平な裁斷者たる自我意識が作用することに依つて、各種の關心の間に夫々の讓步の現象が行はれるのである。かくて個人は諸關心の讓步と相尅とによつて產み出されたもの

だといふことが出來る。

關心の支柱としての個人　關心と關心とのかうした關係は、個人意識の内部に於て行はれるのみでなく、ある一團の關心の支持者たる個人相互間にも行はれる。個人と個人が相對した場合、他の人間は一つまたは一團の關心の支持者として映ずる。例へば、新しい移住民とある建築請負業者との間に勞働契約が結ばれる場合に、建築業者の方はこの移住民に金さへ出せばどんな勞力でも提供するものと見るし、勞働者の方では對手を賃銀の提供者で、且つ自分の勞力を要求してゐる人間と見るだけで、それ以上の人格的な理解が交はされるといふやうなことは少ない。然るにこれを米國の如きに見れば、ここの住民が選擧權を獲得し、建築請負業者が議員になつたとする。かうなると、勞働者がこの上賃銀を增加しようといふ新しい欲望を感じ、請負師は單なる勞働だけでなく、投票場でも自分を援助して貰ひたいといふやうな從前と異つた關心を抱くやうになる。即ち兩者共に自己中心的である。自己の關心が目的で、他人は自己の關心を追求する上の手段となるに過ぎない。然し兩者の相互的な立場は、從前とその後では明らかに違つてゐる。つまり關心が違つた内容を持つに至つた結果として、彼等の間に行はれる相互作用が、從前と違つた形式と方法で行はれるやうになつたのである。建築師の側からいへば、勞働者に對する期待が多くなつたことであり、勞働者側からいへば、期待されるところが多くなつた結果として、從前より以上の要求を持ち出すやうになつたのである。

關心の調和及び反撥　以上の例は相對せる人々の關心が調和せる場合である。調和の程度には大小の差違があるが、關心對關心の關係が一度び調和の最少限度を通り越すと、やがて反對の關係を導く。關心對關心の關係がかく複雜となるにつれて結社過程にも色々な變化を及ぼしてくる。いまAの食の關心とBの食の關心とが、少しの交渉もなくして滿足された場合を假定するに、彼等はお互に對して何等の注意を向けることなく生活することが出來るのである。然るにこれと全然正反對の場合、即ちBの關心を滿足させればAの關心が滿足されないといふ場合を考へて見る。この場合には、兩者はお互に猛烈な敵意を感じ、剿滅的戰鬪狀態に入り込むのである。原始的異種族の關係や、一人の異性を奪ひ合ふ人達の關係の如きは、明らかにその代表的な一例である。これらの兩極端の例の中間に位して、最も調和的な關係を現出せしむるは、自己の關心を滿足させればその結果、必ず他人の關心を滿足させることになる場合か、他人がその關心を滿足しようと努めるのでなけ

れば、自己の關心を滿足せしめることが出來ないといふ場合である。この中間の場合を境界として關心の諸關係を二つに分ければ、前者は『聯帶』とし後者を『反撥』として呼ぶことが出來る。從つて關心の聯帶に應ずる人と人との關係は親和協動のそれであり、關心の反撥によつて齎らされる人と人との關係は敵意爭鬪のそれである。父系の家族、部族、祕密結社、國民軍といつたやうなものは前者であり、同じ狩場を占有しようとして相爭ふ部族、ある國家內に於ける犯罪分子の叛逆團體、經濟上の機會を獨占しようとして競爭する二つの營利團體、お互に反噬する宗敎團體等、これらは總て後者の關係の代表的なものである。

社會過程の極限　社會過程が生物進化のどの階程で始めて姿を現はしたかは不明である。然し兎に角も、人間といふ一つの種族が生物界に現はれた時には、既に結社生活を營んでゐたと知られる根據は充分にある。それらの事實上の穿鑿は暫らく別として、人類の始祖のある一群に結社生活が營まれてゐたとすれば、これは要するに彼等の間に關心の聯帶があつたからで、この關心の聯帶の存在を考へないで、社會過程の出現を假定することは不可能である。然らば關心聯帶の根原的な因素となつたものは何かといふに、その最も單純なものは生殖に關するものである。男女間の性的結合は、極めて一時的でそして排他的であるから、一般結社過程の起原とするには問題が起つてくる。そこで最も重要なものとして擧げられるのは、母と子の間の關心聯帶である。母が子を愛するのは生物學的本能で、幼兒が母に賴るのもまたそれである。のみならず兩者の結合は、數年または十數年に亙る持續的なものであり、また數名の幼兒を包括する比較的解放的なものである。かくてこの關心は、後に父親をその結合內部に引入れ、兄弟、祖孫、伯叔、甥姪等の關係を辿つて、次第に擴大して行く傾向を有つものと見做すことが出來る。群、氏族、部族といつたものは內部に於ける結合の紐帶は主として血統の同一、祖先の同一といふことである。とはいふものの、かうした原始的結合の內部にあつても、全然食の關心の聯帶を缺いてゐたといふのではない。換言すれば、食物獲得上の協動といふことは、極く幼稚ではあつたが行はれるには行はれてゐた。母親が幼兒を哺育する傍ら果實草根を捗れば、父親は專ら動物の狩獵に從事して一戶の食を立てて行くが如き、原始的經濟生活の食の關心の聯帶を示す實例である。

人類の原始的生活がかうした關心の聯帶を以て裏づけられてゐる反面に、關心の普遍的

反撥といふことも、また人類の歴史に顯著な要素となつてゐたのも事實である。調和といふことの好きな哲學者達は、歴史時代に於ける社會過程を說明するに際し、この過程の根本動因となれるは、要するに闘心そのものの內在的な調和性で、表面的な闘心の抗爭は、この過程の發達に伴ふ二次的な偶發事に過ぎないといふやうに說いてゐる。しかし現代の社會生活に動いてゐるある調和的な氣運を盾に取つて、さうした類推をなすのは一の獨斷だといひ得る。同一事物に心を惹かれてゐる人間の闘爭にあつて、而も彼ら以外の第三者が裁斷することのないといふ場合、または夫々に兩立し難い異種のものを追求してゐる人達の間に闘爭が行はれてゐるといふ場合、これらが歴史上凡そすべての社會過程の木當の姿なのである。讓步とか調和とかいふ社會上の現象は、その實根本的な社會力の反撥が生んだ二次的な結果に過ぎない。讓步とか調和とかいつたことが、それ自身のために追求されるやうな根本的な社會力となるのは、最も進步した社會過程の階段か、然らざれば究極的原始社會の內部に於てだけの話である。過去の歴史上の諸時代に就ていふならば、この言葉は立派に承認される筈である。即ち始めの程は、抗爭が能動的因素、調和が受動的因素をなしてゐた。而も前者の根柢するところは頗る強く、殊に社會過程の初期に於ては、結社生活の全野を包蔽してゐたのであるから、原始時代の社會過程は主としてラッツェンホーファーの所謂『絕對的敵意の法則』に支配されてゐたと見るが至當である。

絕對的敵意の方向　ラッツェンホーファーの謂ふ『絕對的敵意』なる言葉には、ある程度の保留を附して置かなければならぬ。人の一般的關係に就て見るに、『絕對的敵意』といふことが、決して文字通りに適用される場合はない。從つてこの言葉は、闘心を純粹に抽象的に考へて、その間に便宜上の文字を選擇したのである。如何に同一人間の內部で闘心が排斥し合ふ場合とて、或は異つた個人が自己の闘心を主張し合ふ場合とて、その間に起される敵意はある制限を附せらるべきである。原始的國家の復讐戰、敵を剿滅する目的を以て起される戰爭等が、求めれば求め得られる文字通りの『絕對的敵意』の適用される場合である。ラッツェンホーファーが玆に謂ふ『絕對的敵意』とは、人間の發達を終始一貫した原理としてではなく、社會過程の基點を特示する言葉として用ゐたものである。詳言すれば、人間關係の發達は、人と人とが會へば必ず闘爭し、闘爭すれば必ず片方の殺害を以て終るといふ一個の狀態から、次第に進步を遂げて行くものであるといふことをこの『絕對的敵意』なる言葉で示唆し得ればよいのである。同じく對手を殺害するといふことで

も、それが自分の仲間を殺害の危險から救ふためになされたのであれば、これは絕對的の敵意だとはいはれなくなる。故に人間の敵意は畢竟、普遍的、必然的なものではなく、從つて人性の根本原理ではないのである。元來が親愛を伴はない代りに、敵意も有しない人間の關心がある特殊の事情の下に現れた一つの發現形式、卽ち結社關係の一體樣に過ぎないのである。その特殊の事情が撤去されてしまへば、絕對的敵意の絕對的なる程度は非常に減じてくる。ところで然らば、この特殊の事情とは一體何であるかといふに、原始社會に於ける人口の稀薄と、並に群と群との隔離的な生活である。今これを關心の方面から說明すると、當時の生活條件が少數の關心、而もごく物質的な關心であつたことが理由づけられる。少數にして物質的であるだけ、その關心は人の無制限な狂熱的活動を惹き起す程度が多い。それだけに、かうした重大な關心が他人または他の集團の存在によつて滿足を妨げられるならば、彼はこの妨害者に向つて全身憤怒に燃え、身を挺して爭鬪するのが當然である。然るに關心の殖えて、中介的な、從つて非物質的な關心が增加して來ると共に、その中の一つの關心が障碍を蒙つても、そのために忘我的憤怒を覺えるといふことはなくなつてくる。いふまでもなく、他の多くの關心によつて注意が亂され、且つ行動が拘束まれるからである。

以上のことを要約して次の結論が見出だされる。卽ち社會的過程とは、一面には他人の關心と反撥し合ひ、他面には調和し合ふ關心によつて動かされるところの、個人と個人との間に行はれる不斷の動反動の作用である。反撥と調和との割合は限りなく變化する。兩者の種類もまた無限の變化を見せる。だが、概していへば、社會的過程の始めの方の階梯では主として反撥的結合が表面に現はれ、次の階梯では關心の調和が次第に顯著になつてくるのである。

第三章　社會過程の原始形態

社會過程の原始　社會の原始狀態に於ては、――具體的にいへば、現在の野蠻種族の社會や人類學的遺物によつて類推される人類始祖の社會に於ては、著しい發達を遂げた生物學的諸過程とまだ萌芽狀態にある社會形態との間には、明確な境界を附することは困難である。例へば、動物の群の秩序整然たる團體的行動は、反つて人類學的遺物等によつて察せ

られる太古人類の生活よりも社會的である。彼等は最初ただ物理的環境と生理的必要に支配されて、盲目的に動いてゐるに過ぎなかつた。その中にかうした諸種の生活因素の上に選擇が行はれ、この選擇的活動の平面に於て人と人とが接觸するに至り、始めて眞の社會的な過程が開始された譯である。

人間の關心のうちで基礎的なものが、生理的關心だといふことは既に說いた。この關心は動物にも人間にも共通したものである。然るにこの關心とその中に種々の變異を生じ、或はまた手段的關心を生じると、それらの生理的諸關心と、系統を異にした他の諸種の關心とは、玆に新しい人間的な關心に一體系を生ぜしめたのである。物の所有を欲し、他人との交遊を希ひ、または自己の知的能力を增進せんと努めるが如きは、皆この人間的關心として數へられるものである。かうした人間的關心の出現と共に、人間特有の社會過程は開始されるのである。

群居生活の原始性　これまでは主として個人と個人の關心に就て論じて來たが、進んで集團に就て探究して見よう。これ迄個人及びその關心から、社會過程が形成されて行く過程を說明することは、畢竟抽象的なることを免れ得ない。人間の經驗が常に一個の具體的事實であり、具體的事實たる限りに於て、常に個人の集合的現象である。ロビンソンクルソーの生活は、小說家の空想としては成立し得るが、これを現實に求めるは不可能の業である。古來如何なる人間も、他の如何なる人間とも交涉を有たず孤立的に生活した者はゐない。動物に就てこれを適用するも事實である。彼等にしても多くは群居生活を營んでゐるのである。然し動物のそれを人間の生活に比較するなら、その最も群居的な狼や象の生活でも、遙かに社會的交涉の密度が低いのである。これは何に原因するかといへば、關心の數及びその性質によつて、動物と人間との社會生活の差違が齎らされるからである。卽ち根本的な生理的關心が、彌々煩瑣複雜に分化して行く程度に應じ、獅子は夫婦限りの生活をなし、狼は數千匹の群をなして山野を漂泊し、人間は全種族を包括する社會を形成しようといふ希望を抱いてゐるといつた狀態である。

暗黑の地下室に豆草が生えてゐる。そして壁の裂目から一迸の日光が洩れて來るといふ場所ならば、この豆草は必ず日光に向つて自己の葉と幹を延ばし、遂に裂目を通して外部に蔓を這はせて行く。これは植物の中に日光を求めようとする、ある種の關心が働らいてゐることを語るものである。日光にこの植物の必要を充たす或ものが含まれてゐて、植物

は日光と抱合することによりて、自己の生存を完うしようとするのである。同樣のことは人間の結社生活にもいひ得る。人間の性能の中には、他の人間の關心を滿足させ、またはこれと衝突するやうなあるものが含まれてゐる。從つて人と人との關係は、空氣中に浮游して互に何の關聯をも有たぬ塵芥とは違ふ。人は至るところで他の人間を吸引したり反撥したりする。ある時は他の人間に惹きつけられ、更にある時は反對に回避しようとするのである。この結合または離散を衝發する内部關心のためを以て、人間は常に集團の生活を營み、離群獨居することが出來ないのである。然しかうした群居生活にも種類はある。一は單なる生理的關心に基づいて、人と人とが交渉するものであるが、これは人間に特有な生活方法といふことは出來ない。他の一つの種類、即ち數多い中介的な精神的な關心の中から何れが一つを選擇し、それを意識的に追求するといふ能力が出現することになつて、始めて人間に特有な社會生活が生れたのである。かうした結合の最も原始的な形態は『部族』である。

相對的原始社會としての部族　『部族』に先行した『群』の狀態は、動物の群的生活と異るところがなく、從つて特に人間的なりとして細叙することは出來ぬ。『部族』に至つて始めて、我々の生活に對照して、我々の關心から直接に生れた言葉を以て說明することが出來る。のみならず『部族』の生活は、人類發達の途上で甚だしく永い期間に亙つて行はれたものである。それは文明國の歷史に見るやうな多くの階梯を經て、或はそれ以上に多くの階梯を經て居ることと思はれる。人間の絕對的『原始』に就ては、何人も極めて曖昧な臆測をしか下し得ないのであるから、單に『部族的時代』なる叙述及び說明を以て滿足しなければならないのである。今かうした原始生活の報告として、報告された事實の性質からいつても、探求の方法からいつても、最も信憑し得ると思はれるのは、スペンサー及びギリンが十九世紀の終りに、中部亞弗利加で行つた人種學的探險の報告である。彼等のいふところによれば、中部亞弗利加の最低級の部族生活は、これは文明人の言葉で叙述することは不可能だといふ。例へば父、母、夫、妻、兄、妹、宗族、正義、惡といふやうな、比較的内容の一定してゐる言葉でも、これを彼等の生活に就ていふ時は非常に内容が違つて來る。市民といふ言葉を英國の紳士に適用する場合と、支那の苦力に適用する場合に見る相違ほどに、同じ父や母といふ言葉でも我々と彼等とでは内容が違つてゐる。これだけを保留しておいて、スペンサーの報告から原始社會の主要な樣相を數へ上げると次の如くで

ある。

原始的結社生活の諸要素　勞働の關心とか、美や正義の觀念とかは、文明人にのみ見るところであつて、亞弗利加の沙漠に水草を追つて漂浪するアルンタ族とか、ワラムンガ族とかいふ手合は、さうした精神的な關心が全然缺如してゐるといふものもあるが、これは甚だしく誤つた觀念である。萠芽的なものまで加へれば、六種類の關心（以上述べた）は幼稚ながらも認められる。勿論かうした關心そのものに、殊更に人爲的なる屬性を加へたならば、凡て人間らしい關心は持ち合はせてゐないといふことになるか知れぬが、然らざる限り、富の關心といひ、知識の關心といひ社交や美や正義の關心といひ、すべてこれらのものはアルーンタ族やワラムガ族にも認められる。彼等は文明社會に見るやうな衞生の設備を有たないし、その他經濟、政治、科學、美術上の制度も有つてはゐない。この點は第一彼等にかうした關心を意識して、これを抽象的思索の對象にすることが出來るかどうかといふことも疑問である。我々こそ彼等の行動を色々に解釋して見るが、彼等自身は自らの行動を自ら解釋するといふやうなことはないらしい。卽ち我々が彼等の行動を因果的に法則化するだけで、この法則は未だ嘗て彼等の心に意識されたことはないのである。彼等の活動は關心の本能的形態の最大限度と、意識的形態の最少限度とを反映してゐるのである。然し意識的とか無意識とかいふことを離れて考へれば、如何に低級な野蠻人でも、文明人が一般に持ち合はしてゐる關心を確かに有つてゐる。かかる人種學的事實を我々の始祖の場合に移していふなら、人間は少くともその原始的な狀態に於て、既に我々と同じ六種の關心を具備し、從つて我々と同じ刺擊に對しては同じ反應に出てゐたのである。

第二には彼等の如き野蠻種族も、ごく萠芽的ながら一定の社會的構造を有し、それによつて一定の社會的必要を充してゐる。彼等は食を求め、性交し、哺育して、ただそれだけのことのみで日を送つてゐると考へるのは誤りである。動物の生活は單にそれのみであるが、我々と同じ人類に屬し、我々の始祖の生活を再現してゐるアルンタやワラムンガは決してさうぢやないのである。彼等はこの營養と性交と哺育とのために一定の組織を發達さしてゐる。その社會組織が、果たして蜂や蟻の社會制度よりも複雜であるかどうかは、今直ちに保證し難いところではあるが、野蠻人の場合にも蜂や蟻の場合に見ることの出來ぬ組織的努力が存することと、人間の社會過程を他の動物の社會過程以上に進化せしめた或種の動因が作用し始めてゐることだけは、確かに斷言することが出來る。この事實は直ち

に我々文明人の社會進化の始原に就ても、類推し得られることである。

第三には部族社會の構造である。具體事實に就ての詳細な説明はするを得ないから、その要素をなしてゐるものとして、トーテムを中心とした社會的構造、性の關係を秩序立てるための社會的構造、神祕的禮拜のための制度、とこの三特色を數へるに止める，然しこの特色は、必ずしも社會構造の機能如何を中心とした分類ではない。何となれば、トーテムの表面的意味はある部族の始祖を表象し、血縁による社會組織の緊縛を意味してゐるのであるが、同時にそれは經濟上、倫理上の意味をも含んでゐるからである。性的秩序、且禮拜制度にも同様のことがいへる。從つてここに意味づけようとするのは、これらの社會的構造が如何にして生れたかといふことである。いふまでもなく、これは夫々に一定の關心の反映として産み出されたものである。トーテムの構造は食の關心によつて決定され、禮拜の制度は社交その他の精神的關心の萠芽を含み、性關係の構造は勿論性の關心によつて樹立されたものである。かくの如く、夫々の關心が一定の社會的構造と機能を生み出すといへる提言は、この社會過程の原始狀態に於ても、是認されることでなければならない。

第四に注意すべきことは、野蠻種族も社會的權力の萠芽を有してゐるといふことである。然しこの權力は、近代社會に於て政治學上に決定されるやうなものではない。具體的にいへば、個人に對する個人、または政治的機關の命令權といふやうなものではないのである。それは關心の一致の結果、この一致した關心と矛盾するやうな關心が禁止されることを意味する。かうした社會的權力は、原始社會に於ては風習の作用の中に現はれてゐる。即ち社會成員が總て一致した關心を有し、從つて同一の生活形式を採ることから、習慣と模倣とのために、この形式から離れることが困難になつてくる。更にまた原始社會では、習慣の攪亂者に對して、文明社會で見ることが出來ない程の嚴酷な制裁が加へられる。一面からいへば、これは彼等の間にあつての關心の一致が、文明社會のそれに比して密度が高いことを語るものである。經濟的活動にせよ、信念にせよ、他人に對する態度にしろ、各人の間に殆んど差違が發見されないのが、原始社會に於ける顯著な特徴である。

社會過程の要素たる環境、關心、個人、社會的構造、社會的機能、社會的目的等のものは、かく野蠻民族の生活を參照することによつて證明された。而もこの事實を類推して文明人の原始的社會生活にも存在してゐたことも實證されたのである。然らばこの社會的要

素が、如何なる段階を經て發達し、分化して行くものであるかといふことが、新なる次の研究となつてくるのである。

第四章　社會過程の諸段階

「モルガンの段階說」社會發達の諸段階――卽ち具體的にいへば經濟上の發達、宗教上倫理上の發達、政治上の發達の諸段階如何といふことは、進化的、發生的な觀察をなす近代の社會思想家により、齊しく重要視された題目であつた。然しそれらの諸家の見解は、基準の立て方に就ても、段階の分別に就ても甚だしく區々雜多で、學者の數と共に段階說も違つてゐたといはれる程である。然しその中で最も廣く知られ、從つて比較的定說に近いのは『古代社會』の著者ヘイス・モルガンの『人類發達の主要階程』說である。モルガンの見地は、發明及び發見の進歩を以て區劃の規準に擬してゐるのであるが、それも主として古代社會の發達を取扱つてゐるに過ぎない。

一、低位野蠻狀態　人類の幼少時より次の時期の開始まで

二、中位野蠻狀態　食用魚類を捕獲し始め、且つ火を使用する智識を得た時より次の時期の開始まで

三、高位野蠻狀態　弓矢を發明せる時より次の時期の開始まで

四、中位未開狀態　製陶術を發明せる時より次の時期の開始まで

五、中位未開狀態　東半球に於ては動物を馴養し始めた時、西半球に於ては灌漑によつて玉蜀黍その他の植物を栽し、且つ煉瓦及び石材を使用し始めた時より次の時期の開始まで

六、高位未開狀態　鐵鑛を溶解する方法を發明し、鐵器を使用し始めた時より、次の時期の開始まで

七、文明狀態　聲音文字を發明し、且つ文句を書くことを始めた時より、次の時期の開始まで

「段階の二系列」モルガンに比してラッツンホーファーは、前述の如く常に關心の反撥及

び調和として社會過程を見てゐるのであるから、その社會的發達の段階論も、反撥と調和の二つの線に沿つて、平行的に行はれると見るのである。左にラッツェンホーファーの段階說を掲げる。

闘争發達の段階

一、群及び種族
二、種族の定住
三、封鎖的社會としての國家
四、强力國家の世界的覇權
五、同盟
六、勢力の平衡
七、侵略的併合による國家的消滅

倫理的發達の段階

一、中間の保護
二、關心の共同
三、平和のための政治的自制
四、一般的自由と法的權利の平等
五、國家間の友誼
六、生産力激增
七、資源の保存及び增加
八、倫理的滿足

この兩列の發達の相互間の關係は、闘争的發達の各段階に次いで、倫理的發達のそれに相應した階段が現はれるといふでもなく、または二つの發達が完全に併行して起るといふのでもない。然し全體として見れば、闘争發達の方が倫理的出發點となり、全體的社會過程の發達の上に、決定的な作用をなしてゐると見られる節もある。とはいふものの、彼の考へとしては、この兩列の發達の相互的決定作用を暗示し、殊に現代に近づくにつれて、倫理的發達を重視しようとするらしいところも見え、またさうかと思ふと『政治學の本質及び目的』の一章で、所論の大半を割いて闘争的發達の行程を說明してゐることもあり、何れをより重視するかは餘りに忖度を許さない。ただ何れにもせよ、最も安心して推測することの出來る彼の立場は、闘争の系列を社會過程の形式と見、倫理的發達の系列をその內容と見ることとである。ある工場に行つて最初に氣を取られるのは、輪車の活動であり、エンヂンの騒音であり、熱であり、塵芥であるやうに、闘争的系列は結社的機械體の外觀であり、その活動的様相である。それと共に、工場の齒車やエンヂンの中に隠れて、加工材料の各機關部に於ける徐々の進行がある如く、この表面的な闘争系列は、倫理的發達といふ內容的な社會過程の一つの現はれ、つまり伴隨物でないかとも思はれる。

分類の基準　彼の段階說を具體的に說明する前に、社會過程の段階を分けるに就て何と基準とするかを見よう。人間の結社は物でなく一個の過程である。然るに一連の過程はこ

れを單なる因果關係の發展と見るなら、その間に何等の特質も段階も發見することが出來ない譯である。故にこの社會過程をその變化の相に於て認識しようといふ場合には、夫々の過程が如何なる價値と機能を有つかを見究めねばならぬ。これは丁度、輪や軸やベルトや齒車の機能を、機械全體の目的に照應して理解するのでなかつたならば、機械の細部を分類することも、全體のカラクリを理解することが出來ないのと同じである。繰り返して述べるごとく、人間の生活は個人的なると社會的なるとを問はず、すべてが個人に内存する關心を實現する過程に他ならぬ。從つて原始群の生活にせよ、歴史上または現代に於けるある一國民の生活にせよ、もしくは國家内部に於ける小團結の生活にせよ、總てがこの關心の實現を期するの一階梯または一要素に過ぎないといへる。而もこの關心なるものが六種類に分類されること、これも繰り返して述べて來たところである。社會過程の究極目的といふのはつまり、これら六種類の關心を普遍一律に充足することなのである。依つてこの全體的過程が、もし幾つかの段階に分けられる事實があるとすれば、畢竟は夫々の段階がこの究極目的に向つて、如何なる貢獻をなしてゐるかといふこの相違でなければならぬ。即ち各時代によつて、六個の關心のうち何れの種類が、如何なる程度に滿足させられるかといふことが、社會發達の段階を決定する基準となるのである。

理解を直接ならしめた爲、假りに數的方式で現はすことにする。夫々の段階をX、X^1、X^2、X^3、X^4……X^mで表はし、根本的關心をa、b、c、d、e、fで示すとすれば、

$$X=F(a_{n,q},\ b_{n,q},\ c_{n,q},\ \ldots\ldots f_{n,q})$$

といふことになる。右の公式に於て、nは關心の性質、qはその量を表はす變數であり、Fはあらゆる人間の結社生活に共通したある狀態を現はす常數である。かくして滿たされる關心の量及び性質の上に起る變化を一義的函數として、社會過程の段階はX′、X″……X^mと變化を遂げてゆくのである。この間最も注意しておくべきことは、關心aその量を表はすqが、同じ式つまり同じ段階にあつて、その他の關心の量を表はすqと必ずしも同一でないといふことである。のみならず、各階段に於て滿足させられる夫々の關心の量は、互に相違するが常であるから常に同一でないといつた方が正しいかも知れぬ。例へば群及び種族の段階にあつて、生理的關心の量を表はすqは極數に近く之に反してその他のqは零に近いのである。更らに後代の例へば侵畧的併合の時代になると經濟的關心や、社會的關心(つまり他に向つて自己を主張せんとする關心)が、著しくその量を增大して來るのであ

る、かくの如く、もし我々が人類の社會過程の段階を見出ださうとするなら、モルガンの如く經濟的關心の滿足といふ單一の基準を使用するのは正鵠を缺くことである。生理的、社交的、科學的、美的、倫理的、經濟的の六個の關心を基準に併行的に使用し、各段階に於てこれらの關心が、夫々どの程度に滿足されるかを見ることが最も大事である。

ラッツエンホーファーの段階說は、この意味に於てかかる根本的な立場を最もよく理解してゐる。彼の段階表はその表現の上に、幾分か不分明にして不完全なところはあるが、彼の如く機能的意義を重要視し、而も包括的な立場を取つたものは見當らないのである。彼の所謂『倫理的發達の階段』は、單なる正義の觀念だけを取扱つたのではない。他のすべての關心を眼中におき、その何れがどの程度に滿足されてゐるかを考へてゐるのである。『鬪爭的發達の階段』もまたさうである。一見して直接關心に觸れてゐないやうに思はれるが、即ち結社過程の中に鬪爭といふ結合形態がどの程度まで含まれてゐるかを以て分類の基準としてゐるやうに思はれるが、然しこれを仔細に檢覈して見ると、この鬪爭的結社形態の密度如何といふことが、實はそれを生み出した諸關心の種類及び密度によつて決定されてゐるのである。單に表だけを摘出してくれば、そのことが明瞭にされないが、『本質及び目的』の一章前半の說明を見れば、鬪爭的結社過程に對する極めて獨創的な註釋が發見される。この一文を背景としての段階表を見れば、彼の根本的主張を端的に表現したと見られないまでも、一般の理解を助けるためにされた修辭學的便宜として承認されるのである。ところで彼の根本主張がどんなものだかといふに、この鬪爭的結社形態は要するに、倫理的系列に含まれてゐる諸關心を滿足せんとする途上に於て現はれる一の表象に過ぎないといふのである。彼が『シャールマン大帝からウイルヘルム第三世に至る歐洲文明の進步は、軍隊の能力、訓練、戰術の變化によつて察知することが出來る』といつた警句は、彼の意圖を語る具體的な一例である。

總ての結社現象の根源となるものは關心である。衝突とか聯帶とかいふことは、關心の一屬性の外部的表現にすぎない。從つて衝突とか聯帶とかを進步の標識と見るはいいが、然しそれは法王や皇帝を以て歷史を限定する程の意味と効用しか有しないのである。法王や皇帝はそれ自身が社會過程でも何でもない。單なる社會過程を記錄する場合の便宜で、謂はば句讀點なみの意味しかないのである。それと同じく、鬪爭はそれ自身に於て何の意義も有たない。これに向つて意義を附與するのは、鬪爭の當事者たる人間と、鬪爭の目的

たる諸關心の滿足如何とである。これだけのことを理解すれば、我々は卒直にラッツエンホーファーに從つて、社會過程の諸段階を鬪爭の方面から概觀しても齟齬はないのである。寧ろそれは却つて我々をして、該切なる觀念と、深刻なる洞見に到達せしめる便宜を與へるものといつていい。

群の生活から歴史的國家まで　ラッツエンホーファーの說く所に從へば、鬪爭的發達の諸階梯は殊に初期のものに於て規制的權力の變異によつて導き出されたといふ。この種の階梯の最下位に屬するものは、彼の所謂『群及び種族』中の最も原始的な形態である。この原始的結社に體現されてゐる敵對的諸關心、及びこの關心を抑制するがための諸制度が夫々次第に分化して行くにつれて、一列の鬪爭的階梯が生じて來る譯である。この階梯の基礎をなすもの原始群は、牧草を追つて漂浪の生活を營んでゐたのである。從つて彼等の間には、關心の敵對關係が生ずること少なく、社會的權力もまた極く稀薄であつた。行動の一致から生ずる團體的習癖と見るべき權力も、その生活が散漫な結果、未だ異つた生活態度を禁止する上に强力な威壓力を示すことがなかつたのである。從つて後代の社會過程に現はれた强大な權力は、この權力の最少限度の上に次第に追加されて生じたものである。然らばかかる權力增大の傾向を生み出す第一歩となつたところのものは何であるかといふに、種族が一定の土地に土着したことである。土着の結果、土地が各家族の間に分割された。これは最初耕作の便宜上行はれたものであつたが、時を經るに從つて次第に永久的な所有に變化して行つた。その一方で彼等は、種族全體として他の種族を追放せんとし、或は殺戮せんとする欲望に驅られるやうになつた。この定住部族は、旣に後來の成熟せる社會に現はれし諸種の特徵を具備してゐる。第一この定住部族中には父系的權力が最も發達してゐる。第二諸種の傳統が意識的に支持されてゐるのである。風習のかかる傳統的な組織に從つて權力が行使される。傳統及び權力によつて部族內部の紛爭は絕對に禁止され、外部的勢力と抗爭するために、部族內の勢力が打つて一丸とされるのである。かくして鬪爭的發達の第二の段階は、家族の分立と部族全體の定住を特色としてゐる。この種の社會にあつては、權力と軍隊と裁判とが異常な發達を遂げる。換言すれば、この時代の公的生活は、專ら犯罪卽ち風習の攪亂者を處斷することと、外的の襲來に備へ進んで領土を擴張することに宛てられるのである。

第三の段階は國家の出現と共に始まり、歴史的に現はれた結社生活としては最も古いも

のである。旣に一定の土地に土着して農耕してゐた部族が、他の漂泊民族によつて征服され、土地及び勞働が一部の人士によつて占有されるのが、この段階に見られる特色である。權力は主權といふ特殊の形を取り、軍備と裁判は一層結社生活の主要部門となつて來る。征服された人達は奴隷となるのである。この時代以後から、鬪爭生活は判然と二つの方向に分化した。主權がその反對者を鎭壓せんとする努力、卽ち國內政治はその一つであり、社會全體が自己の社會的所有を確保し、且つ擴大せんとして外部の社會と鬪ふもの、卽ち對外政治が第二の方面である。前者にあつては敵意は幾分の制限を受けるが、後者の場合にあつては無拘束に發現するのである。

元來が頗る抽象的な概念である『社會段階說』として、以上ラッツェンホーファーの所說は、比較的事實に近い、卓拔な洞見であるといはねばならぬ。然し原始社會から歷史的國家への變遷に關する彼の叙述には、聊か複雜な事實を無視した傾きがあり、尙ほ幾分槪念的性急が窺はれるのである。彼の觀察は、エヂプト人の捕虜となつた前後のアブラハム族に關する我々の知識と符合しない。またモルガンの『古代社會』に揭げられたイロクイ族聯合の事實を滿足に說明することが出來ない。ホーマー以前のギリシヤ史に於けるヘレン系の酋長の由來も、彼の所說によつて幾多の疑義が殘される。かかる偏倚的な學說を生んだのは、彼の觀察が主としてユーラシア大陸に於けるモンゴリア人及びアリアン人の人種移動のみに限つたからであらう。とはいふものの、これは我々が歷史以前の人種運動に就て完全な知識が與へられない限り、また已むを得ないこととといはねばなるまい。

第五章　社會過程の歷史的形態

豐富なる資料　社會過程の原始形態を論じ、原始群から歷史的國家の出現に至る遷移を究めた我々は、次いで有史時代に於ける社會過程の態樣を見るのが順序である。社會過程の實證的知識を求めようとすれば、具體的事實を拉し來たつて、これを分析することを以て出發點としなければならぬ。然るに有史以前にあつては、その具體事實を求めることが困難で、ラッツェンホーファーの如く實證を重視する學者も、この時代の過程に就ての論斷は、可成りのドグマティックな抽象論を振りまわして、それで滿足してゐるといふ傾きがないではない。ところが一旦有史時代に入つて來ると、別人の如き犀利な觀察をなして

讀者を首肯せしめる。殊に國家生活に關しては信憑するに足るべき記錄を豐富に驅使してゐる。それは單なる國家そのものの記錄に止まらず、詩文戲作の末に至るまでこれを求め當時の國家生活を如實に窺はしめる資料を提供してゐる。總ての國民が夫々に自己の生活記錄を殘してゐるから、これを比較考究することにより、歷史時代に於ける社會過程は、比較對照して實證的に態樣が示されてゐるのである。從つてラッツェンホーファーが自ら提唱し實證的認識方法は、殊に國家生活に關して明確に適用されてゐる。別言すれば、彼の社會過程に關する理論は、主としてこの國家生活の觀察から生れてゐるとも見られる。獨りラッツェンホーファーに限らず、從來の政治學者と雖も、歷史的な國家生活を立論の出發點とした者が多い。然るに彼等の眼を注いだのは、主としてある特定の時代の特定の國家生活に限られ、寧ろ國家生活を擁護しようとする實際的必要に驅られ、ごく一時的現象的な政體なり社會制度なりを絕對の玉座に据ゑ、それによつて一切の現象を演繹的に說明しようとしたのである。絕對主權說とか社會契約說とかの如きは、かくして生み出された嘲笑に價ひすべきものである。その反動として現はれた無政府主義や、ある一派の社會主義の如きも、原始共產制のみを見て、搾取らなければ國家なしなどと說くに至つたが、嘲笑すべき點に於ては前者と同斷である。即ちそれは自己の主觀から勝手に『人間の原始的狀態』を空想し、この社會的アプリオリから演繹的に一切の社會狀態はかくあるべしと强要するのである。その意味に於て、極端は極端と一致するといふが、全く無政府主義の議論は方法論的に見て、御用學者の國家論と差違はないのである。これに對してラッツェンホーファーの行き方が全然その種類を別にしてゐることはいふまでもない。

包括的な國家概念　ラッツェンホーファーの國家論を解說する前に、先づ注意して置かなければならないのは、國家とは單に政治的組織をのみ意味しないことである。國家を單に政治組織とのみ見る觀念は、ミル以前の經濟學的社會思想家の『國家とは富の獲得者と富の消費者との結合なり』といふ觀念と共に、近代國家生活の全體的意義を把握することの出來ぬ觀察である。近代國家は政治組織たり經濟組織たると同時に、それ以外の他の各方面の生活の組織である。即ち國家とはその構成員自身の關心を意識的に追求しようとする協働體である。社會過程の中には國際法とか諸種の國際委員會等の如き國際的交渉も含まれるが、これらは本然的性質として國家內部の諸結合間に起る交通と變るところがない。依つてこの性質的分析の出發點としては、國家的制限內の社會過程だけに觀察を限るので

ある。その上國家は種々の結社を抱擁してゐる。小結社相互間の關聯は總て國家内に見出される。故に國家は我々の考察の對象として恰好な社會過程のうちで、最大の大きさを有ち得るものである。從つて國家を人類結社の總體を見做して取扱ふことは、決して不當でないのである。

社會的律動の兩極　社會過程が一面に綜合融和の過程たると共に、他面に分化の過程であることは既に説いた。いひ得べくんば、分化と綜合とのリズミカルな運動である。最初の社會過程を通して個人化的因素が作用し始めた。これらの個人化的因素は、部族または國民からその小部分が乖離して行く現象を惹き起した。するとそれと同時に社會化的因素が作用し始めるのである。多くの人間が無組織の狀態にあり、乃至は偶發的な不規則的な接觸を保つに過ぎぬやうな狀態にある場合には、彼等の内部または外部に力の渦卷ができて、この離散した人々を引き込んでしまふ。つまり强力な一名または數名の人間に依つて壓服され、上下體統の制度の中に織込まれてしまふといふ現象は、この分化綜合の二つの因素が作用した結果である。併合した數個の集團が混和し、または强い集團が弱い集團を併呑して、國家が次第に發達して行くといふ現象も、この兩因素の大規模な作用といはなければならぬ。かうした個人化的勢力は、歷史的時代に入つて國家生活の内部では姿を沒すると思ふは誤りで、國家もまた大規模な個人化的または分化的な動反動の作用に外ならない。最初國民が發生したのも、それが國家として組織づけられたのも、すべて社會過程が國家を生んだ後、猶も分化を續けて行かうとする傾向もしくは原因を語るのである。國家を造り上げたと同一の根本關心が、その國家の内部で更に分化の勢ひを助長して行くのである。故に國家そのものは高度の分化を遂げた社會的構造だといふことが出來る。即ち國家の内部では支配者が分化を續けてゆくと共に、被支配者の方でも同じく分化を續けてゆく。この時代にあつても、原始的な關心は依然として姿を隱さない。飢と性欲と同類親和の傾向は、矢張り人間の社會生活に重大な影響を持つてゐて、これがその他の精神的な關心と一緖になつて、永遠に分化の傾向を押し進めて行くのである。かうした究極的衝動は、その表現形式の上に幾種の變異を生み出す。そしてこの變異は社會的相互作用、從つてまた社會的構造の上に反映して、そこに無限の變化を生み出すのである。加ふるに新しい關心の分化は、その關心が既成の勢力によつて防止されない限り、それを中心として國家の内部に新しい集團を出現せしめる。この集團成員は、最初から自己の關心を抑壓せん

とする他の關心に對して、一致協力して對抗するのである。どんな猛烈な生物學的表象主義の反對者でも、この點に於て國家と物理的有機體との間に、著しい類似のあることを否定できまい。國家は確かに非常な複雜さをもつた組織體で、或は諸組織體の組織體といふことが出來よう。而も國家は單純な組織體たるに止まるものではない。國家の內部（時々はその外部）に並列してゐる諸集團は、相互に混和したり分離したりするのであるが、これは第三者の意識的指導によるものでもなく、各自が自發的にその方法を考へ出したのでもない。恰も物理的有機體が、次第にその諸機關を分裂し、かくして機關の數が殖えることにより、有機體の全身的活動がより廣汎な生活目的に適合してゆくが如く、歷史的社會としての國家もより多くの結社の中に分化を遂げて行くのである。その結果、個人的成員の關心と社會全體の關心とが、複雜な生活條件に適合して行くやうになるのである。

國家的體制の錯綜と關心の鬪爭　國家はその包容してゐる諸集團が、お互ひに競爭と鬪爭を始めるに至つて、益々複雜となつてくるのである。有史時代の國家的組織が、如何にして生れたかといふことは一槪にいへぬことである。モーゼの獨裁に服してゐたイスラエル人の場合には指導の必要が一般に認められた結果として生れたのかも知れない。或は一派の人が主張する如く、征服によつて生れたのかも知れない。が、その由來の如何に拘らず、國家に二つの主要な要素が含まれてゐることが觀取される。支配者と被支配者が卽ちそれである。玆に於て前のイスラエル人の場合を見れば、種々の萠芽的集團の內部に潛んでゐた敵意は充分に忌憚なく發現する機會なく、從つてその內部では政治的動反動の作用は幾らも進步しなかつた。人々が同質的であるがために、鬪爭と不平等の起る機會は最少限であつた。後代の征服國家の場合にあつては、被征服層の人達は自己の關心を實現することが出來ず、彼等は事實上級社會層に取つての一つの道具に過ぎない。そして主權を握つてゐる社會層の關心は、絕對であり至高である。然しかうした征服國家の狀態にあつても、支配者の關心に抵抗する關心が必ずしも絕無だといふのではない。例へば革命前のロシアに於ける猶太人の關心にしても、コンスタンチン大帝以前に於ける基督敎徒の關心にしても、民主國の公民のそれの如く自己の利害を追求してゐたのである。尙ほ前の自成的國家にあつて、政治的錯綜は、國外の勢力が關與する場合に起され、これがない場合は內部からも發生するが、後の征服國家にあつては、反對勢力か國外から作用することによつてのみ、政治的勢力の錯綜が起され得るのである。

政治的活動が旺んに營まれる結果、社會過程が錯綜せしめられた實例としては、異國的分子の同化の場合を擧げることが出來る。この國外の分子といふ第三の要素が、從來の支配者及び被支配者といふ要素に加へられる時は、被支配者は自己の抑壓された關心を實現する上に、却つて都合がよくなるのである。一つの國家がもと外國の人口を吸收したならば、舊來の市民分子は新しい人民に向つて、自己の政治上、經濟上、社會上の先取權を主張し、以て比較的優秀な地位を確立する。戰前ロシアの平民が、ユダヤ人を蔑視し迫害したのは正にそれである。かうしたことは、實は社會的激昂を緩和する手段にもなるのである。ローマの庶民をなだめるために、國外分子に對する一種の特權を與へたが如きは、その具體的な實例である。

征服國家と支配階級の保守的傾向　國家の內部に起つた關心分化の過程を、一々忠實に說明することは困難である。今日の質的分析がもつと發達し、一方國家發達の各時代に於ける社會過程が量的に分析されるやうになり、始めてその目的が達せられるべきものである。今のところは先づ、國家內に作用しつゝある根本的な動反動の作用を並べる位で、我慢して置かなければならない。この本源的な運動樣式は、國家生活の成立事情が變るに從ひ、それ相當の變化を示してゐる。征服によつて成立した國家の支配階級は、社會分化を嫌つて、これを抑壓するために凡ゆる努力をも惜しまない。殊に彼等は中間階級の出現を阻止するために、非常な熱心さを示すのである。この傾向は軍事的征服によつて、自己の權力を確立した古代貴族に見られるばかりでなく、產業上、商業上の優越を基礎として現代文明國の支配階級に於ても、同樣の事實が觀取されるのである。英國の支配階級が、永い間、法律的手段及び議會內の論爭によつて、勞働組合の發達を抑へて來たのは何人も知るところである。

國家內の分化が、國家發生の起因をなせる征服被征服の關係の延長に過ぎぬ限り、社會的上下層の區別は、避けることの出來ない事實である。それは恰も、原始社會に於て性的關係を規制する社會的構造が、飽くまでも差別的なものとして殘つたと同じことである。五世紀の末から六世紀の始めに掛けて、テオドルイッヒ領のオストロゴス族が、伊太利全土の被征服民との間に峻嚴な差別を立ててゐたことは、社會分化を嫌つた實例として擧げることが出來る。またノルマン征服族の後裔が、アングロ・サクソン人に對して執拗な人種差別を設けたのも同じ例である。然るにこれらの差別は、時を經るに從つて次第に支持を

失つて來る。それは國家内に抱容された種族の數が多くなり。その結果、種族的差別線が錯綜するに外ならない。

記錄に殘されてゐる最古の國家では、彼等が征服と領土擴張の結果、幾多の種族を抱容するに至つた後でも、社會條件を固定化しようとする努力、卽ち征服によつて生じた上下體統の構造を維持しようとする努力が、常に見られてゐた。かうした努力は、それが本能的たると意識的自發的なるとを問はず、社會的、人種的、經濟的、宗教的、科學的の各種關心の刺戟によつて、自由奔放に展開しようとしてゐる自然的な活動を、故意に停止せしめるものといふことが出來る。故に新しく收容される總ての種族的集團は、それが充分に强力で、自身で他の集團の鎭壓者となるか、さもなければ從來の固定的秩序内に於て從屬的な地位を占めるか、その二つの一つに落ちつかなければならない。これがエヂプトまたは印度に於けるカスト制の眞相なのである。かうした傳統的區劃の内部に陷ちると、總ての從屬的集團は當分の間、自らが社會的鬪爭の一要素であることを忘れてしまふ。それ故に一定の社會的秩序は、關心の自由なる追求によつて曝される改廢の危險から免れるのである。これを要するに、專制的國家は自己の鎭壓本能に從つて、あらゆる手段を盡くして社會秩序の原型を、永遠に支持しようと努力するのである。而も此方法を時の支配階級から見ると、社會的幸福の基礎を完うする唯一の方法であるかの如く思はれる。全世界を通じて、權力を握つてゐる人間は、權力を自分達の階級で保持することが、社會的安寧を維持する上に不可缺なものだといふ風に考へる。專制家の考へ得る唯一の條理と秩序とは、自分達の手によつて按排される事物の狀態だけなのである。

以上の原則はその發現に際して、もちろん種々の變改を蒙つて表はれる。しかし暴力を基礎とした國家の狀態を立ち去つて、現今の狀態に近づくにつれ、かうした原則が社會生活から次第に撤去されるかといふに、必ずしもさうとばかりではない。歷史上の如何なる時機を觀ても、權力階級は常に他の階級が權力に近づくことを好まない。この原則は泥棒上りの男爵や、ペルシヤの暴君に適用されると同時に、英國の保守黨議員にも當てはまることである。政治上の勢力家といふのは、如何にすれば自分の勢力を他人に分ち與へないで濟むか、といふことばかり始終考へてゐるものである。東洋で幾度かカスト制度が復活されたのはこのためであり、西洋でローマの貴族や中世の封建貴族が、社會秩序の堡砦を以て任じてゐたことも、畢竟はこの欲望に出でたことである。『分割し支配する』といふ法

則は、決してローマ人の發明したものではない。すべての軍事國家に取つての金科玉條であつたのである。かくの如き國家に本具する精神と政策とを表白してゐるのである。從つて取るに起らぬ輕輩共と考へられた被支配者の手により、この種の國家の一切合財を顚覆しない限り、人間の社會からかくの如き政策を絶滅することは出來ないのである。

國家生活の必然的要求　原始農工民及び父系中心の族姓社會にあつては、個人が自己の能力に應じて、制限を受けることなく自己の境遇を開拓してゐた。然るに國家的組織が支持されることとなり、漂泊民の侵入を防ぐ必要に迫られるに至り、玆に個人の獨立の上に一定の拘束を加へるところの公共的政策が出現した。歴史的社會は已むを得ざる必要として、ある程度まで個人的目的の追求と團體分立の自由とを抑制しなければならなかつた。換言すれば、國家の秩序は常にある程度の個人の自己追求を犧牲として、始めて支持を完ふすることが出來るのである。

一方この權力と、一方嘗て一定の力を認められたことのない結社要素との間に行はれる上述の如き衝突の過程は、最高の文明社會の中でもこれを認められる。大革命前に於ける佛蘭西の第三階級は、王や貴族　僧侶と全然別趣の關心を抱いてゐた。その狀は恰も彼等が人種を別にしたかの如く、征服され奴隷とされたばかりであるかの如くであつた。これに反して、王や貴族や僧侶は第三階級が獨特の政治的活動を營むことを防止するため、自ら鎮歴的關心と政治上の偏見とを抱いてゐたのである。十九世紀の英蘭では選擧權擴張のために三つの重大な運動が行はれてゐるが、この運動に當面した二つの相反せる階級は、一方が政治的權利の需望を代表し、他方が政治的權利の拘束を代表してゐた。かかる鬪爭は今に至るも終決したといふのではなく、ただその行はれるレベルが聊か違つてゐるといふに過ぎない。普通選擧が實施され、勞働黨が政權を握つてゐるにも拘らず、社會問題の解決が前途遼遠なのを見ても知られる。荷揚人夫より貴族または大資本家に至る社會的統制の區劃は、人間の生活に越ゆるべからざる障壁を設けてゐること、今も五百年以前も何等變るところはない。

社會制度の神聖化　以上の所説を國家內に於ける關心の分化如何といふ方面に見れば、大體次の二つの提言に要約することが出來る。(一)政治、宗教、職業、產業上の諸制度は、國家生活の內部に於て、諸種の關心を充たさんがために、徐々に現はれて來た方便乃至手段である。(二)これらの方便はそれによつて自己の社會的地位を保つてゐる人々には、究

種の目的であるかのやうに映ずる。啻に方便のみならず、この方便に附隨した諸種の變形物すらも、これをそれ自身の目的と感ずるやうになる。一定の制度が保護され尊重され、而して永續されるのはそれあるがためである。社會的に必要な仕事を完成する手段として自己の職責を果たし、もしこの仕事を遂行する能力がなくなつたとか、又はこの仕事に對する社會的必要がなくなつたといふ場合には、潔よく自己を解體してこそ、諸制度は眞に本來の職能を忘れないものといふべきであるが事實は之に反してゐる。即ち一定の制度が持續されること永ければ永いだけ、これに內存的神聖感が伴ひ、人々はそれがためこの制度の手段的意義を理解することが出來なくなるのである。かくしてこの制度の運用者として生活を立ててゐる人々は、社會的効用の立場から判斷を下す人々に對して、異種族が征服者、被征服者として對峙してゐたと同じ敵意を示すのである。結論的にいへば、社會制度は元々人間の相剋を緩和する手段方便として發達したのであるが、やがてそれは却つて相剋の源泉となつてしまふのである。

保守的傾向と急進的傾向　以上國民生活に於ける諸制度の分化的事實を說いたのは、これを前提として更に重大な問題に入らんとする準備である。即ち分化の事實を觀察することにより、國家內部に於ける諸目的の分化及び聯帶の法則を究明せんがためである。產業上の組織、家庭生活の諸制度、科學の進步、行政機關の完成、德律の設定等は、本來人間が自己の根本的な關心を實現せんとする過程上に起る隨伴現象なることは既に說明した通りであるが、これらのものの諸活動は別に他面に於て關心實現の上の障碍となつて來るのである。そこである社會生活上の事實が、人間的過程の進行に對して、前進的要素であるか退步的要素であるかを判定せんとするには、我々は先づ人間活動の機械的構造的概念から一步を進めて、それの目的論的機能論的解決に到達することを心掛けねばならぬ。この心掛を以つて、國家內に於ける關心の鬪爭といふ問題を眺めると、我々はラッツエンホーファーの『政治的諸原理』なるものを發見し得るのである。即ち國家內に割據する集團と集團との反對鬪爭の中に、社會過程を貫通して作用せる矛盾した諸種の傾向と、その傾向の諸種の發現樣式とを發見し得るのである。ラッツエンホーファーの『原理』とは、この意味の『傾向』と解すればいい。

兎に角も、國家內に發現する社會力相互間の、根本的反對鬪爭は何んであるかを見よう。そこでラッツエンホーファーの『政治的原理』の中から、『固定的原理』と『革新的原理』

なる二つを抽出してくることにする。固定的原理とは、前に説明したところの諸制度の墨守的傾向、現狀固持的傾向を意味する。これに反して革新的原理とは、一定の社會的均衡を破解しようとする傾向で、社會狀態の變化を促す因素である。この二つの傾向を嚴密に分析して見ると、何れが先行的で何れが伴隨的だといふのではない。決して一方が德德的に優等で他方が劣等だといふことはなく、純然たる科學的相對のものである。蓋し兩者は共に、國民のある一部分のエネルギーの發現に過ぎず、ただ彼等の關心が相互に矛盾してゐるがため、その關心の追求に於て或は固定的傾向を示し、或は革新的傾向を示してゐるに過ぎないからである。即ちどこまでも科學的な認識そのものであるが、然しこれを實際上の問題として、この兩傾向の倫理的價値を檢覈するのは可能で、これは時の社會的必要と、全體的社會目的の關係から割り出されなければならぬ。例へば一定の社會狀態にあつては固定的因素が社會に取つて最も適切なプログラムを代表してゐるが、他の場合には革新的傾向が窮極的目的を體現してゐるといふやうなこともある。何れにもせよ、現在の社會科學の範圍にあつては、一切の倫理的區別を避けて、一定の社會狀態を停止せしめんとする力はこれを固定的と稱し、この狀態を攪亂し變改する結果に立ち至る力は、これを革新的とか變改的とか呼ぶのである。嚴密にいへばこれだけで盡くせぬ點もあるが、ラッツエンホーファーの固定的とか革新的とかいふのは、この程度の理解を以て接して大した違算はない。

社會的妥協の發達　原始社會を顧みて、先づ第一に發見される人間の衝動は、飢餓と性慾と血緣である。然るに有史時代に發達を遂げた後の社會を觀察すれば、これらの原始的衝動が新しき環境により、諸種の拘束を受けてゐることが目につく。これに依つてこれを觀れば、國家とは歸着するところ、諸種の反撥する傾向を相互讓步の手段によつて纒めんとする必要から生れたといふことが出來る。換言すれば、諸種の相反撥する關心が、同一國家の內部に併存し得ようとするためには、彼等の間にある程度の自己抑制が必要となされるのである。各個人が絕對的に自己を主張することを止めて、それにある程度の拘束を加へるといふことは、かくして關心の矛盾相尅に次いで起るところの、社會過程の一樣相であるといはなければならぬ。

上來の記述によつても分明な通り、國家創成の當初、及びそれ以前の社會過程にあつては、この自己否定または自己抑制が、被征服者の側にあつては自己抹殺に近き極限に達す

るを餘儀なくされてゐた。彼等の關心は完全に征服者の關心の中に吸收されてしまつたのである。然るにこの時代に次いで現はれた一つの階梯にあつては、一部の人間による絕對的吸收の現狀がやんで、關心は相對的に吸收されるに過ぎなくなつた。故に最低級の野蠻人の間にあつては何等妥協の現象が行はれず、一の部族が他の部族を征服するに至つて、始めてこの妥協の行爲が現はれたといはなければならない。そこでは主人對奴隸の關心が勝利者と敗北者の間に結ばれるのであるが、この關係は弱者の關心に對する最少限の讓步を示すものとして、爾後の讓步的傾向の發達に對しての出發點となつてゐる。この狀態から更に一步を進めれば、支配的種族例へばローマ人は、他の敗北民に貢租を課するに止め、これを奴隸に使用することは思ひ止まつたのである。更に後代に至り、例へば中世近世の貴族社會の如く、一定の階級が法律によつて特權を享受し、そのために生ずる負擔は、同じく法律によつて他の階級が荷せられるのである。これら何れの場合に就て見るも、抑へれた關心が次第に部分的に表現され、解放された關心が益々部分的に抑壓されて行く過程、卽ち關心と關心との適應の過程を語るものである。この過程の究極するところは、個々の關心が、關心の總體によつて規制された範圍內に、一律平等に制限せられるといふ狀態であらうと想像される。

國家の意義　このやうにして國家は最後に一個の道德的制度となる。これは取りも直さず、社會過程の總勘定なのである。が、さうした最後目的といふやうなものは問題外として、現在の見地からすれば、國家はそれが近代的な成文法を有つた國家であると、或は習俗と認可された秩序とによつて基礎づけられた國家であるとを問はず、その社會的意義は次の如きものである。

個人的または集團的の關心は、最初の程は全然不秩序に作用するか、少くとも不適當な秩序に從つて作用してゐたのである。然るにこれらの關心は、今や一定の進步した秩序の下に統一されようとしてゐる。そしてこの秩序の內部では、各個の關心は社會の一般的關心に從つて、ある程度まで自らを抑制しなければならぬ。國家とはかかる關心の自己抑制の機關である。これを前の固定的原理と革新的原理の言葉を以て表現すれば、國家とは現存の秩序を破壞せんとする革新的な力と、國民的關心が個人の部分的關心によつて、解體されるのを防止する固定的な力との間の、均衡調和に他ならないのである。

この提言の實證としては米國の聯邦制度が適例である。米國の聯邦國家制度は、一方に

分權主義、一方に國民主義といふ殆ど調和が不可能な兩勢力が、妥協調和して生れたものである。いふまでもなく、聯邦主義は明らかに舊守的思想であるが、米國の場合では、集團的關心と特殊的關心との調和を示してゐる。米國ほどに大規模ではないが、總ての國の國家生活にもこれを見られる。すべての文明國家は多くの關心を抱容し、而かも關心が無制限に自己の滿足を追求することが出來ないところから生じた一個の調和體である。といふよりも、寧ろ夫々の關心が自ら進んで、調和の基礎を見出ださんとするのだ。フィリップ・ブルックは嘗て『人は總ての權利を主張する權利を有する者に非ず』といつたが、この命題は社會哲學の全體に通じてもいひ得られる言葉である。

同様のことを他の反面から概括すればかういへる。自然的な原始社會が進歩を遂げて國家が生れる場合には、先づ嚴格な支配服從の體制を設け、個人をこれに適合せしめるものである。故に國家はこの方面から觀察するとき、社會過程によつて生み出された機構の一斷片に過ぎない。しかしその存在の意義根據に至つては、却つてこの過程を不斷に速進することであらねばならない。とはいふものの固定といふ機構の直接の傾向は、自らの構造に信頼し滿足しようとするのであつて、それがため反つて社會過程の進化を阻害するとい

ふ結果を伴ふに至る。故に國家が社會過程を促進することによつて自己の使命を完うせんとすれば、國家の出生を促すに與つて力あつた一つの勢力が、國家の固定的傾向と協同しなければならんのである。さもなければ、國家は社會過程の墓石となるのみで、その進化因素となることは絶體に望み得ないこととなる。

然らば、國家の使命を完うせしめるため、それを協勤する因素とは何かといへば、その一つは個人の關心であり、他の一つはその關心が互ひに相補ふことを了解することの出來ぬ個人と個人との間の鬪爭である。

以上述べるところによつて、國家内に於ける社會過程の諸方向を、一通りは見ることが出來たと思ふ。これについていへば、現存するものは國家ではなく、國家は將來に於て實現される一個の目標であるともいはれやう。それと同時に、國家を構成する人間も現存せず、ただ將來に彼等の出現を期待することが出來るともいはれやう。何となれば、『過程の進行』といふことは、個人及び社會の本質を求める上に、我々の根本的信條となつてゐる所のものだからである。

社會過程は關心、機能及び構造の寸時も休むなき辨證法的展開である。個人内に於ける

關心は、個人の相互衝突といふ現象を惹き起す。この衝突は必然に、接觸及び反作用の一定の秩序を生み出す傾向を持つてゐる。而してかく一定の秩序を以て反作用が行はれる結果は、更に人間の一定の構造または配置が現はれることになる。が、しかしこの一連の固定的傾向は決して絶對的なものではない。一轉しては集團内部に於ける新しい運動の刺戟となるのである。卽ち限られた一部の人々が、自己の關心を意識する限りに於て、この停止狀態が望ましいものとなるのであつて、他の人々がその關心を意識するに至れば、一定の結晶的社會形態は堪え難きものとなるのである。集團内部の分子運動は、玆に於て新しい方向を取つて展開されるやうになる。一部人士は舊來の社會的構造を細大洩らさず存置しようと努めるのであるが、他の人達は自己の關心を實現せんがため、出來得る限り現存の社會的構造を更新せんと努めるのである。かくて幾分の修正を加へられたる社會構造のうちに、二つの反抗が姿を現はし來たり、この社會的構造を中心として保守的分子は防衛に努め、片方の新しく目覺めたる關心は、これを顚覆破壞せんと計るものである。分化的事實は次第に振幅を擴大し、關心と機能と構造とは、互ひに因となり果となつて新しい形の中に更生する。關心と機能と構造とは複合し、再複合し三複合し、無限に複合してその結果國家の機能もまた次第に錯綜して來るのである。社會過程は、この種の結合體によつて代表される變化し易き諸勢力の動反動の作用を通じて、無際限に展開して行くのである。この展開運動に對する國家の立場は、時にはその所產となり、時にはその條件となるのである。

ラッツエンホーファーの研究は、かくの如く國家の一般的意義を、分化と融和、鬪爭と協動、この二つの對立した傾向の會流點として理解することに努めたものである。解說また餘りに概念的、一般的にすぎた傾きがあるから、この上はもつと具體的に我々の社會生活を理解することに力を注がう。そしてその具體的に見ることとは、ある意味に於て鬪爭事實を主として觀察を下すことである。『卒直に具體的に！　そして人間の鬪爭的姿を直視せよ、』この態度は二十世紀の初頭、プロイセン王國の强權に加餐して、行動の時代、覇業の時代を翹望してゐたラッツエンホーファーの眞骨頭でもあつたのである。

第六章　鬪爭の發生

國家の個性　夫々の國家には獨自の個性といふものがある、古代ギリシアのスパルタなると、ローマ帝國たると、又は現代の民主的米國たるとを問はず、その國家生活を理解する上に最も重要な標的となるものはこの國家の個性である。我々の社會生活に作用せる關心のうちで、最も顯著な位置を要求し、他の關心を從屬せしめんと掛つてゐるのは、この國家の個性內容を形成してゐるところの諸關心である。この言葉は一種の假面によつて眞の個性が隱されてゐる米國の場合にも、一切の關心が主權の中に吸收されてゐたローマ帝國の場合にも、等しく適用されるところのものである。

民主的な國家は、兎もすれば自己の眞の個性を忘れ勝ちである。從つて他の如何なる國家の場合よりも、愼重に自己の個性を省察することを必要とする。個人と同樣に國家は自己欺瞞のイルュージョンを抱くものである。民主的國家の觀念そのものは既にこの種のイルュージョンの一つである。少なくとも、それがイルュージョンでないといふことを、立證する事實は摑むことができないのである。社會生活の條件を忌憚なく改善して行くためには、現在考へられてゐるやうなデモクラティックな觀念に、幾他の修正を加へた上でなければならぬ。例へばここに自由といふ觀念があるとする。これは米國人の特殊な生活を支持してゐる一つの重要な觀念であるが、米國人はこの追へども及ばぬ影の如き觀念　實現するため、どれだけエネルギーが消耗されたか知れぬ。彼等は結局兩立し難い二つの主權を調和させるため、不斷の抗爭を閱して來たのである。州政府の陰に隱れて合衆國の監視者たらんとしてゐた『自由』の概念は、州か合州國か、何れかに主權を與へようとするある現實的傾向に、究極は道を讓らなければならぬのである。換言すれば、米國人の傳統的な國家觀念、少くともその主な要素をなしてゐる觀念は、本來『自由』の觀念と矛盾するものであるから、合衆國の國家生活が常規な發達を遂げようとすれば、この觀念を棄てて他から適當な觀念を取り入れなければならないのである。さもなかつたなら、米國は將來に於て『自由』の觀念のために、二進も三進も出來なくなるに相違ない。故に『自由』の觀念は一般の病毒といつて差支へない。この病毒は元々佛蘭西に發生したもので、その昔の古い名稱では『自由と平等』といひ、地球上の文明國で、多少ともこの毒に感染してゐないものはないのである。中でも米國は、最も觀念的な型の『自由と平等』を弄びすぎた傾がある。現に何等實在してゐないところの『自由と平等』を、恰も實在してゐるかのやうに見せかけるため、常に米國政府は餘計な苦勞をしてゐる。人工的に歪められた自由と

平等とを放擲して、敢然と自己の社會的必要を主張しなければならぬ日が、必ずや到來するに違ひない。もしその時に主張する活力が殘つてゐるならば、米國は强權國家として面目を一新するだらうし、またその活力が磨滅してしまつたなら、自由の殿堂に草が生える結果となるであらう。米國に取つて歐洲大戰はかかる試練の一つであつたが、その試練に打ち勝つた結果として、現在見る如き帝國主義の大道に踏み出したのである。かくして今後の米國の政治生活に課せられた問題は、如何にして從來の自由の破壁を塗り變へるかといふことである。卽ち普遍的な觀念の世界から蟬脫して、自國民の個性に如何に目覺めるかといふことである。その時に於て、米國に依つて自由の遂に實現されなかつたことを責めるであらうが、さうした意味での自由は、如何なる時代、如何なる地上の國民によつても實現されるものではない。

國家の統一と關心の共通　國家は元は集團間の必要として生れたものである。征服者は自ら主人となり支配者となつて被征服者に臨んだ。然るに今は、個人にしろ集團にしろ、服從の必要と組織的な觀念とを共通に抱くことによつて結びつく場合が多い。亞米利加の各殖民地が英國の誅求に對抗する意味で結合し、それが今日の合衆國をあらしめる抑もの起源となつたこと、英蘭と蘇格蘭と合同して大ブリテンとなつたこと、日本及び伊太利に共通した近代國家の出現形式、封建の退嬰的な獨逸の諸邦が、ビスマルクの鐵腕によつて最も進取的にして近代的な獨逸帝國にまで纒め上げられたこと、等等と組織的關心の共通に基づく結合の例は、他にもまだ求められるのである。國家の關心はそれが征服國家の衣鉢を繼ぐ限りに於て、奔放にして假借するところなき自己主張の性質を有するものであつて、これと競爭の位置にある他の關心に對しては、絕對に排斥の態度を取るのである。國家は自己保存の權利及び義務を主張する上に、常に何等かの『理由』を設けるものである。ところがその理由たるや、時と場合とによつて無限にその內容を變化させるのである。一定時に於て、國家的關心の內部に作用してゐる動機は、X部分は本能と漠然たる情緖とより成り、Y部分は自己の利益を追求する拔目のない計量から成り、そしてZ部分だけが、自己が何故に諸國民の一員として存在する價値があるかといふことの、純粹な反省から成り立つてゐる。この部Z分は量の上からいふと最も微弱である。然しながら、その征服的發生の事實なるにも拘らず、現實の國家は常に國民を組織して、內外の敵に對抗せんとする關心を抱くものである。卽ちそれは、國國の間に愛國心や、名譽の意識や、公共的經營に

對する誇りを刺撃する。近代希臘王國の統一が、土耳古人の脅威に對抗する意味で支持されてゐるのか、それとも過去のクラシック時代に發した傳統的情緒によつて維持されてゐるのか、そこの所は一律に決定することの出來ぬ問題ではあるが、兎に角も、彼等の間に一個の公共的闘心が働いてゐることは事實である。この闘心は自然力と同じ程度に、科學的探求の對象となり得るもので、闘心の內容を分析してその要素を適確に表出することは、將來の文明國民の重要な研究題目となるであらう。我々の現在の研究は、謂はばその地ならしである。國家的闘心を一つの與へられたるものとして、それに叙述を加へることの出來ないのは殘念であるが、細目は向後の研究に待つしかない。

政治的闘心の分類　政治的活動の動機となる闘心、比喩的にいへば、國家の生活の內部に作用してゐる諸種の闘心を說明する前に、ラッツエンホーファー自身によつて分類された政治的卽ち闘爭的闘心の表を揭げる。

（イ）、普遍的闘心（營養）、（ロ）、血族的闘心、（ハ）、國民的闘心、（ニ）、信仰的闘心、（ホ）、營利的闘心、（ヘ）、階級的闘心、（ト）、地位の闘心、（チ）、黨派の闘心

更にその中の階級的闘心に就て、外部的根據となるべきものの分類表は次の如くである。

（a）、農業、（b）、手工業（c）、機械工業、（d）賃勞働、（e）、商業、（f）、公的及び私的奉公、（g）、寄食生活、（h）、僞似階級（資本、大資本、大工業、大農業）。

普遍的闘心　總ての個人と集團とに普遍的に働いてゐる闘心は、生存の確保、つまりあらゆる機會を利用して生命を支持し、且つ保護せんとする欲望である。國家が生產生活の保證として、これに妨害を加へる者を取り除くことに努めるならば、國家はその限りに於てラッツエンホーファーの所謂『普遍的闘心』の代理となるわけである。總ての國家が何程かの程度に於て、この役目を遂行してゐるといふことは、社會研究者が先づ心に入れておかねばならぬ事實である。國家を以て必然の惡と觀、甚だしきに至つては不必要の惡と見る一派の政治哲學にとつては、この事實の認識は抗辯の出來ぬものとなつてゐる。

國家の發達した狀態にあつては、この普遍的闘心が特別な注意を拂はれるやうになるけれども、最初の程は國家の內部に行はれる諸種の闘爭の中で、無意識な役目を働らいてゐるに過ぎない。もしも國家が生活資料獲得の役目を、一部の個人または集團に負擔させるならば、普遍的闘心はある程度まで犧牲に供せられるものといはねばならぬ。これに反して、個人または集團が充分に自己の能力を發揮する機會が、ある條件によつて剝奪されて

ゐた場合に、生活資料獲得のために國家がこの條件を撤去するに努めたならば、それは普遍的關心に忠實なるがためである。何にしても、普遍的關心が國家の手によつて有效に滿足されてゐない場合には、この關心が社會的潜在心識の深みから浮び上つて、顯はな政治的因素、即ち鬪爭場裡に於て一團の結合を組成する動機となるのである。社會組織がこの點に就て民衆の生存を脅威するならば、全人口が政治的單位となつて時の社會制度及び政府に反抗する。即ち普遍的關心はいつまでも局部的關心に從屬することを肯んじないのである。かういふ狀態の好適な一例は、ブルボン王朝の末期、政府の費用が嵩んで非常に重税を課した時に求められる。今日の勞働爭議も、生理的必要に對して餘りに多くの障碍が積み上げられた結果である。合衆國や英國が尨大なる富力を擁して、却つて社會的暗影を濃厚ならしめたのは、産業的機構が國家の政策と普遍的關心との間に介入して、これを離反せしめたがためである、兩者間の離反が餘りに甚だしくなると、生存の瀬戸際に彷徨してゐる人々の間から政府反對の叫びが揚げられ、延いて産業その他のものを攪亂するに至る。かういふ狀態にあつては、政府は所有者の關心に支配されて、それ以外の人間の關心には一向構はなくなる。換言すれば、この種の政府は眞に國家を代表するものではなくて、國家の假面を冠つて特殊の關心を追求するものといはなければならぬ。鬪爭の片方に取つては、この普遍的關心がそれ自身の追求されるのであるが、他の方に取つては派生的諸關心の追求を通して、間接に滿足させられるに過ぎないのである。鬪爭に際して保守的單位が要求するのは、自己の特權と而して情勢的な政治勢力との維持に外ならない。

血族的關心　國家生活の內部にあつて、一番古い團體的關心は、血統の同一に基づく關心である。なるべく物理的發生を同じくするもの同士が、相集り相愛しようとする傾向である。この關心は氏族といふ結合の組織形式を産み出した。他所のものを見れば必ず敵と思ひ、血を同じくする者だけが世界中で一番優秀な種族だと考へるのは、程度の差違こそあれ、何れの種族にも普遍した傾向である。この精神は元は氏族生活の中で陶冶されたものである。『人は自分の知らない人間に對して一匹の狼となる』といふのは、當時の生活の原則であつた。部族間の戰爭は專ら家族的封土を保有し、または擴大せんとして行はれたものである。この型に屬する關心は、今以て社會生活に相當の勢力を有つてゐるが、昔のそれに比べれば甚だ微弱である。近代國家に於て、この血族的關心に代つて現はれたのは國民的關心である。

國民的關心 國民とは言語上、文化上の共同に基づいて一國家を形成する人々である。國民と國家とが範圍を等しうしてゐる限り、國民的關心は卽ち國家的關心である。ところが國家そのものは、例へば中世のローマ帝國の場合のやうに、幾つかの國民の人爲的な結合から成立することもあれば、嘗て一部分の融和が保たれてゐたものが、今は幾つかの一部分に分裂し、それ故にその中のある者が、統轄者の地位に立つても、他の者は絶えずこれに反抗を續けてゐるといふ場合もある。今日の大英帝國や元の墺太利匈牙利の如きその適例といつてよからう。が、何れにしても、この場合には一つの國家が數個の國民を包括してゐるといへる。そしてその場合には、主動的の國民よりも却つて從屬的な國體の方が、國體意識の遙かに強いことがある。彼等は統一的傾向に對して、執拗な反抗を持續するのである。

國民的關心の手段であり、且つある程度までその原因となつてゐるのは、言語の共通といふことである。習俗の共通文化の共通といふことも同じである。國民的關心が發達するにつれて、本來の部族的乃至は人種自關心もまた國民的關心に化成する。特殊の狹い範圍の習俗と言語を持續しようとする部族的關心が薄れて來て、國民的範圍に共通した言語及び習慣が國家の名によつて採用される。この相對する二つの傾向は、大戰前のアルサス、ロートリンゲン地方に於てよく現はされてゐた。また亞米利加に於ても、比較的初期の移民分子が學校なり社會なりに於て、夫々の母國語を保存するために無役な闘爭を行つたものである。この點に於てラッツエンホーファーは一つの錯誤に陥つてゐるやうである。彼の暗示するところによれば、合衆國は將來に至つて、小英國、小伊太利、小獨逸等に分裂する危險があるといふのである。ところがこれは、歐洲人一流の國家意識に捕へられた觀方で、合衆國の統一的傾向はかうした狹い見解を越えて、その傾向のままに發展されてゐるやうに見受けられる。一度外國との戰爭が開始されたならば、第二の南北戰爭が起つて諸洲の統一が破れるだらうと觀察したのは、一八九八年代に於ける獨逸人や西班牙人であつた。その觀察を土臺として、汎獨主義者のある者は米獨開戰に際して在米獨逸人が擧つて政府に反對するであらうと考へてゐたが、かかる豫想は歐洲大戰の事實によつて裏切られてしまつたのである。米國人は過去に住む代りに、常に現在に住む國民だといはれてゐる。各國民の中で、最も非傳統的な人々の寄合世帶であつたものが、今や新しく米國獨特の國民的傳統によつて支配され始めてゐる。毎年一回づつ、各地の大都會では、守舊的な

祝宴が催され、ユーグノーの子孫や、ピューリタンや、ニュー・イングランド開拓者が參會して昔を偲ぶ習慣がある。然しかうした祝祭の期間内と雖も、彼等の最も重大な關心は相互に反撥するものでなく、全國民を通じて協和することを忘れない。その翌朝、隣人と手を組んで仕事に出掛ける時は、恰も同一種族の後裔であるかの如き親愛を以て、遺傳的差異の意識を一掃してしまふのである。それらの事實の中に、米國民が益々統一的傾向を實現しつゝあることが觀取される。これは歐洲人的な國家意識では理解しがたいものに相違ない。

社會過程といふ織物は、種族または國民の相違によつて、夫々に違つた種類の糸とその編み合はせ方とを有つてゐる。然しかうした相違も、米國の場合の如く各種族の成員が個人として接觸する場合には、遠からず消滅してしまふものであることを知つて置かなければならぬ。我々は社會過程の內部に作用してゐる夫々の要素に向つて、一定の價値を判定しようとするものであるが、この價値または力が、過去現在を通じて一定不變のものであるといふ如き斷定は、絕對にこれを避けなければならない。今日の文明國家の間に介在して、自ら一國家を形成することも出來ねば、國家の一區分としても參加することの出來ぬ種族は、必然に滅亡するの他はない。例へば歐洲に於けるヂプシー人、北米に於けるインデアンがそれである。何故にかかる國家を有たない種族が消滅して行くかといふに、それは何も彼等が種族的習癖を缺いてゐるからばかりではない。根本的にいへば、種族の關心より一層高級なある關心を、自己の生活に引き入れることの出來なかつた結果として、社會的鬪爭の途上に於て次第に力を失つたからである。比較的高級な國民的關心は、その所有者に向つてより高度の組織と、從つてより有力なる鬪爭手段とを提供して、これを所有しない集團をば、鬪爭圏內から蹴落してしまふが故である。

信仰的關心　歷史上の社會過程に對して、最も重大な交涉を持つ關心は、信仰的關心または一定の信條を奉仕せんとする關心である。ラッツェンホーファーによれば、信仰的關心は發生的に云つて、種族的關心の變形物であるといふ斷定が下される。元よりこの信仰的關心が、始めて歷史社會に作用し始めた當時にあつてはこの提言が眞理である。然しこれは飽くまで發生的にいつた場合であつて、時の進行と共にこの關心の內部には他の要素が作用して來て、今ではその方が決定的要素になつてゐるのである。

一見したところでは、宗教的信念の設定となつて現はれるこの關心と、一方政治的關心

との間には何等の共通點もないやうに思はれる。のみならずこの兩者は、社會過程の內部にあつて斷えず反噬し爭鬪して來たのである。然しながら、信仰的關心が斷えず種族的反感を固め、且つ强烈にして來たことが歷史上の事實である以上、種族的鬪爭は同時にこれを宗教的鬪爭として見るのでなければ充分に理解されないし、また宗教的鬪爭は少くともその初期の形に於ては、これを種族的鬪爭の反面として見るのでなければ適確な斷定を下す譯には行かぬのである。具體的な事實としていへば、血統及び居住を共にしてゐる人々は、同時に同じ宗教的信念を抱いてゐたのである。種族の內部に於て、宗教的信念が一定の方式を取つて結晶する時は、それに應じて彼等の政治的關心も一定の方式の中に固定し來たり、引いてはこの種族に强固な政治的體制を賦與するものである。勿論これと反對の場合、つまり政治的體制の出現によつて宗教的信條が固定される場合もある。征服によつて幾つかの種族が混淆する場合には、征服者の信條があまねく被支配者に向つて强制される。次いでこの兩者間の宗教的關心が、相互に如何なる關係に入り込むかといふに、それは一方の信條が完全に他を吸收してしまふところまで進行するか、さもなければ無限に兩者が分化するかである。後者の場合には社會的分派の現象が起る。この分派の現象を單に宗教的觀念の離反と見るのは誤りで、政治的關心の分立に基づいて反映してゐることが少くない。一般には、政治的關心が信條に對する歸依よりも强烈になると、かうした政治的關心に支配されること最も深い人々は、從來の教主に離反し、信條に異說を唱へ出すのである。彼等は異端者となり、これに反して舊來の信念最も熾烈なものは、オーソドキシカルな守舊者となる。

正統派たると異端派たるとを問はず、その間に一定の體制が生れれば、首長たるものはこの新しき組織と團結力を利用して、自己の欲求を充たさうとして來る。殊に異端者の側に於ては、その觀念的な主張の影にかくれて、諸種の世俗的な關心が追求されてゐることを忘れてはならぬ。例へば獨逸の小封主は、自己の政治的財的權力を高めんとして異端派(プロテスタント)を利用した。表面上彼等がこの新運動に對して、あらゆる後援を惜しまなかつたのも、實はかうした世俗的野心のためであつた。佛蘭西に於てもまた然りで、その諸侯がプロテスタントに後援を與へたのは、偏へに巴里の中央權力に對抗する必要からである。これに反してナント勅令の廢止されたのは、これまたかうした反抗的勢力を阻止せんがために他ならなかつた。

營利的關心　國家の主な建設者といへば、それは以上の種族的關心と宗敎的關心である。從つてこの二つの關心は、國家の內部に於ても夫々特有の機構を與へられてゐる。これと違つて普遍的關心は一切の關心の母體である。然るにこの關心が個人に宿つて自らを支持表白せんとする場合には、多くの個人が協働して、自然及び他の人間に當るのでなければ完全な滿足を期し難い。そこでこの普遍的關心は、先づかうした必要の充足手段として特殊の關心を派生した。必然に協働に導く人種的及び信仰的關心はそれである、然しながら種族的、信仰的の關心はまだこの機能を完うするに足らぬ。そこで生れたのが營利的關心である。

營利的關心といふも、必ずしも貨殖の行爲を意味するのではない。何となれば、貨幣とは元々この營利心が著しき分化を遂げたる後、それを追求する手段として生れたに過ぎないからである。從つて營利的關心とは、自己の所有を增加せんとするものだと思つてゐれば間違ひはない。ある場合には、僅かに生をつなぐに足る程度の糧を得れば滿足することもあるだらうし、他の場合には已むことなき貨幣追求の結果、現代の大規模なる資本主義組織を生み出すに至ることもあるだらう。然し何れにしても、所有の增大といふ結果に到達する以上、總ての欲望はこの範疇に入れられるものである。

同一の職業によつて利得を得んとする者は、勢ひ敵對の立場に立つこととなる。その關心が同一の滿足を同時に得ようとするからである。政治的錯綜を伴ふことなき純經濟上の競爭は、何れもそのために現はれるのである。

比較的最近まで、經濟的競爭は主として同一職業の內部に於て個人間に行はれたため、この競爭は総に政治的色彩を帶びることなしに濟んだ。古代の諸結社、中世のギルド等の如きには、時としてこの提言に反する現象も見られなかつたでもないが、ただ古代と近代との兩極端を比較して一般的な傾向を察すれば、かういふことがいへるといふのである。人々は何等相手を意識したいで、只管に同一利害を追求するために爭つた。相互の競爭が激烈となるときは、その場その場で種々の抗爭的態度に出てゐた。かういふやうな抗爭形式は、今のところ一塊の肉片を競ふ犬でもなければ見られない。同じ職を追求しながら鬪爭してゐた人々が、一個の階級群を形成し、素朴な個人的關心を引纏めて集團的關心を備へるやうになるためには、他にある種の政治的異質か、政治的對象かが存在しなければならない。政治的關心は謂はば離反散逸せる人々を前提として、それを溶解する一の試藥の

如きものである。が、もし國民的、信仰的、地方的等の關心の上に差違が生じ、それに刺擊されれば、比較的類似の關心を抱くものは、互に同質の集團を形成し、他の集團に對して特殊の團體的反作用を營むに至るのである。例へば、基督教徒の職人が猶太人の職人に對する關係、また近代の例を求めれば、組合勞働者對非組合勞働者の關係がそれである。そしてかかる反作用を繰り返へしてゐる中に、集團的に自己を主張しようとする特殊の政治的關心が生れてくるのである。

これを別言すれば、個人の單純なる營利心と對照して別に集團的な職業關心が發達するためには、その職業が協働を基調とするやうにならねばならぬ。これは一定の職業の從事者達が、他の國家內に同樣な職業を發見し、これと團體的競爭しなければならぬ時に起る現象で、古代または近代に於ける保護關稅はこの必要に處する制度である。對外の競爭は內輪同志で相爭つてゐた人々の間に階級意識を刺擊し、また危險を共にするといふ意識を起さしめる。彼等の相互間の反對は共通の危難に面して暫らくの間忘れられる。この危難を切り拔けるために、恰も一人の如く努力しなければならぬ。かくして彼等は實業的政治の舞臺に現はれるのである。

その他同一職業に從事するものは、國家の法律に對して、自己に好都合の修正をなさんがために、政治的な團體を形成することがある。または他の職業團體に對して、有利の位置を獲得せんがために團結することもある。中世紀のギルド、近世獨逸に於ける商工業の利害に對抗せんがために組織された農民の團結、各國に於ける資本家對共產黨の鬪爭、これらは何れも職業團體から政治團體へと化成したものである。これらの外に、職業的關心が如何に有力な政治的活動をなすかといふことは、ハンザ同盟または英國の東印度會社等の實例を徵すれば明瞭である。

職業的關心の鬪爭時代　ラッツエンホーファーは職業の種類、即ち職業の中より生れる階級的關心を、上述せる如く八個に分類してゐる。ある國家內に於けるこれらの職業間の均衡は、諸種の事情によつて規定されてゐる。例へば地理學的、風土學的條件の相違や、歷史的傳統、國民の天才、土壤の肥瘠、その他等々が、ある種の職業を他の種の職業に增して發達せしめる。英國に特殊の商業の發達を奪はれたのは、一因はその地理的關係に歸せられる。その他豐富なる鐵及び石炭の產出は、英國民をして近代的大工業の先驅たらしむる機運を多からしめ、特殊商業の發達に至らしめたのである。これに反して瑞西は、その

地理的及び土壤學的條件から、宿屋商賣を最も盛んならしめ、伊太利の如き歴史的に浮沈の激しかつた國民には、見世物師と乞食とを多からしめたのである。

農業と工業とは自然的條件によつて、凡んど決定的な制約を受けてゐる。商業はこの兩者の原因となり結果となつて盛衰がある。卽ち一方に原料品の提供があり、他方に加工品の提供があるため、兩者を交換せんとする努力を喚起すると共に、かかる事由によつて成立した交換の機構は、やがて自己の交換物をなるべく多からしめんとする要求を刺擊し、それがため農業及び工業の生產力增加を奬勵するに至るのである。

農業、工業、商業の三つを主要部門として、その下には種々の職業的區分が存在してゐる。これら雜多の職業は原則として、社會的鬪爭を惹起する要素は餘り含んでゐない。しかし一旦これらの職業間に利得の均分が攪亂されて、階級的反感が生ずるやうになると、社會鬪爭の要素として至大な作用を營むのである。例へば何れの國の歷史に於ても、農業は次第に政治的活動を營むやうになるが、これは取りも直さず商工業が發達して自己の利益が蠶食されるからである。米國に於ける不斷の內紛の原因は、北部諸洲の關稅政策に對して、南部の農業諸州が反對するからである。かの南北戰爭の表面上の鬪爭主題は、奴隷問題といふ謂はば道德的な案件であつたが、その背後には純經濟的なかかる問題が主要な原因をなしてゐたのである。米國の例はそれであるが、總ての他の國家の內部にあつては、先づこれらの職業的關心の間に一定の均衡が存在してゐると見られる。純然たる調和が見られないまでも、相互間の非干涉主義は行はれてゐると見て差支へない。國家の手によつて職業的鬪爭が絕對に禁止され、各人は個人として自由に自己の滿足を追求してゐたといふのが普通である。かかる產業的調和の時代にあつては、職業の分化は無限に行はれる。そして同じ職業に從事する者は、往々にして一個の組織ある團體を作ることもあるが、それは大抵、同業者の交歡か技術の硏究を目的とするもので、相互に鬪爭的態度を採つて對峙することはなかつた。かかる產業的平和及び同一職業內の和合といふ現象は、中世紀に於ける產業的繁榮時代に、最も著しく現はれたところである。

然し產業部門の間には、互ひに鬪爭の要素が潛んでゐるのであつて、何時の間にかこの部門を一の黨派として化成し、決然たる鬪爭の態度に立たしめるものである。とはいふものの、これらの黨派にして社會的鬪爭が適度に制御されてゐる限りは、その組織、構造、また活動に於ても不規則で且つ間歇的で無力である。ところが玆に一旦生活の分岐點とな

るやうな重大問題が起ると、產業的集團は忽ちにして鬪爭團體として强固な結合力を示すやうになる。職人階級が仕事の差違に應じて、排他的な組合を組織したのもかういふ場合であつたし、工場勞働者の組合が次第に組織立てられて來たのも、幾度かかかる危機に當面して、自然にさうなつたのである。農業勞働者、企業家、賃銀勞働者の階級は、かくして能力、財產、生產の方法、地域の共通等によつて區別されることになる。そしてこの種の集團は、單に自己の成員の關心を滿足せしめるばかりでなく、同時に他の產業團體の立場を破壞するといふ目的を以て、猛烈な活動を開始するに至るのである。

經濟界が比較的に好況な間は、これらの集團の關係は單に異れる地方、及び職業間の動反動の作用として終る。然るに、もし生產の過剩とか穀類の不作等によつて、經濟界に深酷な動搖が襲來する時は、一方に地域的集團が意義を失つて消滅し、その反面に職業的集團が政治の舞臺に現はれ、非常な力を以て鬪爭を開始するのである。甚だしい場合になると、武器を手にして政治的權利を獲得するとか、これを固持するとかいふやうになる。蓋し國家の權力を掌中にして、以て自己の關心を滿足させようとするのである。言葉を換へれば、これは產業階級の生活が脅威される結果、階級間の鬪爭が、絕對的敵意　限度にまで灼熱するのだともいへよう。

第七章　鬪爭の發達

戰鬪意志の强度　戰鬪意志を說くに當つて、ある特殊の階級の關心または生活標準に對する脅威と、階級內に於ける個人的生存に對する脅威との區別を、先づ明らかに區別しなければならない。兩者は時とすると、相補足し相影響する關係に立つことが少くないが、社會的作用としては全然別個な意義と力を持つものである。例へば、米穀の輸入が增加しる地代が下落すれば、それがために地主の關心は脅威を蒙るし、封建的苦役また近代的兵役が、小農の傳統的生活標準を低下せしめることになれば、彼等の階級の關心は、甚だ苦しい立場に置かれるのである。最も顯著な例としては、賃銀が勞働階級の生活標準以下に遞下せしめられる結果、勞働階級の關心がひどく脅威されるといふやうな場合がある。これらの場合にあつては、かかる脅威が、延いて生活そのものの危險を暗示することになるか、或は單にある特殊の關心に對する脅威たるに止まり、各個人の普遍的な關心に打擊を

與へないかは、一概に片づけることの出來ない問題である。

地主は必ずしも外國米との競爭によつて、自己の食物を剝奪される譯でもなし、乞食は人の門に立つことを禁止されたからといつて、必ずしも働らいて食を得ることを妨げられた譯でない。ところがこの點に於て、小作農または勞働者の場合になると、甚だしく事情の相違が認められる。小作農を例としていへば、小作料または賃銀が生活標準以下に遞下せしめられれば、直ちに生存そのものに支障を來たすのである。より低い生活標準に甘んじようとしてもその低い標準を支へるだけの手段は發見されない場合が多い。かくてこの階級の生活標準が生存の限界線に近づくにつれて、その階級の職業的關心は、營養の關心と混同され易い。この二つの關心の混同が著しければ著しいほど、階級鬪爭の態度は猛烈となつてくるのである。この原則は百姓一揆や職工の反亂の場合によく實證される。婦人參政權運動の鬪爭態度が甚だお上品で、精々のところ、反對者の名前を招待者の名簿から削るぐらゐの程度であるに比し、百姓一揆の娘子軍が物凄い活動を營むといふ現象は、何も教養の高下からくるのではなく、偏へに如上の原則に由來するからである。

鬪爭の分野　產業上の諸種の階級が、同一國家內で公然と相鬪つてゐるといふ現象は、由來するところの原因が複雜である。循環資本を保護するための公法上の手段（例へば破產法といふが如きもの）、特定の產業部門を保護せんとする設備（例へば關稅法の如きもの）或は固定財產を保護せんとする種々の法律、團結權の不公平な認可等、これらは何れも階級と階級との間に政治的鬪爭を齎す機緣をなしてゐる。然しながらより一般的な場合は、工業家と勞働者との間、勞働者中の材料供給者たる農民と賃銀勞働者の間に行はれる利益爭奪の鬪ひである。この三個の鬪爭單位に對する商業家の關心の位置は、農業の關心と工業の關心との間の勢力平均者となることである。商業は時と場合によつて、この一つの勢力の何れとも結びつく。そして殆んど如何なる場合にも提携することのないのは、勞働の關心だけである。

寄食階級は普通の場合孤立を守つてゐるが、生產階級によつて他の階級に對する便宜として利用される場合が少くない。例へば米國の農業家や會社が、浮浪人の投票を買收せんがため多額の選擧費を支出するといつたやうなものである。その他、ある產業部門が飛び離れて發達したために、政治運動の上に他のあらゆる產業部門を敵にまはして鬪ふといふ場合もある。米國の南部諸州で、牧畜業の關心が事實上政府を支配してゐるのはそれがた

めである。英國に於ても同樣に、纖維工業または製鐵業が、政府の自由貿易的政策を決定することになるのである。

戰鬪能力の大小、產業階級の政治的勢力の强弱は、彼等の所有してゐる力を、どの程度まで政治的に確立し得るかによつて決定される。彼等が實際、どれだけの力を有つてゐるかといふのではなく、その力をどれだけ政治的に活用し得るかといふことである。勿論、この鬪爭能力は、その階級の個人的能力の大小によつて左右されることが少くないが、今この點を問題外として論ずれば、第一に各階級の使用し得る富の能力によつて決せられ、第二にその構成人員間の物理的接觸の多少によつて決せられるのである。

財力を豐富に藏してゐる農業階級、または部門は、比較的に物理的接觸が少ない譯である。彼等は貨幣を通してその接觸を續けてゐる。工業家及び商業家は、精神的交通または交換によつて、全國を綜合包括した一大階級にまで化成する。從つて彼等は社會に於て最も强力な鬪爭的要素となり得るのである。整然たる秩序を保つて活動することも出來るし、全體の力を一點に集中することも出來る。もしこれを譬へていはば、無組織な群衆の前に現はれた、精銳なる聯隊のごときものである。かかる事實は、近代の產業發達史の至る所に散見される。資本及び財產の强味は、これを所有する階級に都合のいいやうに、行政上または立法上の當事者を合法的に引きまはし得るのみならず、そのために物理力を利用して敵を壓迫する便宜も與へられてゐるのである。

これに反して、財產を所有しない產業階級は、最少限の統一をなし得る機會を與へられてゐるに過ぎない。彼等は永い間散漫な活動を續けて來なければならなかつた。彼等は兎もすれば、矛盾した目的を抱いて內輪喧嘩をなし、他の統一ある階級に向つて、有力な打擊を加へることを斷念しなければならなかつた。革命前の露西亞の無產者は、正しくその境地にあつたものである。職工、小作人、小賣商人は、全國民のうちで最も無力な階級であつた。殊に彼等の弱味とするところは廣汎なる面積の所々に離散してゐて、相互に接觸する機會は與へられず、從つて精神的交通を營むことは殆ど不可能な狀態にあつた。ボリシエヰーキ革命が成就せられたのは、ごく一部分の工場勞働者と、智識階級中の不平分子の手に依つたのであつて、一般の無產者は革命成就の曙まで、自分達のために政府が顚覆されようとしてゐるとは、少しも知らずにゐたのである。

然しながら、これらの人達が工場または鑛山の內部で、一緒になつて勞働するやうにな

ると、個人的には如何程の財産も持つてゐないに拘らず、これを補つて餘りある程の物理的接觸の機會を惠まれることになる。不斷に密接な接觸を保ち、共通の運命を頒ち合ふのである。そして同一の經驗と感情とを同時に味ひ、從つて彼等は共に强固な集團意識が發達させられ、且つ一定の方針に向つて政治的戰術を發達させることが出來る。かくの如くして始めて、彼等は商工業階級に優るとも劣ることなき、有力な集團として社會的鬪爭の舞臺に現はれたのである。この條件を缺如する故に、即ち空間的の分離によつて、農業勞働者はこの種の鬪爭力を具備し得ないことになる。部分的の鬪爭には强大であつても、全國的に提携して地主階級に當るといふことは、頗る困難とされるのである。

資本の收奪作用　産業及び政治的鬪爭の過程を說明する上に於て、ラッツェンホーファーの學說に感謝するのは、擬似階級的なるものの分類である。蓄積された勞働はやがて資本となる。然るにこの資本を人格化し、これを社會的相互作用に於ける能動的因素として取り扱ふことは、經濟學上に幾多の混雜を惹き起こさしめる根本原因をなしたが、かかる僞人的考察方法は實際上では多少の妥當性と便宜を有つてゐる。然し玆では何も資本の問題を倫理的に取扱はうといふのではない。ただこれを現代の社會生活に於ける單なる鬪爭過程と見て、その中に作用してゐる能動的要素を析出し、次いでこの要素の運動形式を明らかにしようといふだけである。固より資本は社會的鬪爭の過程に於て、何ら人格的な働きするものではない。しかしそれがために、これを非實在的のものと見るのは、甚だしい誤りである。

資本そのものは何ものも生み出さず、何ものも稼がないのである。この觀察は今日一般の經濟學說とは矛盾するものであるが、資本は恰も自らが生產上の能動的因素であるかのやうな顏をして、政治的鬪爭の分捕品を皆自分のものにしてしまふ。即ち生產物の一部を自分のものだと主張するのである。この主張は、一個の生產勞働者としての資本家に、當然許されてゐるところの分け前の要求とは、全然その性質を異にしてゐる。謂はば資本はこの當然の要求を提供する傍ら、利子、利潤、配當の名に於て、生產物の一部分を誤魔化さうとするのである。換言すれば、二重の要求をなしてゐるのである。即ち一面には人格的な勞働者として生產物の一部分を取得し、他面に於ては非人格的な資本の分として、更に生產物の他の一部を要求してゐるのである。

小資本の拘束性　かかる利子取得と利子支拂の關係が、眞に相互的勞力提供の理に合す

るか否かの穿鑿は別として、ここでは近代の社會過程に於て、次第に重要な位置を占めて來た一つの關心の現はれとして、これを取扱つてみたいと思ふ。

資本の使用者が、資本の所有者に對して、生産物の中より一定の支拂をなすことを要求する。その限りに於て、資本の所有者は一律平等に一つの關心を分享してゐるのであつて、それは單なる貯蓄銀行の預金者たると、數百萬圓の公債所有者たるとの別を問はないのである。メイン地方の一百姓がドコタの農場で、五百弗の抵當を所有してゐると假定した場合、この百姓は特殊の資本家的要求の支持者たる點に於ては、ウォール街の取引人と少しも異るところはない。それのみならず、資本の要求といふものは、その收入が全然利子の形で入つてくる人間よりも、却つて勞働によつて收入の道を講じてゐる者の方が强い。故に社會的鬪爭の複雜性は、資本の現象に照らすことによつて一層判明する。職人なり、小賣商人なり、百姓なり、賃銀勞働なりが、僅少の貯へを得て利子を收得するやうになると、彼はその後デスデモナのやうに二重の義務に惱むやうになる。彼は我ともなく自己の本心とは敵同志の關心に捕へられるのである。賃銀勞働者であるにしても、小賣商人であるにしても、本來が一個の勞働者たることに變りはない。がしかし彼等が、勞働または商賣の上りを貯へて投資する場合になると、その點に於ては一個の資本家である。資本家たる以上は、彼等が勞働者または小賣商人としての要求と、全然相反したところの要求をすることになる。かくの如く矛盾する二つの要求が、同一個人內にあつて均衡してゐるといふ事實は、高利の立法的處罰、銀行割引率の習慣的決定、または賃銀に對する壓迫の遞減等の現象に反映してゐる。

然しながら、資本の所有者がその大小如何に拘らず、集つて一個の鬪爭的單位を形成するといふ事實は、資本利潤の負擔者、例へば國家が從來の利子契約を引き下げようと試る場合等に、最もよく現はれるところである。かかる場合、大小諸種の債權者が恰も一人の如く團結して、最初の契約條件を誤魔化されまいと努力するのである。この資本家的關心の一團結は、國家にその義務を負擔させんがためには、許されたる範圍のあらゆる合法的手段を盡くすのみならず、時によつては革命的手段に訴へることすらも、辭さないことが多いのである。

資本と國家權力 この點に結びつけて、萬人の生活の保護者と見た古代の國家觀と、近代の國家觀との間には雲泥の相違がある。國家の機關が、國家內部に於けるある一つの關

心を保護し、他の關心を抑壓するといふ態度に出でたことは、國家そのものが鼎の輕重を問はれ出した抑もの最初である。政治的不幸のパンドラの箱は、この時に至つて蓋を開けられたのである。この時から以後の國家の歷史は、國家內に於ける一部の關心が政權を把握し、法律を强制する行爲と聯鎖することである。事の善惡、幸不幸、當不當は問はないこととして、國家はその時々に勢力をもつた關心の後に從つて、今日は甲の關心、明日は乙の關心といふ風に轉々し、それに從つて忠勤を拔んじたのである。

この場合は、流石に國家も一片の遁辭を構へ、一般的關心なるものを設定して、以て特殊の關心の偏重を辯護しようとするのである。即ちある特殊の關心を、一般的または公共的な關心と呼び、これに對して他の所謂私人的關心の自己抑制を强ひるに他ならない。この特に選ばれた關心は、次第にその內容を局限して行くものである。近代社會の初期に於てはそれが一般企業家の關心であつたが、この企業家の中に淘汰が行はれ、資本が一部人士の手に集出されるに從つて、國家はこの集中された資本の關心を保護することを以て、施政の根本方針とするやうになつたのである。集中されたところの資本は、大規模の經營を行ふに最も便利であり、從つて小資本その他の關心の上に壓倒的勢力を揮ふからである。

かくてラッツエンホーファーの所謂資本の擬似階級の中から、第二の僞似階級たる大資本が、國家の後援の下に派生される譯である。かかる重大問題に對しても、兎角觀察は大まかな概括的批評に陷り易きものである。即ちこの場合に就ていへば、施政一般と大資本の關心との關係を、一定の公式に當て篏めて理解しようとするのである。しかしどうせこんな簡單な公式が、複雜を極めた社會過程の全面を說明するには不充分である。故に寧ろ我我は、この大資本が他の關心に對して如何なる作用を及ぼすか、そしてその結果、如何にして大資本の特質が分明になつてゐるかといふことを說明するに止めて置きたいと思ふ。

政府の活動は次第に法律を利用して、大資本の立場を擁護するやうになつてくる。鐵道敷設の場合に於ける諸種の優先權の認可がそれである。それは兎に角として、國家はその歷史の始めから商業を振興し、富の蓄積を援助し、大規模の產業を促進することを以て、自己の重大な使命と心得てゐたのであるから、その間、自然と國家權力に對する一定の支持者を必要とするやうになつて來た。資本家の意見を迎へ、以て自己の財源を維持して貰はうといふ意嚮から、その交換條件として政府は一定の資本家に向つて、その獨占權、資源の先取權を認可するといふ習慣を馴致してしまつたのである。かくの如き政府の苦衷は、

各種の勞働部門に課税する場合に、色々の手加減をするのを見ても容易に理解されるところであらう。

大資本の成長　資本を重要視し、また勞働にハンデキヤップを附するといふ現象は、頭腦の勞働に對して、筋肉の勞働よりも餘計た報酬を與へる政府の意嚮と、一面に共通したものを有つてゐる。頭腦の勞働はなくてならぬものであり、而もこの種の勞働をなすためには、比較的有利な條件が準備されねばならない。また普通の筋肉勞働者に最高の能率を發揮させるだけの條件では、頭腦の勞働が支障なく行はれる譯には行かないのである。大資本對勞働の場合にも、幾分これに似た關係が行はれてゐる。資本は個人の意志を統轄するものである。從つてそれは一定の安定性と强制權と、規模の大を備へねばならぬ。しかしこの大資本によつて齎される利益が、果たして國家の强制と國民の大部分の不幸とを償つて餘りあるものであるかどうかは、純然たる倫理上の問題で玆には關係がない。玆に求めようとしてゐるのは、如何にして車輪が廻るかといふ根本問題である。今この國家といふ巨人が大資本の車輪を運轉する結果、如何にして他の諸種の關心の車に狂ひを生ぜしめるかといふことは、容易に知り得るところである。

大資本の影響も、個人の場合には或は發見し難く、限定しがたいかも知れない。それはただ政治的本能によつて、始めて認識し推測し得るのである。資本主義の社會にあつては、誰でも財産の關心が他の如何なる關心よりも、容易にその關心を貫徹し得るものと考へてゐる。誰に聞いて見ても、法律の決定者は資本だと答へる。然し人々は、資本の活動を餘りに過大に買ひ冠り、これが及ぼす他の關心への影響を正解してゐないやうである。事實は、我々が特定の社會問題を取り扱ふ場合に、成程と氣がつくところである。資本その他これに對立する諸關心は、社會過程の分析に際しての、根本的な因素だと見なすことが出來ない。

資本家的關心の主要特徴は何であるか。もし資本家に對して、彼が自己の欲望追求の途上で犯した法律上、道德上の過失を責めるならば、彼は言下にこの忠言を拒絶するであらう。これはつまり、彼が常に國家の支持を受けてゐるといふ意識をもつてをり、自分達の間では總ての名譽と利得とが當然の報酬だといふ考へを抱いてゐるからである。資本家はいつまでも國家の恩寵を失ふまいといふ考へから、政府の施政方針が資本家の助力なくしては、到底立ち行かないやうに監視する。從つて資本家の關心に取つては、國家が常に金

に困つてゐる方が好都合である。この關心が惰勢的になれば、諸種の經營を實際的必要以上に、擴張することを欲するやうになる。人爲的に廣汎なる商賣、ある方面に於ける生產過剩、これは何れもかかる資本家的關心によつて促進されたものである。このやうな人爲的な條件內においては、資本は容易にその投資場を見出だし得る。資本は諸種の產業を獨占し、自己の關心を集約的に追求し、時々起る損失を修收し、その代價として小資本及び諸種の勞働的關心を壓迫するのである。

社會的鬪爭に從事する純個人的な關心は、意識的または豫定的に惡行を働らくものであるが、資本もまたかかる意識的惡行を働らくに躊躇しない。故に資本家が心理的に、例外的な判斷作用を有するものだといふ說には贊し難い。蓋し、自分自身に對して『これは不正なことである。だからそれをやつて見よう』と考へる者は、事實に於てあり得べからざるものと考へていい。大抵は『我のなさんとするところは一部の人が惡と考へる。然し我は一般高い考へを持つてゐる。從つて、我の目から見ればそれは正義である。』といふ風に考へ、自分自身を是正し辯護せんとするものである。これあるがため彼はある種の道德的昂奮を感じ、それによつて彼の利己的な道を步いて行くのである。

資本家の行爲またこの法則の範圍を出でない。從つて近代國家の最も重要な問題は、資本家の利已心をどの程度まで强制拘束すべきかといふ點にある。さればといつて、資本のせいにされてゐる不幸が、悉く空想的なものだといふのではない。卽ちかかる不幸が社會的成長により、個人的要素の上に加へられる重壓として、不可避のものだとなすのではない。貴族は歷史上の各時代に於て、當然の奉公的負擔を回避することに成功した。同じく大資本も、その義務と存在理由を失はうとしてゐるのである。然し今日の文明國家に於ける社會問題の要諦は、所有の不平等といふことよりも、寧ろこの不平等が、幾部分は資本家の責任回避の態度によつて、人々に痛切な感情を植ゑつけてゐることである。何となれば、政府そのものが資本家の責任廻避、また橫暴なる掠奪の道具となつてしまつたことを感じる時に、時代は始めて退引ならぬ不平不安に襲はれるからである。

擬似階級　ラッツエンホーファーは更に手工業對大手工業、農業對大農業の區別を揭げてゐる。しかしこれは、何れも資本對大資本の區別と平行した現象であるから、改めて說明するまでの必要はあるまい。如何なる場合にあつても、小經營の中から次第に大經營が派生され、後者の關心が前者の關心と矛盾して抑壓することに變りはない。而してその大

經營の關心と國家との關係が、ある時は正當なる相互促進の關係に傾き、あるときは相互的惡用に傾くこと、資本の場合に見た現象と變りはないのである。

地位の關心　地位の關心は經濟的階級の關心とは、可成り趣きを異にした關心である。これは政治的に認められた地位の高下により、人々が特殊の關心を抱くことを指してゐる。抑も地位の高下といふのは、營養關心を充たす手段として有利なる地位を獲んとする鬪爭が、數代に亙つて行はれた結果生じたものである。人は經濟上政治上の有利な地位を、自分一代の間だけ固守しようといふのではなく、その子孫が生活資料を獲得する上に窮乏しないやうに、やがては安んじて一定の生活標準に止まることが出來るやうにと念願する。然るに彼は自らの體驗によつて、社會的地位がかうした生活關心を滿たす上で、最も安易な手段であることを心得てゐるから、出來るだけこの地位を自己の子孫に殘さうと努力するのである。一部人士のかくの如き地位の關心を保證するために、國家權力が利用されることといふまでもない。

社會內部に於けるある階級の權利と、認められた要求が大であればあるほど、彼等が基本的な生活關心から遠ざかるのは當然である。これに反して、與へられた權利の量が最も少ない者は、生活の必然的要求に專念してゐる。かくの如き生活態度の相違は、基礎的要求の滿足が保證されてゐるか否かによつて決定される。地位を有する人々は、かかる必要品の供給を確保されてゐるために、他の事物に向つて力を用ふることが出來る。が、これに反して、一般の大衆は內々の勞働に依るの他、その日の糧を得ることが出來ないのであるから、必要品の獲得のみに追はれてゐるのである。大衆に取つては、その日暮しの方法で、維持して行かねばならぬところのものを、地位を有する者はその地位に伴ふ特權によつて難なく得られる。

これによつて地位なるものを、その內部に作用してゐる個人的關心の側から見れば、次の如きものである。即ち發生的には勞働を貯蓄する手段であり、結果から見れば勞働廻避の欲望に對する讓步なのである。もしまたこれを、地位の肯定者として現はれる社會的關心の側から見れば、ある型の社會的才能を保有せんとする制度だともいへる。何にしても、社會的地位は經濟的政治的過程の上にも、それ相當の立場を獲得しようとするものである。これは一面に於て、其の日の糧に追はれてゐる大衆に紛れ込まぬためであり、また一面に於ては、より高き關心を追求するための足場として、それを丈夫ならしめる必要に出でて

ゐる。

階級の構成　如何なる形の國家に於ても、夫々に同質の人々が集つて、幾つかの層を成す傾向を有してゐる。充分にそれが成熟してゐるか、今發達の途中にあるかの差違はあるが、大體的に次の三つの區劃は、如何なる社會にも附隨するものである。第一特權階級、第二中間階級、第三財產も權利も勢力も有しない階級、がそれである。

かくの如きところの區劃は、最初にあつては寧ろ產業的で政治的ではない。これは人々が一定の經濟的地盤を築き上げた後で、この地盤を支持するために同じ立場にある人々が集つて、集團的なつまり政治的な活動をなすからである。彼等は自己の經濟的立場を永續せしめんがために、自己の周圍に制度の柵を結びまはし、嫉妬の眼を輝やかして、隣人の侵入を防禦せんとしてゐるのである。そこに方策が講ぜられ、制度が設けられるのである。

漂泊民が一定の居住に落ちつくとなると、早くもこの封鎖的區劃の徵候が現はれてくる。喧嘩の時にはいつも仲裁者または審判者の役目を勤める男、戰爭または宗敎上の集まりで指揮をする男、といふやうなものである。かくして彼等が特別な尊敬の對象となり、色々な贈物を貰ふやうになると、勢ひかうした役目を自分だけに、または自分の家族だけに、獨占しようと努めるやうになる。その努力はカスト制（封建的地位）を確立せしめるまで進むこともあり、單に官職相續の制度に止まることもあるが、何れの場合にしてもこれに作用してゐる原理は同一である。國家にはかうした特權階級が存在する反面に、技能も持たず、權力も勢力も持たぬ一群の人々を含んでゐる。彼等は最初にあつて技能あり勢力ある人々によつて獲得された立場は、必ずしも技能なく尊敬なき子孫によつて繼承された地位から、除外され閉出されてゐるのである。

先に述べた如く、社會的鬪爭發達の第三または第四の階級にあつては、原始種族の內部に現はれてゐた階級の區別が、一層複雜になつてくるものである。玆に於て原始時代に下層階級に屬してゐた人々も、國家生活を營むやうになつてからは、奴隷に對してはある程度の特權が賦與されてゐるのである。初期の國家が、第一支配階級、第二自由民の階級、第三奴隷の階級といふ風に、大體三重の區劃を示してゐるのはそれがためである。種々の事情により、殊に基督敎の影響により、一種の財產として奴隷を蓄へることが、その後段段と廢止されて行つた。しかし財產、權利、努力等といふものから離されてゐる最下層の一群は、その後永く殘つてゐたことといふまでもない。この下層階級が、曲りなりにも政治

上に獨立せる單位として認められるやうになつたのは、十九世紀に入つて後のことに屬する。

かくの如くして諸階級が次第に調和され、平等化されて行くことは、社會過程の必然的隨伴的な現象である。それと共に反面にあつては、階級形成の傾向は不斷にそして必然に動いてゐる。時として我々は、同質の大衆から成立してゐるやうに思はれる社會を發見することがある。これは目に見える程の構造にまで、未だ發達してゐないのである。どの男を見ても、同じやうな面貌や性質を持つてゐるといふやうなことは、決して絶對にないわけではない。比較的後の時代にあつても、これに近い狀態は往々にして發見される。大抵の場合は特殊の事情により、條件が設けられてゐるのである。例へば、初期の植民時代に於ける亞米利加の諸州、一七八九年から一七九三年に至る間の佛蘭西共和國の市民、一八四九年時代に於けるカリフオルニア開拓者の社會等は、何れもそれである。しかしかかる狀態にあつてさへも、その中からある程度の機會の分化と、從つてまた未熟な階級的區劃を觀取することが出來る。

制度及び風習の起原　總ての社會は健全である限り、明白か曖昧かの程度の差違こそあ

るが、必ず地位の分化を生み出す傾向を有つてゐる。それと同時に下層階級の成員は、上層階級の特權を攻擊の對像として、激烈な鬪爭を開始するものである。特權階級の關心はそれに應じて、下層階級の成員を成る可く拘束せねばならなくなる。即ちその目的のために發明されたのが諸種の制度である。ギリシア古代ローマを始め、その他の各地各樣の貴族制といひ、封建制といひ、宗教上の階級制度といひ、何れも右の例に該るものである。

かくの如き法律上に規定された嚴格な區分の他に、特權者は特殊の扮裝、特種の動作を採るやうになる。これは豚から羊を區別させようとするために外ならない。この種の優勝の表象となるものは、一定の社交儀禮、衣裳、娯樂、趣味等の如きものである。

ラッツエンホーファーのいふところに從へば、かう云ふやうな特定の風習といふものは、美的感性によつて決せられるのではなく、極めて政治的な氣持ちになつて決せられるさうである。高尚な風習といふやうなものは、要するに他の者が自分達の領域に紛れ込んだり、自分達の特權を侵害したりすることを困難ならしめるために、特權階級が作つた防禦的手段に他ならない。

中間階級は強い結合紐帶を有しない。これは彼等が上層階級に入り込む機會が與へられ

てゐるため、彼等がその機會を窺ふことばかり考へてゐるからである。謂はばこの階級は獨自な階級意識がなく、總て自己階級の裏切者によつて構成されてゐるのである。下層階級は普通の場合、階級としての獨立性を自分で否定してゐるやうに見える。然し彼等は、中間階級または上層階級と競爭せねばならぬやうな機會に遭遇し、現にまた常に競爭を續けてゐるのである。ただ彼等は常にその競爭に敗けてばかりゐるので、階級的獨立性が意識されないでゐるに過ぎない。故にもし壓迫がもつと激しくなり、また壓迫者の方に隙が出來てくると、下層階級の內部的な力が勃然として溢れ出し、遂に暴力的な形を取つて時の必要に順應するのである。

黨派の關心　最後に殘されたのが黨派の關心である。しかし玆で黨派といふことは必ずしも世俗的な用法によつて政黨を意味させるのではない。もつと廣義に解して、近代生活で殊の外に顯著となつて來た結社形式を、總稱してかく呼ぶのである。更に說明すれば、目的結合、または目的の共同による人爲的結合である。同一または類似の目的を追求してゐる人々か、お互ひにさうした類似點を感づく時は、自分達を特殊な一團と認めるか、または組織に結合を固くしようと計るものである。各人はこの特定の關心を表現して、互ひに、それに注意を惹かうとする。解り易い例として、犯罪者階級のものがどんな態度を取るものであるか考へて見る。犯罪行爲そのものは最も非社會的なもので、成るべく小さい集團をなしてゐた方が犯行には都合がいい。ところが彼等は知れる限りの犯罪者に對して同類の感じを抱き、出來る限り親密な接觸を續けて行かうとする。その上に法律を守つてゐる人間に對して、敵意または輕蔑の情を抱いてゐるのである。犯罪者に於てかくの如くであるから、萬般の階級と職業の人士が、特殊な一團を形成すること勿論である。

國家觀の根本命題　以上の關心分類は極く一般的なものであるから、實際の社會問題を解釋する上には、或は緣遠いところがあるかも知れない。依つて個々の社會的狀態を說明するには、この分類から更に特殊な事情を參酌して、再分類しなければならない。例へば最近の教育改革の問題や、憲政運動の發達や、露西亞に於ける政治上經濟上の改革やを、個々に亘つて說明しようとする。それには、かかる運動を惹き起すに至つた根本動機が、以上說明した諸關心のうちのどれとどれが作用してゐるかを見ねばならぬ。直接の決定的原因は、もつと特殊的なものであるから。いつでも基本的の關心のみを以て說明することは、單に空漠な說明に終るばかりでなく、全面的な觀察をなし得ないのである。しかし何

れにもせよ、かかる分化した關心なるものと雖も、總て前掲の基本的關心がある時は闘爭し、ある時は調和して行く間に、自然的に派生されたものであるから、歸するところ、如上の八關心を使ひ分けることにより、あらゆる國家生活の現象が說明し盡されるのである。

譬へていへば、前に掲出した八關心は、國家內の團體または個人間に行はれてゐるところの、あらゆる政治的現象を總括する索引にも似たものである。社會學を基礎として國家生活を觀察せんとすれば、かくの如く先づ基本的關心を、より具體的に再分類することから出發しなければならない。そしてこれらの關心が一々の國家生活に就て如何なる組合はせを示し、また如何なる程度に實現されてゐるかを測定するところに至つて、漸やく終りを遂げるのである。

第三編　應用

——政治の本質及び目的——

第一章　新しき政治

僞似政治學　ラッツェンホーファーは『政治の本質及び目的』を說くに當つて、上來紹介したるが如き特異な政治理論を開陳し、然るのち昂然たる意氣を以て政治の本質は要するに彼の敍述より一歩も出でないと喝破してゐる。

『特異な政治事實の判斷の上では、上來如實に描出せるものと雖も、或は過誤なきを保證し難い。しかし判斷の材料たる史實及び社會的諸條件は、解剖學者の前に橫たへられた屍體と違つて、一目瞭然の正確さを期し得るものでない。而もその史實の檢討たるや、直接の實驗を不可能とされてゐるので、誤謬の可能は一層大なものとされる。與へられた材料が、かくの如く不完全であるにも拘らず、余の使用したる指導槪念そのものは、正確なる社會學的法則であり、從つて政治的公理である。政治現象の本來の姿を敍述するに際して、一再ならず道德上の論理を瞥見したのである。從つて余のかうした態度そのもの、及びこれに附隨した余の結論が、讀者に或種の不快を與へたらうことを知つてゐる。しかし元々政治學なるものは、人類の精神病理學なるを以て、科學的探求の範圍に於ては不快に導き易い。科學の範圍は人をして快活ならしめるより、寧ろ暗澹たらしむるものである。政治の本質そのものが、かくの如く澁面的なものであり、且つ政治を講ずることが實際的の政治野心を有するに非ざるかを疑念せしめるといふ二理由により、一般の社會學者はそのメスを忌憚なく政治的事實に向けることを憚つてゐた。この政治に對する怯懦と羞恥は、政治現象の本質に對する忌憚なき批評の困難と相俟つて、政治學をして一種の僞似科學の狀態に止まるの已むをなからしめた。政治學は倫理的內容を有ち、政治學說が倫理的考慮の上に建設されねばならぬと誇稱することが、已むなくして僞似科學の領域に押し込めたものである。政治上の人間的または社會的動機が、虛構に虛構を重ねた揚句、政治的性質に闘する探求に、感覺能力上の中毒を惹き起さしめたのである。それといふのは、偏へに實際政治の意嚮に就て責められることを懼れ、政治的事實をいい加減に看過したことに由來する。而してこの事實そのものが、上來說き來つた政治現象の性質を裏書きしてゐる。政治の本質を闡明せんとするに當つて、政治の目的に闘するあるアプリオリから出發するのは、正しく物理的世界の眞理を理解せんとして、人類の運命に闘する理想主義的槪念に基

着すると同じで、甚だしい愚かしさといふの外はない。

故に余は前述の分析に立脚して、次の如き断言を敢てする。我々は今や政治の本體を捕捉し得た。それは畢竟するところ、人類社會に於ける自然的エネルギーの現はれで、社會的强制の所産に過ぎぬものである。何人でもこの社會學説の諸結論を、眞面目に考へて見さへすれば、從來の政治學的論究に附着してゐたところの、厭ふべき臭味から脱剣することが出來る筈である。一個の人間をその環境の所産として理解するときは、彼または彼の仲間が抱持する關心の道德的價値の問題は、大抵他愛のないものとなり、人の政治的活動の様式は、本來政治的必然の事象にすぎないことに氣がつくであらう。我々が政治の本質を理解し、その上に公平な政治學説を展開しようとするならば、その前に先づ社會學を充分に咀嚼して置かねばならぬ。もしこの種の理解がないならば、自己の政治的感覺を洗練し得ないばかりでなく、政治の研究をなすといひつつ實は政治の實行に入つてゐるのであるから、自己の探求題目を充分に究めることが出來ないのは、最初から分明されてゐる問題である。

道德と政治『政治的衝動の最も强烈に作用してゐる人物は、却つて政治學説の本質を理解する上で最も困難を感ずるものである。政治的な仕事に從事してゐる人間に向つて説教しやうとするならば、決して政治の本質に觸れてはならぬ。政治の本體に對する最大の眩惑を以て、政治の中にないものを有るが如く喋々しなければならぬ。愛と親睦とは心理的現象であるから、それが一定の政治的局面の上に作用するためには、個人の意志が單にそれを希望しただけでは不足である。愛と親睦とに現實の力を與へるものがあるとすれば、それは時の事情のみである。故に問題となるのは、かかる望ましき精神狀態の有無ではなく、實際政治家にかかる精神的表白を可能ならしむる方法如何といふことである。政治上の惡德は、教誨によつて避け得られる人間的過誤ではなく、それは精神的又は本能的强迫に基づくものである。政治と論理とを單純に一致せしめることは出來ぬ。倫理的動機そのものが實は政治的發達の一所産に過ぎず、道德の命令權は自由意志から派生したものでなく、論理的動機が必要で、それが無くてはやつて行けぬと感じる一個の社會意志に胎胚してゐる。政治的オルガニゼーションの一部に過ぎないのである。故に現在余の政治現象の叙述の中で不足してゐるかに思はれる部分、——人間的現象の一面として政治的動機と相對立する倫理的動機——それは畢竟政治發達の條件として、我々の生活の中に表れたもの

である。だからそれは道德的の機構ではあるが、政治的の手段として現れるのが普通である。倫理的動機が政治的衝動を沈默させることもあらう。然し一度鬪爭支配が始まると、倫理的動機は精々のところ、政治的概念にケチを付けることが出來るだけに過ぎぬ。そしてその結果、政治運動も倫理的目的も二つながら、所期の成功を收めることが出來ぬことになるのが落ちである。

故に自己の本質に逆つて、人類の倫理的傾向云々を出發點にして政治學を建設しようとする學說は、自然法の眞理を蹂躙するのみならず、倫理的理想そのものを最屓の引き倒しにするものである。我々がもし自己の周圍に行はれる政治生活に注目するならば、人の倫理的技巧が政治的目的のため、個人の利己主義的傾向を基礎として行使せらるる有樣を窺ひ知られるであらう。どんな種類の政治的目的でもいい。それを尤もらしく見せるためには、夫々適當な景氣のいい人の喜ぶやうな、倫理學上の基礎原理が必要でそれは又容易に見つかるものである。政治的鬪爭の過程にあつて、特に野獸的な厭惡すべき行爲が必要とされる場合には、ある高尙な目的によつて、それに金箔をつけることは容易の業である。だがこの金箔によつて、行爲の野蠻性がなくなるものと思つたら誤りで、却つて倫理意識に向つて恥辱の上塗りをするに過ぎない。

政治の實用性『人間の倫理的發達は何より最初は、倫理的概念と政治的概念とを全然別個なものとして取扱はうと要求する。道德は我々の現實の鬪爭の比較的高尙な目標に他ならない。然るに政治とは如何なる場合にも、我々の目的に對する一個の手段である。故に政治はその本性からいつて、當然、目的に對する效用の如何によつて判斷さるべきで、この目的概念そのものの倫理的性質の如きは、初めからこれを無視するのが普通である。道德それ自身は政治に向つて、何ら役目を果たすことは出來ぬ。出來てもそれを潔よしとせぬものであらう。

政治に至つては然らず、一切の鬪心に向つて奉仕を辭するものでない。時には我々の倫理的鬪心に向つてすら、分相應の役に立つてゐる。但しそれはこの倫理的鬪心そのものが、また一種の戰鬪的鬪心であることを理解して、初めて政治、倫理の兩力を驅使することが出來るので、平和もしくは調和が倫理生活の歸着點たるのみならず、その出發點だと心得てゐるが如き者に至つては、倫理的目的を追求して政治的手段に訴ふることは、醜を蔽はんとしてフンドを塗る類の愚であらう。

二種の倫理學『政治的鬪爭の發達は、個人に對する社會の强制力の增大したことを示してゐる。かくして政治學の研究は、我々に全は特殊に勝つものだといふ感銘を與へる。然るに、德律そのものが、我々の社會的强制を基礎とするものであるから、社會的强制の作用の增大を示摘する政治的理解は、それ自身に道德的反省と倫理的原理とを伴ふものである。個人の主觀的狀態からのみ引き出される倫理學――例へばショーペンハウエルの同情を基礎にした心理學の如きものは、屋上屋を架する餘計な業で、却つて我々の存在の本質的部分を見逃してゐる。我々の存在の社會的方面に眼を轉ずるときに、始めて一切の道德的理想は、明確適截な姿を以て我々に迫り來るのである。

カントの倫理學概念の如きものですら、その最終の根據は社會學的意識である。即ち彼の實踐理性の根據なものは、『汝の意志の法則 一般的法則と合致しやすき樣に行動せよ』といふのである。同時にこれは移して、一切の實行的倫理の基準としなければならぬ。かくして社會學その中でも、政治生活の考察は我々を導いて我々の個性の他の側面に思ひ至らしめた。それは現在の科學的發達に先立つて、我々の活動の最高目的だと考へられてゐた道德的意識なのである。玆に於て余のいはんとするところは、要するに次の如きことである。カントは彼の所謂實踐理性の基準なるものを設定するに當つて、純粹理性のみに賴つては不足を感じた。實踐理性の基準の妥當性は、社會學の領野に充滿してゐる諸種の關係を檢討した後、始めて立證される譯である。換言すれば、道德的妥當性の根據、これを我々人類の社會的性質の中に見出さなければならぬのである。

人性觀上の一元論『從來の學說では人性に關して、二元論が行はれてゐた。躍起になつて蔽ひかくさう、抹殺しようとされてゐた政治的もしくは野蠻的な部面と、それに對照して出來るだけ囃し立てようとされてゐた倫理的部面とがそれである。ところが、最近社會學の發達に伴ひ、かうした二原論が姿をかくし、それに代つて人性觀上の一元論が勢を得て來た。即ち過去の二元論は認識の不足から來たもので、倫理意識も實は我々の政治的個性の進化の道程に伴つた一つの現象に過ぎないといふことである。

個人的事象としての道德律――換言すれば個人的見地から組立てられ、非社會學的た思索の中から成長した道德律は、常に個人主義的な政治思想と平行してゐたものである。この個人主義的な概念の下では、倫理上の原理を政治生活の中に融和させよう、綜合しよう、表現しようとしても、それは畢竟無駄なことである。社會的倫理はこれに反して、一個の

間然するところなき社會的政策である。根本的な倫理法則は、一切事物の相互依存によつてのみ、またその中にのみ個人の完成が見出されるといふことである。さればこの見地よりするときは、我々の前途には政治的活動、及びそれが科學の手に委ねられた、素晴らしく重大な仕事が横へられてゐる。その仕事を遂行する爲めには、先づ、政治の本質を理解し、政治と倫理との對立の意義を呑み込んで置く必要がある。

世間の人達は遠からずこの種の必要に氣がつくであらう。余自身そのことを論じてゐるといふ事實そのものが、世間一般にかかる考察を要求してゐることを證據立てるものである。我々の思考は事實それに都合のよい政治的條件の下にのみ起り得るのである。』

以上は政治學者としてのラッツエンホーファーの抱負である。現實社會の問題に對する發言權が、政治學より奪はれてより久しい間である。これは政治學そのものの缺陷から來たのではなく、政治と現代の社會問題との間に交渉がないからでもない。ただ從來の政治學が政治的主權者の恩寵に狃れて、倫理學的觀念の世界に閉籠り、現實社會の鬪爭に面を背けてゐたからである。ラッツエンホーファーはこれを指摘し、その固陋を以て救はれざるものとなした。然らば彼が新しき政治學によつて與へたるものは何であるか。それは果して我々の現實的關心に向つて、何らかの刺戟と滿足とを與へるものがあるか、經濟學や倫理學に對抗して奪はれたる發言權を奪還することが出來るかどうか。その點は暫らく別として、先づ彼の政治學そのものの輪廓の如何なるものであるかを闡明しなければならない。

第二章　政治の本質（一）

視野の擴大　國家の一員たる個人は、その抱持する諸種の關心に動かされて、國家の內部に更に各種の集團を形成する。この集團たるや、その目的、大きさ、認識等に於て、一つ一つ違つてゐるけれども、それが普通の目的を追求するために、反對または邪魔になる他の關心の集團に向つて、防禦もしくは抗爭の態度を採る點が何れも同じである。ラッツエンホーファーはかかる特性をもつてゐる限りに於て、この種の集團を廣義の政黨と名づけ、集團と集團との接觸を政黨關係または政治現象と命名してゐる。彼に於ては『政黨』の一語は嘗に議會政治に於ける議員の組合を指すのみならず、國家內に於ける關心の競爭上

の一要素たる限り、總ての結合を指すもので、大は職業上の結合や、漠然たる財産上社會上の階級より、小は陰謀家の祕密結社、社交的倶樂部、學究上の結合に至るまで、總てこの範疇に屬するのである。これはラッツエンホーファーの政治學の基礎概念であるが、この點確かに從來の政治學に對して一段の進歩を示してゐる。何となれば、從來の政治學がその對象を單に國家及び狹義の政黨にのみ局限したことは、何ら合理的な理由があるのではなく、寧ろ政治學が現實的な感興を喪失した重要な原因となつてゐたからである。關心の追求のための結合たる限り、總ての團體を視野の中に置くことによつて、政治學は學的な妥當性を得ると共に、一般社會問題との新しい交渉を見出すであらう。ラッツエンホーファーはかうした諸種の政黨の間の差違を云爲する場合としては、主として國家の主要關心に對する調和不調和の程度を、問題にしてゐるぐらゐに過ぎない。

政黨の構成　いま物理的な言葉で說明するならば、政黨員は一種の原子である。原素に原子引力があるやうに、黨人と黨人とは關心の親和力によつて惹かれる。この關心の親和力によつて一個の集團が形成されると、それは政黨で物理的世界の分子に相當する。然し、親和力の反面には、常に反撥力が働いてゐる。個人は團體の內部にあつて、常に自己の個性を主張しようとするものである。宗敎界の歷史は、總てこの一般的原理を示してゐるのであつて、既成宗敎の內部には、常に分派の傾向が流れてゐるのである。それが表面にあらはれて、事實上新しい宗派を生み出したものだけでも、隨分の數に上つてゐるが、その他にインポテントのまま抑へつけられたものに至つては、凡んど僧房堂宇の數と共に、多いといつて差支へなからう。信仰上の關心は最も變異を伴ひ易く、之に反して衣食の關心は最も分化し難いものである。その間に介在してゐる諸種の關心は、その可變性の程度に應じて夫々社會集團の變數となつてゐる。

故に社會的な分子組織の上には不斷の變化が行はれてゐる。そこには慌しい關心の氣まぐれと、個人の出入とが著しい。ある政黨の內部で、初めはあまり重要視されなかつた關心が、後に重要視されるやうなことになれば、從來の社會的紐帶は最早や用をなさなくなる。そこで化學者の所謂分解作用なるものが起るのである。ヤコビン黨が後に分裂して赤進黨及び王黨とが生れたのはその實例である。而も一つの政黨に、この種の變化が起れば、それが同時代の總ての政黨の上に影響を及ぼして、新しい政治的局面を展開させるのである。

黨派的親和力　一方にさうした分散的な力が働いてゐる反面には、內部へ內部へと黨員の活動を集結して行く力が作用してゐること前述の通りである。寧ろこの方が基礎的であるといつてよからう。人間の集團に一定の型を與へるのはこの力の故なのだ。ところでこれをいま、一つの帶にたとへて、社會的紐帶と呼ぶ。社會的紐帶は、太陽系を形づくる宇宙引力や有機體を形造る細胞引力と違つて心理的のものである。それは關心となつて表れる。で、いま一つの政黨をとつてその結合を支持して行く心理的紐帶をしらべて見ると普通二重の作用を營んでゐるやうで、第一は消極的、卽ち集團內部の個人がお互ひに對する要求を有つてゐる。見方を變へれば、成員各自が他人の關心と矛盾するやうな關心を有つことを差控へる。第二は積極的卽ち總ての成員が或共同目的を抱きそれを追求するためにお互ひの援助を藉りやうと欲するのである。これをばラッツエンホーファーは團體的襲擊の凝集力と呼んでゐる。然し乍ら、さてかうした目的の共同は兎角壞れ易い、乃至あつても見失はれ易いもので、それを支持して行くためには、一定の政治的原理又は政治的體制を必要とする。ラッツエンホーファーの場合、この政治原理乃至政治的色彩は進步的、退步的、急進的、穩和的の四つに分けられ、次に政治的體制は自治的、集權的、聯合的の三つに分けられる。目的乃至關心の共同は、一定の政治原理及び政治體制に反映し、遂に後者が一の外部的表象となつて、目的の共同を維持して行くのである。だから、ある政黨の首領にとつては新しく提唱される要求、つまり關心が果して進步的なりや、退步的なりや、又は急進的なりや保守的なりやを判斷して、それを黨の傳統的原理と一致せしむることが肝要であり、事實これが爲めには大抵の首領が特殊の敏感さを有つてゐるやうである。かうした選擇が行はれる限り、黨派の政治的色彩は、直接にその抱持する關心によつて決定されるのであるから、一目瞭然たるものがある。だがこれは原則上の話しで、我々が或黨派の一々の行動に目を注ぐときは、これとその黨の掲ぐる政治原理との間に、何れだけの交涉關聯ありやと疑ひたくなる。この場合、黨員現實の關心が外部的傳統的な規定の外に、はみ出したものと云はなければならない。かうして現實的關心と、傳統的規定との間の開きが一定の限度に達すると、黨の分裂が行はれるか、乃至は全體的にその政治原理を塗り變へるかしなければならない。この意味で總ての政黨は、必然に分裂と看板の塗變への危險に曝されてゐると云はなければならぬ。その例を擧ぐれば、政界の往來比々皆然らざるなしと云ふことが出來る。商工資本黨として、急進を看板にしてゐた憲政會が、事實

金融資本閥の關心に引づられて、最近必ずしも急進でなくなり、地主黨として保守の立場にあつた政友會が、最急進的な政友會として脫化したるが如きは最も新しい例であらう。我國の勞働黨を以て任ずる總同盟が、或は左傾し、或は右傾し斷えず看板の塗變へをしてゐるのは、傳統的政治原理に對する反撥といふよりも、寧ろ目下その傳統の形成期にあるものと見てよからう。

政黨が自分の根本的政治原理に對して、全然反對矛盾する政策をとることは、往々にしてあることだが、十九世紀に於て英國保守黨が自由主義的な立法を事として居つた如きその適例である。

政黨の戰鬪能力　或政黨の戰鬪力は、それの內部に於ける關心の狀態と一般政局との關係によつて決定される。だからこの二つの事情を知ることが出來るならば、大抵それから政黨の戰鬪力の强弱が計られるわけである。けれ共、これ丈けの要素で或政治運動に於ける或政黨の成功乃至失敗を速斷して仕舞ふといふことは早計である。戰鬪能力、換言すれば社會反作用をなす實際の力は、集團の成員乃至一般贊成者の數、戰力、論理上の强味、それだけで決定されるのではなく、興奮乃至勇氣といつたやうな形で、その時々の驅引に發揮される、漠然たる力によつても左右されることが多い。畢竟戰鬪能力とは、襲擊または防禦に發揮さるる力の極限で、戰力とか論理上の强味とか云ふものは、成員の戰鬪力をその極限まで發揮せる刺擊となり條件となるに過ぎないと思はれる。この力は或時は武裝を有つた群衆となつて表れる。或時は辯護人に代表される法廷的主張となつてあらはれ、議會に於ける少數黨のカスチングボートとなつてあらはれ、宮廷に於ける劇的技巧、暗殺者の爆彈、選擧運動員の叩頭となつて表れる

政黨の核心　政黨の綱領はそれが實際政策を表示するものであるかぎり、黨の戰鬪能力の上に至大の關係を有つてゐる。第一それは漠然たる地方的集團を政黨母體に吸收し、政黨の物理的範圍を擴大する。第二にそれは黨員のエネルギーに一定の方向と秩序とを與へ、戰鬪能力の心理的基礎を增大する。總ての政治團體は戰鬪能力の胚種を有つてゐる。幹部又は中堅組と稱せられるのがそれであつて、黨派的關心を體現し、その爲めにはあらゆる努力を惜しまない人達から成つてゐる。一言にして盡せば黨以外に立場のない人達である。外部には一般の贊成者乃至後援者がとりまいてゐる。外部に行くに從つて黨に對する傾倒の熱意は次第に弱く、一般民衆の無關心の中に消え去つてゐる。中心には殉教者の

冠を以て象徴さるべき熱意が存するが、その外部には娼婦の一喜一憂よりも頼りない熱情しか見出されない。されば或政治運動に於て期待し得らるべき熱情傾倒の總量を、正確に打算することは、最も困難で而も重要の業である。

急進派と過激派　前述の黨派的胚種、つまり黨と死生を共にし黨の利害を追求するためには手段の善惡を擇まざらんとする過激派（Desperate）を、世の所謂急進派と混同してはならない。この二種の態度は勿論併せ用ひられるのが普通であるけれ共、急進派必ずしも過激派たるものでない。前者は自己の信念に對する情熱を缺き、仲間に對する共苦共樂の氣持ちを缺いてゐる。從つて彼らはその急進的政綱を論理的極限にまで追求するといふことなく、綺語と韜晦の政治家たるに墮し易い。この對照は獨逸の社會勞働黨對リープクネヒトのスパルタカス團、佛國革命ヂロント黨對ヤゴビン黨、愛蘭の自治派對 Clan-na-gael、露國のメンシエヰーキ對ボリシエヰーキの場合によく表れてゐる。英國の政治家には過激派たる素質が缺げてゐるやうだ。分裂後の政友會は一種のデスペラートたる徴候を表して來たやうだが、憲政會は徹頭徹尾ラデカリストである。但し國內政治に於て過激派の素質を有ち合せざるものも、對外折衝に於ては過激派となること容易である。我々はこの現象を英國の政治家一般、乃至佛國のポアンカレー系政治家に於て見る。

政爭の基礎　前述の如く黨派的感情は不斷に冷却の危險に瀕し、黨員の出入頻繁に行はれ、一般政界の動搖豫測すべからざるものがあるに拘らず、總ての政黨は驚くべき固定性、堅實性を保持してゐる。それは黨員の中心的關心が、常に不滿の狀態に殘されてあるからである。換言すれば、政黨とは一定の欲求の體化せるものである。だからこの欲求が不滿の狀態にある限り、又はこの必要を充す手段が他の團體によつて攻撃を受けてゐる限り、熱烈に政黨の存在が要求されるわけである。この意味で總ての政黨は、必ず反對黨を有し、反對黨の消滅と共にそれ自身も解體するのが常である。例へば中世時代の伊太利に於けるゲルフ、ギベリン兩黨の對峙がそれである。前者はローマ法王の支配權が脅威せらるることによつて存立の理由を見出し、後者は俗界國家の建設が障碍される限りに於て存在した。近代伊太利の統一運動が確定的なものとなつた曉に於ては、急に前者が消滅したのみならず、後者も同じ解體の運命を追つて行つたのである。政黨對政黨の關係はその外延を占めてゐる一般黨員の無關心的態度によつて摩擦を緩和されてゐるが、それを取除いて直ちに胚種と胚種とを對照さして考へれば、ラッツエンホーファーの所謂絕對的敵意の關係に相

當するものである。即ち兩者の闘心は、絶對に緩和することの出來る最後の一線を藏してゐて、この絶對的對極たるや、時に和解的外皮を破つて蟬脫するのである。かくて一部少數者の鬼面と殺氣とが、追隨者の氣まぐれを支配して仕舞つた時に於て、世の所謂政局の白熱期なるものが表れる。かかる際に於ては、たとひ表面的な妥協が行はるるとも、それは一場のタクチックに過ぎない。敵意そのものよりも更に重大なある闘心が脅かれた結果、それを追求するために一時敵對的活動を中止するに過ぎない。普通國內の政爭に於ては、第三の監視者乃至裁斷者を意識するが故に、この監視者の反感を懼れて鬪爭の當事者はある程度まで自己の野獸的敵意を制限する。世の所謂政局の安定なものは、社會一般に對する政黨者流の氣兼ねをあらはすものである。この必然の惡なくんば、彼らは自己の戰鬪本能を滿足させるために、對手の血をすらねば已まぬであらう。かるが故に、自己の內容的欲望(例へば金錢の欲望)と形式的欲望(例へば優勝の欲望)とを區別して、これを適度に使ひわけるものは、聰明なる政黨首領と稱せられるのである。

政黨の異同　名辭の同一乃至綱領の類似から推想して、異れる國の政黨が直ちに同一の性質を有するものであると演斷するのは間違ひである。名目のあてにならぬことは、この場合に限つたことではない。模倣の作用は先づシンボリツクな觀念の上に始まるが、それは必ずしも實質上の模倣を伴はないからである。例へば米國のデモクラツトは、獨逸のソーシヤル・デモクラツトとは全然別の內容を有する。英蘭のリベラリストは露西亞の同名政黨と、官學的平凡主義の以外には何らの共通點も所有してゐない。同一のことは各國の保守黨に就ても、分權主義者に就ても云ひ得られる。最近の著しき實例は、各國に於けるフエビアン協會の簇生である。名は實に伴ふと考へる律義者があつたなら、我國某々氏等の所謂フエビアニズム運動なるものに對して擯斥せずにはゐられぬであらう。宗教上の團體に就てもまた同一のことを云はれる。

公開的結社及び祕密結社　立憲制度の完全に取入れられた國では、祕密結社は犯罪者の集團以外に存立し得ぬ筈である。何となれば、かかる社會では政治力の根源が總て公衆の合理的認可といふ點にあるべき筈だからである。暴力を以て直接對手に働き掛ける運動方法は許されない。ただ輿論に訴へ、輿論の認可を受くることによつてのみ、集團的闘心の滿足が許されるのである。然しかくの如き立憲制度の理想は、如何なる國に於ても實現されてゐない。自ら輿論を以て誇稱するもの、必ずしも全社會の輿論に非ざることが、所謂

無視されたる集團の覺醒によつて知られて來た。新聞と云ひ、議會と云ひ何れも部分社會の關心を代表するに過ぎぬ。輿論の代りに局部人の意見を宣傳するに過ぎぬ、もし新聞や議會によつて代表される集團に訴へて自己の關心を追求せんとするならば、これ敵と戰ふ前に先づ敵の軍門に降らんとするものである。かくて一般に輿論、及び公開性の權威に對する幻滅が行はれて來たやうである。さらでだに人間には祕密の本能がある。人間の本能的悦樂は、閨房の暗黑によつてのみその味をこまやかにされる。一婦一夫の愛着和合は、全人類のあづかり知らざる所のものを、只兩者だけ所有し體驗する所より發生する。宗敎の狂熱は祕密の感情であり、法律的體制すらも一種の祕密の感情に育まれることが多い。祕密を以て純個人的非社會的の觀念なりと考へるものあるが、唯一人だけの胸で永久に葬り去られた祕密といふものは未だ嘗てない。祕密は必ずその分享者を要求し、分享の間に著しき協同愛着の感情をかもさせる。然しそこの祕密が政治的信條に關するものであり、一定の集團乃至制度に對する進擊を意味するものである場合は、その分享者に課せられる義務と犧牲の程度は殆んど絕對的のものとなる。社會の立憲制度なるものが、一種の擬態としてその背後に暗き陰影を引く限りに於て、祕密の感情は必ず一種の政治的要素として、作用するに至るのである。かくて立憲的公開政黨と相竝んで、これに盾つく祕密結社の存在するのは已むを得ぬ現象である。現代露西亞のボリシエキーキは、初め祕密結社の形で成長したものである。米國の如き公開政治の國に於てさへも、クー・クラックス・クラン(K・K・K)は欝然たる勢力を有し、初め專ら人種問題にのみ鋒鋩を向けてゐたものが、最近では一般政治に對してまでも、特殊の發言權を要求するやうになつたと稱せられる。

關心の支點としての政黨　前段の社會過程の正體に就て語つた時、それは個々のものが吸引し融和して、新しい集團を作り、新しい種または全體を造る過程であるといつた。そして讀者も今や漸く、この提言の眞なる所以、重大なる所以を納得されたことと思ふ。生活は關心の自己主張であり、それは諸種の關心の協同團體である。而も關心が自己を主張し、調和ある發達を遂ぐるためには、複數の個體が群居し、且つ協同することを必要とする。かくして、人間の生活は必然に結合乃至集團の形をとつて行はれる。今政黨の關係及びその本質を敍述するに當つても、要するにこの原則の埒外に出づるものではない。ただこの原則をより具體的に說明するだけの話である。即ち次のやうにいふことが出來る。政黨はその成員に向つて、主なる活動の領野を提供するものである。詳しくいへば、個人の

鬪心がその最大限度にまで發揮される爲めには、どうしても黨派といふ一つの追撃的團體が必要なのである。この公理と認めた上は、それに基いて諸種の系論を誘導し出すことが出來る。その一つは國家とは團體的行動の精神の最も旺盛な一種の結合であり、從つて最も強力なる一つの結合であるといふことである。

國家の本質　集團的生活の鬪爭的姿態を叙述するに當つて、最初に鬪心から發足し、次にそれの體現者として政黨を眼中に置いた。ところでこの鬪爭生活の單位たる鬪心、及び政黨は何れも一つの特性を有つてゐる。それは前に鬪心の說明の項で一寸觸れて置いた如く、他にこれを抑ふるものがなければ、あくまで他を蹂躪しようといふ性質である。一切の鬪爭は鬪心及び政黨のかかる屬性によつて捲き起される。而も現實に於て見られる國家內部の鬪爭は、必ずしも鬪心のかかる性質に基いて絕對敵意の範圍にのみ踏み止つてゐるものではない。その範圍の外に相對的敵意から、相對的親和の間を逍遙してゐるのが鬪爭の姿である。鬪心の本性は抑へられなければ、他の一切を脚下に蹂躪せんとするものである、だから鬪心もしくは政黨の關係が、少しでも調和妥協の徵候を見せるものがあるとするなら、それはこの鬪心の本性を抑ゑるといふ外部的條件が現實に作用してゐるものと見なければならぬ。この條件とは何であるか。この疑問に對しては上來屢々解答を與へて來た、而もそれは要するに暗示の範圍を出てゐない。今ここに國家の本質の問題に結び付けて、この疑問により具體的に解答を與へて見よう。何となれば、國家とは要するに絕對的敵意の上に加へられた、これは一個の止め針だからである。

先にも述べたやうに、總ての政黨はその鬪爭の批判者として、最終最大の批判者を假定するやうになる。そしてこの假設的批判者の前に、自己の鬪心の徹底的追求從つてまた絕對的敵意なるものを抑制するやうになるのである。然らば何故に夫々の政黨はかかる無用の觀念的存在を造り上げて、その前に躬如たる態度を採るか。これ一面には人間の恐怖の本能乃至神祕的本能を反映せる觀念的所產で、人の自己卑下の欲望を滿足させる對象物であるかも知れない。だがさうした神祕的存在としての國家の意義は次第に薄れて來た。そしてそれに代つたのが、合理的妥協の所產としての國家觀念である。社會の分化著しくして政黨の數が多くなり、所謂小黨亂立の狀態が實現せらるるや、如何なる黨派も自分一己の力を以て他の黨派の總合に敵抗することが不可能となる。出る杭は打たるる譬への如く、一つの黨派が勢力を增し、擅に自己の鬪心を追求せんとするや、他の總ての黨派の聞

に自らなる結合提携が出來、前者の絶對的自己主張を威壓せんとする機運が出來る。この機運に逆行するものは自己の根本的破滅を伴ひ、この機運に順應するもののみ纔かにその存在を完ふする。かくの如きことが、夫々政黨に繰り返し經驗されて行くうちには、自ら彼らの間に抗し難き全體といふ意識が生れて來る。そしてこの强迫的意識の前に豫め自己の欲望を制限しようとするのみならず、進んでは自己の欲望を以て國家の、つまり調和的全體の欲望に擬しようと計るのである。世には國家とは全國民の謂であり、その欲望の總和であると說くものがあるが、これは一個のトルイズムたると同時に、心理學的に一個のナンセンスたるを免れぬ。同胞六千萬の欲望の雜然たる並存は、何ら社會的活動の働因となることは出來ぬ。さればといつて個人の心意は、全國民の欲望を取入れて、以て自己の活動の刺戟たらしむるには餘りに狹隘である。眞に人を動かし社會を活動せしむるものは、個人の欲望と及びこの欲望を屈折せしむる强迫的觀念あるのみである。個人の欲望にとつて政黨は一個の外部的、强迫觀念である。而して集團的欲望にとつて、國家は一個の外部的、强迫的觀念として表れたのである。

國家の擬態　國家は政黨の活動を拘束する一個の强迫的觀念であるが、この觀念の內容をなす國家的必要、乃至國家目的は如何にして決定されるか。一言して盡せば、それは要するに個人意識より、集團意識の形成せられるが如くに形成せられるのである。集團の欲望は個人の欲望と同質せるものであるが、然し別個の存在である。集團も矢張り食の欲望を有つてゐる。然もその集團的食慾を追求するに當つては、個人は往々自己の食慾を放棄しなければならぬ。萬人が自己の直接の欲望を抑制することによつて、始めて集團的欲望が追求されるのである。この際直接に滿足させ得るのは、只だ優勝誇示の欲望があるのみである。これと同じく、政黨も一度それが國家といふ强制者を意識するに至つては、自己の關心を追求する前に、先づ國家の關心を追求しなければならぬ。そしてこの國家の關心として擇ばれるものは、當然一般民衆の基本的欲求であらねばならぬ。これが所謂健康の欲求であり、口腹色の欲望である。して見ると、國利民福を口にする政黨者の職能は、先づ卒直に苗を植ゑ、車を引くことであらねばならぬ筈である。所が事實はこれに反してゐる。世の各種の鬪爭的團體は、それが權威を有つ勢力を增すに從つて、益々所謂卑しむべき口腹的活動を離れ、生產の生活を離れ、少量の物質的欲望と多分の觀念的欲望に沒頭するに至る。これ何故に然るのであるか、再び個人對集團の例に歸つて說明すれば、個人は

一面に集團的欲望を認容するのみならず、反面には自己の直接の欲望を以て、直ちに集團の欲望なりと誇示し、自らかく信ぜんとする强要的傾向を有つてゐる。ひそかに夢の中にまぎれ込んで人を悲喜せしむる小惡魔の如く、少數者の關心は威壓、暗示、模倣等の作用によつて、大衆の胸に幽幻なる夢を生ぜしめ、これを追うて正に夢遊病者の如からしめるものである。社會の食慾に沒頭して自己の食慾を忘るるものある反面には、自己の欲望に沒頭して而も自他共に社會に奉仕しつつあるかの如く考へてゐるものもある。直言すれば、萬人總てこの欺瞞の精神を有ち、而もその間にあつてこの精神を實現し得るものは、擇ばれたる少數の强力者のみである。かくて總ての政黨は國家を意識する瞬間から、自己の關心を以て國家の目的に擬せんとする狡智を抱くやうになる。尙ほこの狹い考へは過去の如何なる時に於ても實現されないことはなかつた。政府乃至執政者とはこの意味の成功者の事である。專制國家と立憲國家とは、總て程度の相違であつて、本質は依然國家の名を僭稱する少數者の支配である。いま國家の名によつて追求せられる少數者の關心を國家的より嚴密には政府的關心と稱すれば、この國家的關心たるや、普通一般の政黨的關心と何ら本質上の相違はないのである。只政黨的關心の中に作用せる諸種の關心の中、最も强烈にして他に向つて、最大の服從强制力を有つてゐるといふに過ぎない。

國家對政府　かくして國家とは國民の關心に基礎を置いて、政黨乃至個人に强制的に働き掛ける一つの觀念である。規制的の觀念なるが故に、それは嘗て現實の上に實現されたことはない、實現されるものは國民全體の自己滿足でなくて、一政黨の關心の滿足あるのみである。戰鬪力の最も大きな政黨は、國家目的の追求の爲めの一機關たる名目の下に、國家の强制權を借りる。そして他の政黨に對する自己の戰鬪力を、實力の二倍三倍にし、時には絕對化するのである。而も一旦かく倍加された戰鬪力を抱持した上は、必ずしも國家の一機關たる自己の職分に拘泥するものではない。人は自己の强力の程度に比例して自己目的を意識するものであるが、政府は國家に從ふことによつて力を與へられながら、次の瞬間にはこの力を利用して國家を從へることになる。國家の實現されざる程度に應じて政府が實現され、規制的觀念の影を薄くするに從つて、現實的物理力が支配して行くのである。國家と政府とは最初可能的一致に出發して現實的乖離に終るものである。この乖離がある極限に達すれば、政府の倒壞となり、同時に他の政黨によつての、同じ過程の新しき出發點が見出されるのである。出發點乃至歸着點に於ける國家と政府との關係は、時と

場合によつて一々相違するものであるが、大體に於て接近の方向に向いて進んで行くのが常である。この意味に於て、國家は決して實現されないが、次第に實現されようとしてゐるものといはなければならぬ。

政府によつて行使される法律は、公共の福利を目當てにしてゐるものであるといはれる。一般民法はその時代に許されたる、幸福と安寧との最少限度を表示する。人はこれ以上に奪はるることなく、これ以上に虐使さるることなからうと。然し乍らこの一定限度の幸乃至不幸が保證されてあることは、決して爲政者の意識的努力に俟つものでない。それは寧ろ國家によつて、爲政者の關心に課せられる一つの制限であり、國家の名を借して自己の滿足を計らんとするものにとつての必然の惡である。故に爲政者としては、能ふ限り一般的幸福の保證の增進を禁壓せんとするものである。安寧及び秩序の名に於て、民衆に對する掠奪權が少しでも侵蝕されることを防がんとするのは、現代に於ける支配者の最も根本的な關心であらう。然し乍ら、國家の實現の可能性が次第に大となつて行く樣に、法律も步一步公共の福利といふ理想に近づいて行くこと勿論である。

要するに國家內部に於ける諸關心の配置、從つてその鬪爭關係が變化するにつれて、政府の活動にも法律の職能にも不斷の變化があらはれる。關心の分化甚だしく、その間の關係が一義的鬪爭の狀態を離れるに從つて、政府は國家の意識に壓倒され易く、法律は報復主義の消極的態度を棄てて、一般的福利增進の業に參加する事を餘儀なくされるのである。

專制國家　專制政治にあつては、政府が國家との合體を時間的にも擴りの上でも、完全なものにしようと努めるのである。然し乍ら、專制政府はその爲めに、自らが國家の正當の機關であることを誇稱するに止まつて、進んで一般的關心に順應しようとする努力は全然ない。政府自身の行政的活動を原型にして、國家的關心を造り上げるので、國民は政府の認めた範圍外の關心をば抱くことを許されない。爲政者に取つて不都合な關心は、法律、道德、宗敎その他あらゆる手段によつて消し止められる。これは古くはローマ帝國から、近くは伊太利のフアッシスチ政府に至る一系列の政治形式である。かくして人々は自由に自己の關心を追求することを許されない。從つて社會過程の上の新しい展開發達が、行はれることがない。專制政府は文化發達の障碍者だと云はれるのはその爲めである。然し同じ專制政治の中にも、所謂德政なるものが行はれ得る。國家目的、卽ち一般的關心に對する或程度の步み寄りが行はれるのである。フレデリック一世及びフレデリック大王の治政

はそれであつた。かかる狀態は國際的戰爭の頻發に適應するために、内部的抗爭を減ずる必要から生れるものである。從つて所謂善良なる專制政治なるものは、一度古代社會の中に行はれたる後は、長く影を潛め、封建國家が突如として國際競爭の激流に捲き込まれた場合に、再び行はれたものである。

然し專制政治は多く惡政に墮し易い。これ一般的關心と政府の關心との離反に對する監視の機關を缺き、惡政が比較的大膽に行はれ易いからである。而も一度惡政がある極限に達し、民衆の基本的關心が脅かされること甚しきに至れば、政府が必ずしも國家を代表せずとの意識が明白となり、政府的關心對一般的關心は正面から衝突する。この過程は先づ或中間的階級が、自己の優勝欲を滿足せんがために、反政府熱を宣傳することによつて助長され、大衆の健康の關心の追求を通じて、政府の全部的又は一部的崩壞に終るのが普通である。一部的崩壞とは民衆の爆發に先立つて、政府が自發的にその法律を改めることであるが、專制政治の場合かかる自己改革は甚だ稀である。この崩壞に次いで成立する新しき政府は、何程かの程度に於て、一般的關心に忠實なるべしとの手形を發行しなければならぬのである。

而もこの手形は結局不渡りとなるのが原則である。そこで屢々僞はられた民衆は豫め自ら拘束されると共に、政府そのものをも拘束する一個の成文法を設けて置かなければ氣がすまなくなる。これが立憲政治の起原である。この種の過程は單に狹義の政治方面に行はれるのみならず、例へば勞働運動の結果資本家の絶對的產業管理權が制限されるやうになつて來たのも、全くこれと同じ現象である。資本家が嘗て封建君主に向つて爲したことを、勞働者が資本家に向つてしてゐるだけの話で、前の現象を單に政治的と見、後の現象を單に經濟的と見るのは皮層である。古き關心の支配に對する新しき關心の抗爭たる意味に於て、何れも政治的であると云はなければならない。

立憲的法律と猜疑の精神　前に法律はその行使者の關心を卒直に表現するものでなく、寧ろ行使者卽ち政府に對する制限であることをいつた。このことは立憲政治の實施された動機に就て最もよく看取される。一般的關心は自己を主張せんとして、その最小限度を設定する。少くともこれだけは滿足が與へられなければならぬといふのである。然かるにこれを憲法に成文化するのみならず、更に行政的活動がこの最小限度を侵さないやうに議會によつて監視せしめる。抑々政府に對して議會なる監視者を設立するの一事は、政府の